
無限に抗う反逆者

解読者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無限に抗う反逆者

【Nコード】

N0682M

【作者名】

解読者

【あらすじ】

未完のまま更新放棄。

序幕 八咫之黒羽

(10月17日 少加筆) (前書き)

本作は二次創作です。

「Fate/stay night」を基本とし、「Fate/hollow ataraxia」「ゼロの使い魔」「リムーブカース」その他の世界観や設定を用いて構成されています。

原作に準拠していない捏造された設定が加えられている為、本作自体には価値が無いと言えますが、

本作に何を見出だすかは読まれる方へ一任しています。

序幕 八咫之黒羽

(10月17日 少加筆)

無限に閉ざされた世界を解放し、無限に巡り続けた一人の英雄が役目を終え、無へと還る。

元より、全ては無から発生した。ならば全てが無へと還るのが道理。それは彼とて例外では無く……しかし、彼だけは”例外”だった。

無限の牢獄とも言える、全ての根源——全てが無の世界。此処に光は存在しない。此処には何も存在出来ない。

されど闇の中に独り——彼だけが存在している。

彼は死ぬ事を許されていない。

全てが無と化す場で在ろうとも、例え肉体が無と化し続けようとも、彼はただ存在し続ける。

死して尚も生かされる……それが、不滅の呪いを受けた者の末路だった。

気が遠くなる程の年月を重ね、記す事が出来ない程に戦いを繰り返した末に、牢獄へと追放された。

しかし、彼がそれを悲観するような事は決して無かった。

無へと還る事すら許されず、牢獄から抜け出す術も知らない彼は音も無い世界で、ただ歌を謡い続けていた。

彼は謡う。夜明けよ来たれ。

彼は願う。夜明けよ来たれ。

彼の望みはただ一つ、世界に光が在る事だけだった。

手にした全てを失おうとも、光在れと。

たった独りになろうとも、光在れと。

ずっと独りで在ろうとも——それが、どうしたと。

無限の牢獄、全てが無の世界。

此処に光は存在しない。此処には何も存在出来ない。

存在し得るとすれば……それは”混沌”だけだろう。

これは、そんな”彼”の物語——

時計の針が直に二時を指す。

魔力を込めた宝石の溶液で召喚の陣を描く。

一度でも失敗は許されない。二度目は無いと心に刻み、全霊をもつて対峙した。

「Anfang——」

人の身を、ただ神秘を成し得る為だけの部品と化す自己暗示。自身の魔術回路を起動する言葉を口にして、意識の灯を落とす。

「——告げる。」

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うならば応えよ」

地下室を魔力の奔流が満たしていく。

それに潰されるのを恐れて、視覚が自ら停止した。

「誓いを此処に。」

我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

汝三大の言霊を纏う七天……抑止の輪より来たれ、天秤の守り

手よ——！！」

——得も知れない、矛盾した感触を覚えた。

召喚陣の起動に成功し、召喚陣の起動に失敗している。
いや、確かに起動は成功している。

しかし、これは——ハカイされた？

失敗してしまったのか。

もしかしたら、何か見落としが有ったのかもしれない。
諦めつつも、成功しているという矛盾した感覚を妙に思いながら、
視覚が戻るのを待った。

……ない。

無いモノは無い。

成功すれば在る筈のモノは、そこにはナニも無かった。

「……失敗、か」

その呟きと共に、何故か、上の方で爆発したような音の後に衝撃が
響き渡った。

「一体何よ——！？」

走った。

混乱しながらも、とにかく走った。
地下室の階段を駆け上がって、爆発を起こしたであろう居間へと急
ぎ、

「扉、壊れてる！？」

歪んだ居間の扉が行く手を遮った。
押しても引いても、まったく開く気配が無い。

「ああもう……邪魔だこのおっ！！」

そんな扉を、どっかーんと蹴破った。

居間は滅茶苦茶になっていた。

何が上から落ちてきたのか、天井に穴が開いて、部屋の中は瓦礫に塗れていた。

その瓦礫に塗れた床に、何故か、頭から血塗れの男が不機嫌そうにして座っている。

この惨状の原因はアイツだ。

けど、そんな事より、もっと大事な事が一つあった。

居間に正確な音を刻む、破壊を免れた柱時計を見て思い出す。

うちの時計は今日に限って、一時間ほど早くなっている事を忘れていた。

つまり、今は午前一時……絶好調まであと一時間だ。

「……また、やつちゃった」

大抵の事は人並みにこなせても、私には一つだけ、遺伝的な呪いが

あつた。

もっとも大事な勝負時に、信じられないような大ポ力を仕出かす…
…病的な、うっかり。

「やっちゃった事は仕方ない、反省」

そうやって呟くも、やっぱり自分の馬鹿さ加減が腹立たしい。

カリカリとした心のまま、不機嫌そうなのを気にもかけず、睨んで来る男へ睨み返した。

「それで、アンタ何？」

言葉をかけると共に、兵隊のような黒い格好のソイツは呆れるような溜息と一緒に、不機嫌な気を霧散させた。

「第一声がそれか、まったく……とんでもない奴に呼ばれたな」

こんな酷い召喚は初めてだぞ。

と、そんな呟きを耳が拾って思わず唸ってしまう。

確かに居間を、このような惨状にした張本人はアイツ。

でも、この状況を引き起こす引き金を引いたのは間違っても無く、私だからだ。

「とりあえず、何か拭く物を貰えないか？ 君も血塗れの男などと問答したくは有るまい」

無地の白いタオルを血塗れの彼に渡した。

安物というわけでも無かったけど、ああまでも血が付いてしまったら捨てた方が良さだろう。

もつとも、そのまま捨ててしまつては、すわ事件かと通報されないから一度洗わねばならない。

しかし、あれだけ血に塗れようとモイツはピンシヤンしていた。見える範囲では傷らしい傷も残っていない。

霊体であるサーヴァントなら傷すら付かないだろうけど、これだけの惨状に遭つて尚も無傷という事は――

「――確認するけど、貴方は私のサーヴァント？」

サーヴァントとは英霊……ヒトが精霊の域にまで昇華した存在だ。それ故に魔力の塊と言つて良い程なのに、彼からは魔力の欠片すらも感じられない。

それでも、状況が状況だ。一応……ちょっとだけ期待しながら、聞いてみた。

「君の言うサーヴァントが何を示すかは分からないが、召喚に応じた者というのであれば、肯定だ」

召喚されるサーヴァントは聖杯より、この戦争に関する知識と時代に不自由されない程度の知識が召喚時に刷り込まれる。その情報を持たないというのなら、

「聖杯戦争とは、無関係？」

召喚に成功しても、イレギュラー。

自分のうっかりの為とはいえ、こうなっては仕方がない。

「聖杯……だと？　一つ聞くが、ここは冬木市か？」

つまり、『冬木の聖杯戦争なら知っている』ということはコイツ、魔術師？

でも、これだけ近くに居て魔力の残滓も感じさせないなんて、魔力殺しでも身に付けているのだろうか。

「ええ、そうよ。ここは冬木市で、聖杯戦争の為に貴方を召喚したのだけれど……」

彼は「ふむ」と相槌を付いて顎と口に手を添えて考えに耽った。

無言の間、時計が針を刻む音がやけに耳に付く。

「……先の問いに答える。無関係ではあるが、無縁ではないな」

「それじゃあ、もう一度確認するけど。貴方は私のサーヴァント？」

「違うな。私は英霊では無い、ただの人間だよ」

ちょっとした期待は、やはり裏切られてしまった。

これでは戦争に参加する前に終わってしまったようなものだ。

「……ドジったわ。あれだけ宝石を使っておいて、サーヴァントすら呼べなかったなんて」

「済まないが、その点は私に非がある」

……ちょっと待て。ソレは、アレか？

コイツのせいでサーヴァントの代わりに、人間のコイツが呼ばれた？

「それって、どういう事よ」

……少し、語気を押さえられなかった。

『常に優雅たれ』が、うちの家訓だ。

けど、コイツは私の一世一代の賭けを台無しにしたのだから、怒りを面に出してしまっても謂れは無い。

「此処に呼ばれるまでは、全てが無の中で延々と漂っていてな。

君が穴を開けてくれたお陰で抜け出す事が出来た」

「全てが無って？」

「何も無く、果ても無く、ただ暗闇でしかない場所。言うなれば牢獄か。」

暇で仕方なかったからな、君には感謝してもしきれん」

そう言つて、彼が頭を下げた。

……こうなったら、怒りを面に出したままにいる訳にはいかないか。死と等しい状況で僅かな光明を得た人間に対して怒るほど、私は不出来な人間ではないのだから。

しかしそれでも、全霊をもって臨んだ賭けが流れたという事実が私に溜息をつかせた。

「いいわ、許してあげる。不戦敗じゃご先祖様に顔向けできないけど……諦めるわ」

戦場に立つまでも無く、負けを認めるのは悔しい。

でも、サーヴァント無しで勝ち残れるほど聖杯戦争は甘く無いものだ。

資格も無くしゃしゃり出しまえば、無駄死にするだけだから仕方ない。

なのに、

「いや、諦めるのはまだ早いぞ？ 私がサーヴァントを代行すればいいだけだ」

なんて、コイツは言う。

本当に知っているのかと、私はまた溜息をつく。

「貴方、人間でしょう？ 魔術師でもなさそうだし、無駄死するだけよ」

「確かに、魔力は欠片ほども無いがね。それでも異世界でサーヴァントをやっていた」

人間の身でサーヴァント、しかも”異世界”なんてトンデモ話。……まあいいか。話半分で聞いてやろう。

「その異世界とやらのサーヴァントは、こちらのとは違うモノみたいね。

そうじゃなかったら最初に否定するだろうし」

「こちらで言えば使い魔の類だ。

大抵は動物、力量のある者は幻想種を召喚するが、例外として私が呼び出された。

数千年に一度も無かった例としてな」

向こうの世界では、魔術師であれば一人前となった証として、生涯を共にする使い魔を召喚するという。

その召喚の儀では自身に近い属性のモノが召喚され、主な役割は素材の探索、召喚者の護衛等々。

召喚者の力量を示す、一種のステータスとなっているらしい。稀に竜種を召喚する者も居るそうだ。

でも、彼は人間。武器や道具を扱う事は出来ても、幻獣と比べれば見劣りしている。

魔術は使えないみたいだから、考えられるのは武器の扱いに秀でている事だけと――

「それで、貴方はサーヴァント相手に戦えるの？」

「私には技も無ければ術も無かった。そんな人間が戦ったら、どうなるだろうな」

――アウト。どうやってもサーヴァントには勝てない。

「十中八九、死ぬわね」

「そうだな。召喚から数日で、召喚者と共に殺されたよ」

……それじゃ、目の前に居るコイツは何だと言うのか。

「生きてる様にしか見えないけど？」

「話はそこからだ。」

使い魔には契約の証として無差別にルーンが刻まれるが、これには召喚者との意思疎通、稀に特殊な能力が与えられる。

私に刻まれた物は記録にも無ければ、本来の能力も不明だったが……言うなれば、事故が起こった」

「事故？」

「契約と同時に解呪されていたのだ。後から分かった事だが、私の起源は”解放”だった。

そして、これは推測の域を出ないが……刻まれたルーンは不死や復活、再現の類だろう」

蘇生に関しては魔術でも、状態が良ければ不可能ではない。不死化も同じく、条件付ならば可能。

しかし再現や復元となると、魔法である『時間旅行』や『平行世界の運営』、もしくは『無の否定』に値する。

「なによそれ、魔法の刻印を持つてるって言うの？」

第二魔法である『平行世界の運営』はウチの家系の悲願。

目の前にいる何の変哲もない、ただの人間が魔法の体現者と信じる訳にはいかない。

「その世界の魔術師達は魔法使いを自称していたがね。」

実際、一般人だった私からすれば全てが魔法染みたものだったが」

少し話が逸れたと、彼は時計が刻む音に耳を傾けた。

「私の起源は”解放”。これには呪いや拘束に対する解除も含まれる。

平凡な人生を歩んでいれば判明する事も無く、また活かされる物でもなかった。

……だが、契約によって”事故”が起こった。

起源と矛盾して刻印が変質したらしい。上書きされ続ける、不滅の刻印にな」

……不滅、か。おまけに致命傷や損傷も直ぐに復元されるらしい。彼の言う事が本当なら、捕らえられる事も殺される事も無い、完全な不死者と言う事だ。

自身の死という可能性を除外出来るから、戦いに有利ではある。

「それ以外には？」

「無い」

……詰まる所、死なないだけの非力な人間。

それがサーヴァントと対峙すれば、是非も無し。

「それじゃ貴方、どうやって戦うのよ。死なないだけで殺され続けるのが目に見えるわ」

「それは私の昔話を聞いてくれれば教える。何分、話し相手がいる事自体が久しぶりだからな。

それ位は戦いを共にする代償として支払って貰おう」

なんて、トンデモ話を続けようとする彼が笑った。

顔の作りは御世辞にも良いとは言えず、平凡としか言えないような男だけど、

その人懐っこそうな笑みは悪くないかもしれない。

「戦いの中で貴方を知る、というのもありだけど？」

まあ貴方が死ななくても、負ければ私が殺されるし……いつか付き合ってあげる」

「そう言ってくれるのは嬉しいが、夜も更けているしな。君は休まなくて平気か？」

「サーヴァントを召喚してれば疲れてたかもしれないけど、大丈夫よ。徹夜も慣れてるし」

「それなら良いが……ああ、忘れる前に一つ言っておく事が有る」

「何よ？」

今のやり取りで何を思い付いたのだろうか。はて、思い当たるものは無い。

「私はサーヴァントと違って、君の魔力は一切必要無い。

疲労が少ないのは宝石分の消費だけで済んだのかも知れん。召喚時に、小さかった穴を無理やり抉じ開けたからな」

……ああ、そういうことか。

そういえば、令呪はハッキリと右手に刻印されているけど、パスが何処へも繋がっていない。

彼の起源によって契約が解呪されてしまった様だ。

しかし、無茶をする。

穴を広げる事が出来ても、維持するのは難しい。
抜ける途中で閉じてもしてたら、泣き別れの半身が居間に降ってき
てスプラッターなんて事になる。

不滅だというコイツなら先と変わらず血塗れで、何事もなく座って
いたかもしれないけど。

「流石に、上空からダイビングする羽目になるとは予想だにしな
かったが」

む、賭けを台無しにしておいて良く言ってくれた。もう謝ってあげ
ない。

「しかし……部屋を散乱させたままというのも、落ち着けんな」

そう言っただけが立ち上がると、周りを見回すように視線を動かした。
粗方見終わったのか、一度目を瞑り、

「――Restitution」

目を開けて呟いた瞬間、世界が軋む様な音を一度上げて――居間
は、完全に、元通りになった。

「……うそ」

魔術を使おうとすれば、魔力の流れを察知できる。

目の前で魔術なんか使われれば、どういつものか位は理解できる。

なのに前兆も無く、残滓も無く、理解すら出来ず……彼は”世界”

を塗り替えた。

「魔力も無しに……いや、魔力を使わず、どうやって？」

「それは話の最後にしよう」

どうだ、と言わんばかりに含み笑いをするソイツに、私は興味を持った。

「死ななかった私は、ただ復讐の為に生きた。

この身が刻まれ、焼かれようと、ただ復讐の為に生きた」

そんな話は有り触れている。どんな世界でも有りえる話だ。

そんな経験を思い出しているのか、話を始める前から彼は無表情になっていた。

「だが、その世界は私からすれば魔法使いの世界だ。

戦いの技が無ければ戦う術すらも無い人間が、魔法使いに敵うはずも無い」

その世界では魔法を使えぬ者は隷属し、使える者は貴族を名乗っていた。

現代を、平和を謳歌する人々には理解出来ないだろう。

結集し、立ち上がれば、何人たりとも倒せる事は歴史が証明している。それが善であっても、悪であっても。

だけど、魔法を恐れて立ち上がる気力すら起こらないのなら、そう
なってしまうのかもしれない。

「何度も襲い、何度も倒され、何度も敗走する……そして、あっ
けなく終わったよ」

彼が自嘲するように笑った。

「仇が死んだ。俺とは無関係にな」

良くある話。でも、この男にとってはそれが全て。

成し遂げても何も残らず、自らの手で終わらせる事もできず、その
時ほど運命というものを呪った事は無かっただろう。

「生きる目的も無くなって、死ぬ事も無い俺は彷徨った。
歳も取らず、生きているというだけで恐れられ、何度も殺され
た。

出会った友人と言える者達も寿命と共に去り、俺には何も無く
なった」

唯一の目的を奪われ、存在の理由を失くし、死を以って逃れる事も
許されず、ただ其処に在り続ける。

これでは死んでいるのと変わりが無い……いや、終わる事が無いの
だから正しく、生き地獄か。

「そのうち、彷徨う事を目的にしたよ。

世界を旅して、何度も遭難して、何度も幻想種に食われて、自
然に生きる原住民達に何回も遭遇した。

楽しかったよ。良い奴等ばかりだった。

ちよっとした病気や怪我を治してやったら物凄い勢いで喜ばれ

るし、増やしてやった収穫や大物を仕留めた時は皆で賑わった」

生き地獄の中で見つけた、ささやかな楽しみ。

他愛ない事でも、この男には救いになっていたのだろう。

「だが、留まったら繰り返すだけだからな。出会い、別れ、旅をして、また出会った。

別れ際に俺を友と呼んでくれた奴の、孫の子供に会ったことが有るんだが、

そいつがなんて言ったと思う？」

気まぐれに人を助けて恵みをもたらし、また旅立っていく渡り鳥。予想が付いた私は自然に、微笑んでいた。

「アナタハ、カミサマ？だとよ。

ちげーって言うてるのに、それから俺をカミサマだなんて皆が呼びやる」

そう、そんな存在は人々から見ればカミサマだろう。

「そんな時だな、俺が”幸せ”を思い出したのは……しかし、それも長くは続かなかった」

ソファーに深く座り、天井の阻まれた空を虚ろに見ている。

愉快そうに笑っていた彼は目を細めて、記憶の欠片を拾い始めていた。

「——世界が終わった。唐突にな。

大陸が千切れ、黒い影が業火と共に現れて、光と共に全てが消えた」

幸せを捨て、思い出して、それすらも無くす。
……到底、耐えられる事じゃ無かっただろう。

「俺はそれでも死ななかった。気付けば、砂漠に転がっていたよ」

世界が消えても、消える事が出来ず、行きついた先は砂の荒野。
絶望しようが死ぬ事を許されず、ただ無間地獄に落とされる。

……それを、人が耐えられようものか。

「あてもなく彷徨って数十年だか数百年だか。

はつきりしないが、壊れる前の世界、それも数千年前の世界だと気付いた。

それから終焉の原因を探しているうちに、魔法使いの始祖と呼ばれる男に出会った。そいつも別の世界から来たらしい。

ブリミル・ル・ルミル・ユル・ヴィリ・ヴェー・ヴァルトリ。

長ったらしい名前だろう？ 面倒だから”貴様”で十分だと、

よく擲ったよ」

故郷は違えど、共に異世界人。

共感を得るものがあつたのだろうか、二人は大して時間もかけずに親友と呼べる間になっていた。

「そいつは帰る方法を探していた。

俺は元の世界なんざ今更な事だったから興味無かったが、そいつを還す方法を一緒に探す事にした。

結論から言えば、そいつは帰らなかったよ。

唯一の送還法を見つけて、いざ実行したら世界が破滅しそうになつてな。

始祖の協力者…… 契約を結んだ現地人の三人と協力して、送還

陣もろとも吹っ飛ばして終わりだ」

まあ、そんなとき俺は見ただけだな。と彼が付け加えた。術の無い者がどうこうできる事ではないのだから、仕方ないといしか言えない。

そしてこの時に、これが世界が終わる元凶の一つと推測したと言う。

「それからブリミルが帰るのを諦めて、留まる事を決めた。あの戦いで無力だった俺は、どうにか魔法を使えないかと色々頼んだが、その時に魔力が完全にゼロと言う事実を知ったよ」

「ゼロって、ちょっと待ってよ。魔術師でなくても魔力は少なからず有るわよ？」

「ああ、有り得ない。普通の人間でも魔力は欠片ほどは有る。それが無い俺は、ある意味では特別な人間だな。開き直って自慢したら、奴に何とも言えない表情をされたよ」

『俺って何も出来ないんだぜ、凄いだろ！』
なんて開き直られても、彼も苦笑するしか無いと思う。

「結局、成果も出ずにブリミルも逝っちまった。
それから数千年、刻印の弊害で体を鍛えられない俺は技を鍛える事にした。

秀でる才能は無かったが、それでも形には出来たよ。

……だが、魔力の無い俺には魔術の類はどうやっても使えん」

鳥の囀りを耳にして、二人で窓に視線を移した。
思っていたより時間は過ぎていたらしい。空は紺碧から水色に変わり始めていた。

「ああ、もう朝か。まだ大丈夫か？」

「正直に言えば、ちょっと一息入れたいわね」

時間を忘れるほどの昔話。でも、入れ込んでいれば聞いているだけでも疲れる。

「そうするでしょう。茶か珈琲が有るなら私が淹れようか」

「紅茶が有るけど貴方、淹れられるの？」

「我流になるがね。さて、台所の場所を教えてください」

——正直言つて、似合わなかった。

そもそも、軍服のような印象を受ける黒服で、紅茶を淹れる姿が似合う人は居ないと思う。

そして彼の動作を見ていて思うのは、無造作の一言に尽きる。

乱暴でなく粗雑でなく、茶器を破壊するというような無礼は手馴れている感じから無さそうだけど、

やはり無造作な印象を受ける。

淹れる過程は、まったくと言っていい程、作法に則っていない。

しかして差し出された琥珀色の茶は、使った茶葉にしては良い香りをしている。

悪くはなさそうだと、私は口を付けた。

「……………」

「ああ、不味かったか？」

衝撃とも言えず、感嘆とも言えず、無言で居た私に彼は不安げに聞いてきた。

「いや、でも……あの茶葉からこの味を出すなんて不思議ね。こんなの、初めてだわ」

「以前の世界でも中々に好評ではあったのだが、皆が君と同じく変わった味だと言っていたよ。」

少々不安だったが、その様子なら満足してくれたようで安心した」

……彼は引き出しが多そうだ。

なにせ数千年を異世界で過ごしていたのだから、私の知らない料理も知っているだろう。

今度なにか作らせて見ようかと思いつきながら、その不思議な味を楽しんだ。

「さて、話は途中だが長くなる。

昔話は気が向いた時にでもするとして、私の扱う”式”について話そう」

「式って魔術の事？ 貴方、魔力は無いって言ったじゃない」

「魔力を用いる式は使えん。故に、魔力が必要の無い式を組んだ」

「組んだって……数千年それだけを研究しても、怪しいものよ？」

魔術とは等価交換が原則。それは科学だろうと、余り変わらない事。それだけ、無から有を手に入れる事は難しい。対価無しで成し得れば魔法と言えるかもしれない。

それを、

「——継ぎ込んだ年数は数万だ」

なんて、どでかいスケールを持つコイツは成し得たそうだ。

彼は元手が何も無かったから、膨大な時間という代償を支払ったらしい。

これにはもう、私は溜息を付くしかなかった。

「……あつきた。よくもまあ諦めなかったわね」

「生憎、時間だけはあつたものでね」

彼の言う『ブリミルの何とも言えない顔』をしていた私を見て、彼は愉快そうに微笑んでいた。

「それで私の”式”だが……文字通りに、反則技だ。

世界を数値化し、書き換え、変換して発現させる。

習得すれば誰でも使える代物ではあるが、反面、無限と等しい情報に晒されるから発狂するだろうな」

……習得した末に廃人になるのなら、意味が無さ過ぎる。

そもそも、そんな酔狂に代償を支払う者はよほどの暇魔人か、馬鹿ひまじん

者だ。

「まあ引き起こせるものは大魔術止まりだ。敢えて習得しようとする人間なぞ、私以外には居らんだろう」

「……でも、ここまでいくと魔法と同等の魔術ね」

こんな輩の存在を協会が知れば、もれなく封印指定を授かるし、出来るだけ隠したほうが良さそうだ。

もし気付かれたとしても、殺しても死なない上に、全ての拘束を解く彼には意味が無いかもしれないけど。

「変質特化の大禁呪と言ったところだな。それと、私の起源を式で紡いだ剣がある」

そう言って、彼はその手の虚空に色を付けた。

投影魔術。グラデーション・エアとも呼ばれるそれを、正に二つ名通りに行使した。

本来の投影魔術とは、失われたものを投影するかの如く存在させる魔術だ。

虚ろでしかない投影は世界に修正され、やがて消滅していく……けど、彼のモノは違う。

彼は世界そのものに色を付けるように、ハッキリと形を成していた。

けど、ソレは――

「それ……本当に……剣……？」

剣に見える。違う。

剣として見える。違う。

ソレヲ リカイシテハ イケナイ
酷く頭が痛む。

思わず、その剣から視線を外した。

「剣であり、剣ではない。

悠久を生きる私自身を形にした物だからな、目に映せても理解を超えるだろう」

息苦しさに潰されて苦しむ私を見つめながら、彼はそう言った。
なまじ波長を合わせられる魔術師という存在には、毒になるというのを知っているのかもしれない。

「っはあ……」

彼が剣を消し、重圧から解かれて息を整えた。

「意識して同調しない限りは大丈夫だと思うが、気を付けてくれ」

……後から言われても困る。

まったく、”解放者”自ら重石を載せて苦しむ人を解放する、なんて事はしないで欲しい。

戦いの前に知っていなければ危険に陥るだろうから、あまり責められる事でも無いけど。

「それで、まだある？」

「風の守護がある。風の精霊に『皆に愛されている』と言われたな。

起源の制約で行使は出来んが、呼び掛ければ矛を収めてくれる程度には協力して貰えるだろう」

永遠の命に、救いと恵み。おまけに風の精霊に好かれてる、か。まあでも、肯定されたら信じちゃいそうだけど、

「貴方、『実は本当に神様でした』なんて言わないわよね」

なんて、「冗談染みた感じで聞いて見たりする。

「私はただの人間だ。と言いたいところだが、解釈次第では『力ミサマ』だろうよ。」

数千年も生きるような輩は、化生か神のどちらかだ」

「それどころか、過ぎした年月が数万年なんて……」

およそ、人の歴史が記されるよりも長き時。そんな馬鹿でかいスケールを持つコイツは――

「済まん、下手をすれば億を越えて兆だ」

――星の寿命よりも長生きでしたとさ。

「なんかもう、神様でいいわよ、貴方」

「そんな投げ槍な……」

うんざりした私に対して、彼はそう言って苦笑していた。

「……ああ、そうだ。大事な事を忘れてたわ」

彼の話に入れ込んでいて忘れていた。自分の事ながら、本当に厭きれる。

「貴方の事、何て呼べば良い？ カミサマ？」

「たわけ」

即答である。バツサリと両断である。暫く二人で笑い合ってしまった。

「最初の名は捨てたが、以前はケイオスと名乗っていた。
元日本人として名乗るのなら……黒羽矢能だ」

……ケイオス
混沌、か。

そう名乗った理由は分からないけれど、彼に合っている印象を受ける。

そうでなければ、彼の境遇では壊れていたかもしれない。
束縛されない渡り鳥として生きる事を選んだから、耐えられたのか
もしれない。

「でも……その格好で、その名前だと、カラスじゃない」

「ああ、コルウスと名乗っていた事もあるな」

……そういえば、カラスの神様を何時か聞いた事がある。
世界中に似た伝承があるけど、ケルトの神話では戦神の象徴。日本
では勝利を導く太陽の使者、八咫鳥。
彼の名は、その八咫鳥に肖っているみたいだ。

「それで、君は？ 何と呼べばいい」

「遠坂凜よ。好きに呼んでもらっても構わないわ」

彼が私の名を呟き、頷いて、微笑んだ。

「凜、か。良い名を貰ったな」

この名は私の誇りであり、そして今は亡き両親との絆だ。
しかし、そうやって改めて褒められると少々照れてしまう。

「ありがとう。それじゃあ、よろしくね。矢能さん」

序幕 八咫之黒羽

(10月17日 少加筆) (後書き)

様々な世界を読み漁る内に、思い付いた設定を書きなぐる。

そして、なんとなく、気紛れで会話を作成した。

書ける訳が無いと思っていたがしかし、予想以上にタイプが進む。

苦手な肉付けもすれば、投稿の価値もあるかと計10時間を通してやり終えた。

”作文が出来ない”部類の私でもやはり、”作文を描く”事はできるようだ。

たった、この6行を綴るだけで、十数分がかかっていると言えれば理解してもらえらるだろうか。

本作の起源はもちろんゼ口魔。IFという二次創作の世界に入り浸る切っ掛けになった世界だ。

原作は1巻の購入で止まり、私には描く資格は無いといえよう。

しかし、機会があれば本作の起源を描いて見たいと思う。

本作の世界は型月のFateを用いている。カタチ無き主人公に、カタチを現す光となった世界だ。

この世界を知った切っ掛けは本サイトに投稿されている、某吸血鬼

を手籠め？にしようとしている無限の剣製使いの話だ。

言って置くが、赤い弓兵でもなければ正義の味方の某でもない主人公だ。本サイトでは知っている人も多いと思う。

最初に、剣製の詩に共感した。

しかし、その果ては虚しき幻想。それでも、生き様に憧れた。

作者氏達の紡ぐ世界を覗き見て、そして原作の世界へと至った。この世界は、私の世界を塗り返す存在だった。

まだ原作を知らない方は、公式サイトから体験版をやって見て欲しい。

最後に、黒羽矢能の運命を定めた解呪の方程式「リムーブカース」

死に際に神を呪い、輪廻の呪いを受け、生きる目的をも失くした男の物語。

本話には彼がモデルになった（もとい、パクった）エピソードがある。

彼が居なければ、黒羽矢能の存在は虚ろでしか無かっただろう。

そして、彼の物語と世界を共有するトレジャーハンターの物語「DADDY FACE」も併せて、お勧めしたい。

これで30分少々か。やはり作文は難しいな。

後書きを長々と綴るのもどうかと思うので、ここらで終わらせよう。

世界を綴る方達と、世界を造る方達に尊敬を。

この世界に訪れた貴方に、感謝を。

弓兵代行

サーヴァントの召喚は成功した。でも、召喚に応じたのは人間だった。

ある意味では失敗とも言えるけど、その人間はトンデモなジョーカ―だった。

サーヴァントよりも不便な点はいし、どうしても見劣りはする。

それでも、私より戦いを知っている人なのだから、なんとか勝ち残れるかも――いや、勝ち残らねばならない。

手札には恵まれなかったかもしれないけど、彼は切り札になり得るモノを持っていたから。

彼の戦闘能力に関しては問題無い。英霊と比べれば最弱と言えるけど、死ぬ事が無いのなら話は別だ。

何度と敗走する事になっても、機を見つけて切り札を使えば……勝ちになる。

彼の切り札は正しく、一撃必殺。

斬られたという概念を上書きする、切断解答。

圧倒的な質量で押し潰す、破壊解答。

物質の存在を解放し、制限しなければ星をも滅ぼしかねない、対滅解答。

彼は対滅解答を組んだ時に一度、前の世界を滅ぼしている。制限設定の式を、すっかりと忘れていたそうだ。
その史上初、史上最高、史上最後のうっかりは世界を破滅させたらしい。

……私も、気を付けよう。

とにかく戦闘に関しては問題無い。問題があるのは私の方だ。

私は魔術師としては一流を自負している。それでも、サーヴァントと対峙すれば生き残る事は難しい。

戦闘になれば、彼は私を守りきれないかもしれない。

「戦闘はなるべく避けて、当面は索敵。生き残った連中を蹴散らすのが妥当だろうな」

「……そうね。冬木の管理者たる私が、逃げ回るってのは気に入らないけど」
セカンドオーナー

「済まん、我慢してくれとしか言えん」

契約は彼の起源が阻害してしまうので出来ないけど、騎士としての主従の誓いを立ててくれた。

所詮口約束に過ぎないと言われても、私の戦いに付き合ってくれるのだから文句は無い。

私の指示が許容範囲なら、彼は出来る範囲で協力すると誓ってくれた。

戦闘時は彼の事をアーチャーと呼ぶ事にした。

弓を持っていなくとも、弓兵のクラス条件を満たしているらしい。

本物のアーチャーが出てきた時は別のクラスを名乗って、相手を攪

乱する手もある。

でも、一つ大きい問題があった。

聖杯は霊体だから、同じ霊体であるサーヴァントにしか触れる事が出来ない。

彼は人間であってサーヴァントではないから、勝ち残っても聖杯を得る事が出来ないのだ。

どうにかしてサーヴァントを手に入れなければならない。

マスターを失ったサーヴァントと私が再契約できれば幸いだけど、マスターの殺害も視野に入れておこう。

「今日の所は単独で街を周ろうと思っているが、連絡手段が無ければ危ういな」

本来なら令呪かパスを繋げば出来る事だけど、契約が出来ない以上は仕方無い。

彼が代わりにと、私が持ってきた市販のネックレスに”接続”の式を刻んだ。

「来いと言えば、何時何処だろうが一瞬で行ってやる。だが、太陽やブラックホールの近くは勘弁してくれ」

流石に俺も抜け出せん、と冗談交じりに言いながら私へ放り投げてきた。

見た目も中身も、ただのネックレスのままだった。魔術的なものじゃないから私には分からないけど、同調をすればパスのように繋がるらしい。

……異性からの贈り物、か。

元は私の物とはいえ、知り合いの神父を除けば初めての事だ。それが手渡しで、戦いに関する道具でなければ、その類の感情が起きる事も有ったかもしれない。

……まともな贈り物でも、コイツには無造作に投げ渡される気がするの何故だろう。

「さて、探索がてらに街を把握してくる。凜はどうする？」

「今から支度すれば間に合うし、学校へ行ってるわ」

「了解だ。だが、不意打ちには気を付けろよ？ 呼ばれる前に殺されたらどうにもできん」

「甘く見ないでよ、それくらい弁えてる。それに人目がある所で無茶はしてこないと思うし」

「……そういうのをな、油断と言っただ」

……ああ、そっか。

マスターがそういう方針なら、形振り構わず襲撃してくる事も考えられるのか。

「……ごめんなさい。私の方が甘く見てたみたい」

「四六時中気を張れと言わんが、本当に気を付けてくれ。取り返しがつかんぞ？」

「そうね……有り得ないと思う事でも、可能性として一度考え直してみるわ」

「そうしてくれ。夜明けには戻るが、何か有れば何時でも応じよう」

「ん、分かった。いつてらっしゃい」

彼が玄関へと、居間の扉を潜ろうとして立ち止まった。何だか困っている様子でこちらを見ている。

「済まん、一つ頼みが有る」

「何よ？」

よほど言い辛い頼み事なのだろうか、そのまま押し黙られてしまった。知り合ってから数時間しか経っていないけど、彼にしては珍しく思う。

「……いや、下らん事だ。忘れてくれ」

それ以上、彼は何も言わずに居間を出て行った。少し気になるけど……まあ、問い詰める事でもないか。

一人きりになった居間を出て、支度をしに自室へと向かった。

- - - - -

空に太陽は無く、世界を闇が支配している。
見慣れた双月の無い空を、黒い鴉はただ見続けていた。

——聖杯戦争。

鴉になる前に見た、冬木の戦いがあつた世界の物語。
鴉となるうが、未だ存在に刻まれている程に鴉が焦がれた世界だ。
しかし、ここには赤い外套を纏う弓兵は呼ばれず、鴉が召喚された。

——有り得ない。

あの二人の縁は確固たる物だ。それは鴉だろうが干渉出来る筈が無い。
しかし、穿たれた穴は確かに、鴉の元に繋がった。

彼の存在は守護者となった時点で、時限は疎か、次元をも越える。
ならば何故、彼の元に繋がらなかったのか。

「……奴が、居ない？」

一つだけ、有り得た。
彼の存在が生まれた世界。彼の存在が、英霊の座に登録される前の

世界だ。

「ここは、原初の世界か」

終わりが無いものにも、始まりは有る。

しかし、始まりは一度きり。それを過ぎれば止まる事は無い。

もし、この世界で彼が生まれなかったら、彼は無間地獄に落とされる事も無くなるだろうか？

答えは否。

原初の並行世界が彼を生み出すだろう。彼の存在が生まれるのは、既に世界の理だ。

「……クソが」

鴉が神と等しい時を生きようと、覆す事の出来ない理。魔法と等しい術を得ても、覆す事が出来ない事だった。

太陽が昇る。

空を満たす闇は光に圧倒され、黒から青へと姿を変えていく。

光をその身に纏いながら、鴉は考えるのをやめた。世界を巡る渡り鳥らしく、気促に過ごしていこうと。

もし、それが気に食わなくなったら――

巡るだけだから。

——全てを壊して、

弓兵代行（後書き）

F a t e といえば、クラス設定だよね！

つー訳で、それらしく書き殴った鴉さんの紹介です。

クラス : S e a r c h e r / 探究者

マスター : 無し（遠坂 凜）

真名 : 黒羽矢能（ケイオス） #どっちも真名扱い

性別 : 男性

身長体重 : 1 7 3 c m 6 1 k g

属性 : 混沌・善

筋力 F

魔力 -

耐久 F

幸運 C

敏捷 F

宝具 -

#幸運まで最低だったら流石に可哀想だった

#訂正：ランクE↓Fに修正。サーヴァント未満って事で。

・クラス補正

サーヴァントではない為、無し

・保有技能

戦闘続行 : E X

不死者の行進。

損失を即時復元する事で、常に万全な状態での戦闘が可能。

但し、異物が有る場合は復元に支障を来す為、排除されるまで行動が制限される。

解答式 : E A + +

持たざる者の答え。

魔力や魔術回路を必要とせず、大魔術に相当する事さえ一小節で行使する。

式自体は予めに決められた、単一の効果しか得られない為、属性を付与する小節を加える事で複雑化を可能としている。

心眼（真） : B

悠久を戦い抜けて蓄積された戦闘経験。

脊髄反射レベルで最適な戦術を選択する事で、僅かな可能性から勝利を掠め取る。

但し、未知の状況下に於いては大きくランクが下がる。

投擲：C

あらゆる物を弾丸として放つ技能。

- - - - -

アーチャーに該当すると本話で書いていますが、それ程の技能と武器は持っていません。

何故クラス条件を満たしているかは追々描かれます。

8月22日少々追加。

不滅の刻印ですけど、エネルギー損失も補うので空腹になったり窒息する事ありません。

駄菓子菓子、鴉は気紛れに食事をします。

久しぶりに現代の味を愉しもうかと思ったようですが、彼は文無し。ひーいずぶろーく。

それに気付いて小遣いを貰おうとして、やっぱり我慢する事にしたみたいです。

流石に、数千億年も年下の凜に頼むのは気が引けたのでしょうか。

大型獣でも狩って物々交換出来れば良いのですが、現代では無許可の狩猟は違法。困ったものです。

今の時刻は夜の八時。校門は既に閉じているし、生徒や教師達も居ないだろう。

私のテリトリーである学校に、結界が仕掛けられていた。調べる為に、昼の内に目処を付けていた所をアーチャーと共に回って行く。

結界とは術者を守るモノ。そして、中には攻撃的なものもある。

魔術師に対しては効果が薄い、攻撃的なものならば普通の人は耐えられないだろう。

そして、その結界は攻撃的——生命活動を圧迫する類のものだった。

「……搾取、か」

それを目にした彼が解読^{デコード}と呟き、すぐさまに結界の内容を理解しようだ。

「へえ、私でもそこまでは分からなかったのに」

「復号化は基本だからな。これが出来なければどうにも出来ん」

彼は結界などの違和感に分かるそうだが、実際に視認していなければ完全には認識できないらしい。

でも、視認さえしてしまえば一言で解読できるという。

「マスター、こいつは潰しておいた方が良いで。形振り構わず起動されたら部外者を溶かされかねん」

「そう?……それじゃ、消すわ」

私は聖杯戦争の参加者である前に、この地の^{セカンドオーナー}管理者だ。おいそれと部外者を巻き込むわけにはいかない。

魔力を通し、左腕の魔術刻印が燐光を帯びる。

刻印に記録された術式で結界の基点を消去する――

「――駄目。私じゃ手に負えない」

効力を弱めたくらい、か。なかなか頑丈に作られている。

「ふむ、やはり魔術では辛いかな」

「魔術ではって、貴方なら消せるって言うの?」

睨む私に対して、彼は不適に笑った。

「造作も無いな」

「……早く言いなさいよ」

アーチャーが基点の前に立ち一言、「L i b e r a t i o n」と呟いただけで跡形も無く消え去った。
まったく、これじゃ無駄に魔力を使ってしまった様なものだ。

「ほんと、魔術と比べると便利よね」

「魔力の流れのように、変動するモノを操作するには骨が折れる。一長一短と言ったところだな」

それから私は案内に徹する事にした。私よりもこの手のモノに長け、魔力消費も無い彼が抹消を担当。

彼自身が反則技と言ってはいたが……やはり、等価交換を無視した彼の所業は目の毒だ。

魔術行使する痛みや疲労すらなく、たった一言で抹消していく様は魔術の存在意義を疑ってしまう。

まあだからといって、廃人になってまで得たいとは思わないが。

「七つ目か。これが起点の様だな」

そして最後に訪れた屋上に、ソレがあった。

「……これ、最低だわ」

私でも理解できる程に強力な、人の身では成しえる事の出来ない境界。

サーヴァントが持つ宝具クラスの、中のモノを溶かし喰らう血の要塞だ。

それを知りながら仕掛けたのなら……マスターは外道としか思え

ない。

「アーチャー、サーヴァントってそういうモノ？」

内に潜む怒りからか、私の声は冷ややかに響いた。

「連中は基本的に霊体だからな、サーヴァントは精神と魂を糧にする。

マスターから提供される魔力がエンジンを起動させるモーターの電力とすれば、ガソリン。

要は燃料といった所だ」

「モーター程度じゃ力が出ないって事ね」

「自前の燃料を持っではいるだろうが、戦いの最中にガス欠になる訳にはいかんだろう。

戦場での略奪や接收が是とされたように、現地調達は効率がいい」

だからと言って無関係な人々を襲い、殺すなどに見逃す訳にはいかない。

「そうね。でも、好き勝手されて黙っているほど私は御人好しじゃないわ」

「ならば仕掛けた奴には鉄槌を下すとして……消すぞ？」

……彼の起源は解放、それに派生する解除と解呪。

悠久を形にした宝具とも言える彼の剣ならば、宝具クラスの結界にも対抗できるか。

「ええ、お願い」

彼が起点に近付き、その手に剣を現そうとして――

「なんだよ。消しちまうのか、もったいねえ」

背後から上がった声に、私達は振り返った。

給水塔の上。十メートル程離れた上空で、そいつは私たちを見下ろしていた。

夜に溶け込む深い群青。その装いと同じく青い髪。

つりあがった口元は粗暴で、獣臭じみたものが風に乗って伝わってくる。

「――これ、貴方の仕業？」

「いいや。小細工を弄するのは魔術師の役割だ。

オレ達はただ命じられたまま戦うのみ、だろっ？その兄さんよ」

この男には人間に見える筈の、彼の異質さを見抜いている……！

「やっぱり、サーヴァント……！」

「そうとも。で、それが判るお嬢ちゃんもオレの敵って事でいい

のかな？」

背筋が凍った。

飄々とした男の言葉が、吐き気を覚えるほど恐ろしく感じる。

聖杯戦争は始まってもない。しかし、出会ってしまった。

マスターが協定を無視する輩ならば、ここで命を賭して戦わねばならない。

「……ほう、ヤル気か？ 背水で戦いに臨むとは、大した自信だな」

アーチャーが私の前に出る。彼の手には漆黒の剣があった。

普通の剣とは違い、握りが刀身に対して垂直……あまり見かけない、ジャマダハルと呼ばれる剣。

「いいねえ、そうこなくっちゃ。話が早いヤツは嫌いじゃあない」

男の腕が上がる。

今まで何一つ握っていなかったその腕には、

血で出来ているような紅い、二メートルもの凶器が姿を現した。

「——ランサー」

「如何にも。そういうアンタのサーヴァントはセイバー……って、感じじゃねえな。」

いや、そもそもテメエ、何者だ？」

彼が人間でありながら、英霊に似た波長を感じる異状さに気付いたか。

「……擬装か？ 真つ当な一騎打ちするタイプじゃねえなデメエは。って事はアーチャーか」

騎士の匂いを感じるのか、否定された二つのクラスから残された彼のクラスを導き出す。

「いいぜ、好みじゃねえが会ったからにはヤルだけだ。

そら、弓^{エモ}を出せよアーチャー。それでも礼は弁えているからな、それぐらいは待ってやる」

「――」

彼は答えない。

倒すべき敵に語るべきなどないと、剣^{はがね}のような背が語っていた。

……いや、彼は騎士らしく私の言葉を待っているのか。

「それじゃ、お手並拝見ね。任せるわ」

「ああ、任された。君は離れている」

自分の非力さが齒痒い。

しかし魔術師と言えど、人間の身でサーヴァントと対峙するのは自殺行為だ。

私は屋上のフェンスを越えて、この場を後にした。

- - - - -

「はっ、一応は騎士ってトコか。安心しな。テメエを素通りにしてお姫様を殺す事なんざしねえよ」

「巻き込む訳にはいくまい。それに、貴様のマスターは話が別だろっ？」

「……違えねえ」

その言葉で、からかう様に笑みを浮かべていたランサーに影が差す。自身のマスターが気に入らないのだろう。その顔には不機嫌さが滲み出ていた。

「いくぜ」

繰り出されるは突風とも言える必殺の突き。槍の英霊となれば連撃も可能。それはしかし、

「……変わった芸風だな、おい」

突きに合わされた剣が、澄んだ金色の音を響かせて槍を逸らした。流されたとも言えず、弾かれたとも言えず。ただ互いが無防備となっている。

異質な剣技に対して、ランサーは間合いを保ったまま様子を見ていた。

「殺さず、殺されない術を探していた時期があつてな。」

——もつとも、貴様の様な真つ当な相手でなければ意味も無いが」

これは自身が傷を負わなくとも、守護する対象を直接襲われては使えないものにならない。

言い終わるや否や、突きが繰り出された。だが、それは変わらず漆黒の剣に逸らされるだけだ。

……手抜きか。手に残る感触が珍しいのだろう。ランサーは笑みを浮かべながら突きを繰り出してくる。

しかし、やはり欠点に気付かれた。

一撃を逸らされた槍の英霊は、その身を翻して私の胸を蹴り上げる。飛ばされた勢いのままフェンスを蹴り、そのまま校庭へと跳んだ。

- - - - -

黒と青が校庭で対峙している。

……彼から離れすぎるのは愚策。

ランサーと出会い、戦いに臨む事になったのなら、他のサーヴァントに襲われる事も考えられる。

戦いの余波に巻き込まれない範囲で、彼が対応できる範囲に居なければならぬ。

校門を背にして、念の為に辺りを警戒しながら私は見守っていた。

「仕切り直した。少し本気でいくぜ」

「そうするでしょう」

その言葉と共に、黒が疾走した。

「バカが、弓兵風情が接近戦を挑むか……！」

剣の長さは１メートル程。それは、槍が届く範囲では届かない。
——何も無かった筈の左手に、漆黒の剣がもう一本無ければ。

「はっ二刀使いか！」

迎撃する神速の槍に、弓兵は足を止めて応じる。

彼の剣技は二刀が本領なのだろう。澄んだ音を響かせながら、じりじりと弓兵が近付いていく。

だが、難いだ槍を受けた双剣が弾き飛ばされた。

「……なかなか面白い剣技だが、ちいと力量不足だったな」

漆黒の剣を手放した黒き弓兵に対するは、紅き槍を持つ青い槍兵。
一撃で決めるつもりなのか、ランサーが大地を踏みしめる。

放たれる一撃。

しかしそれは、今まで無かった漆黒の外套を身に纏う弓兵の、弾き飛ばされた筈の黒い双剣に阻まれた。

「——Shall we dance？」

「ほざきやがれ！」

またも連撃の応酬に入る。

視覚を越える速度で突きが繰り出されるが、その槍を悉く逸らし、突きと斬撃を交え、また逸らす。

剣戟の最中、漆黒の剣が幾度も弾き飛ばされていく。

だが、彼の手には闇より作り出していると言わんばかりに、剣が現れる。

埒があかないと思ったのか、双剣を弾き飛ばすと同時にランサーが大きく間合いを取った。

「……二十一。それだけ弾き飛ばしてもまだ有るか」

「どうしたランサー。踊りの途中で抜けるとは無粋だぞ？」

「減らず口を叩きやがる。

……テメエ、何処の英雄だ。二刀使いの弓兵なんぞ聞いた事があるええ」

「言うなれば鴉だな。——貴様に縁があるバイヴ・カハと同じく、な」

「ほう、オレを知っていると言うかアーチャー」

ランサーが一分の悔りも無く構えた。

その手に持つ槍の穂先は地上を穿つかのように下がり、その双眸は目の前の男だけを捉えている。

「ならば喰らうか、我が必殺の槍を」

「嫌だと言つても止めんだろくに」

獰猛な笑みを浮かべながら、ランサーの体が沈む。

同時に、茨のような悪寒が校庭を蹂躪した。

今この場で、呼吸を許されるのはランサーという戦士だけだ。
その手に持つ槍が、本当の姿で迸る瞬間を待っていた。

……やられる。

アレがどんな宝具か知らないけれど、彼が死ぬ姿を幻視する。
彼は死なないと言った。しかし、倒されるだろう。そうとしか考えられない悪寒が私を支配した。

彼が負ける。そして私は殺される、のか。

……それでも、私は彼を助ける事さえ許されない。
私が指一本でも動かせば、それが開始の合図となってしまう。
だから、彼の敗北を覆す事が出来るのは――

「――誰だ………!!」

――私達が見逃していた、第三者の存在だった。
走り去っていく後姿は見間違える事も無く……学生服？

「生徒！？　まだ学校に残ってたの!？」

ランサーが目撃者を追っていった。アーチャーは駆け寄る私を待つ

ている。

「どうする、マスター。奴が戻ってくれば君を襲うかもしれん」

言外に、彼は命を賭してまで助けるかと言う。

……これは私のミスだ。周囲の警戒も忘れ、彼等の戦いに魅入っていた私の責任。

「……アーチャー、追って！」

「——Acceleration」

彼の姿はその一言で私の前から消え失せた。

間に合ってくれればいい。間に合ってくれればいいが……。

「なんて……間抜け」

自分の迂闊さを呪う。

目撃者は消すのが魔術師のルールだ。それが嫌だから、そうならないようにしてきた。

今までそうしてきたのに……今日に限って、失敗した。

月の光も無く、校舎の中は闇に閉ざされていた。

ひどく冷たい廊下には床に伏した生徒と、立ち尽くしている黒い弓兵が居た。

彼はただ、胸から血を流す生徒を眺めていた。

「アーチャー、このまま追える？ランサーがマスターの所に戻るかもしれない。」

せめて、マスターの所在を確認しないと割に合わないわ」

「……期待するなよ」

再び、彼は私の前から姿を消す。

残されたのは私と、床に倒れ伏した生徒だけだ。

……直視できない。

それでも、直視しなければならない。

「一突き、か。 心臓をやられてちゃ助からないわね」

それでも、まだ死んでいなかった。断末魔というか、微かに息がある。

私は傷を癒す事ができるが、既に手遅れ。

「……顔、見よう。それくらいは、しなくちゃ」

震える指と、崩れそうになる膝を理性で押さえて、伏せている生徒の顔を確認した。

その顔を見て、

ガツーンと、

後頭部をハンマーで叩かれた気が、した。

「……なんだって、アンタが」

- - - - -

世界の束縛から放たれた鴉が、冬木の地を駆け巡る。

鴉の目当ては最速と謳われる槍の英霊。

鴉といえども、放たれる前に距離を稼がれたら見失うのが道理。
新都のビルを、重力を無視して駆け上がった鴉が世界へと帰順する。

「――Detection」

槍の英霊は一度見ている。彼の様な存在ならば、水平線上まで認識できるだろう。

そして鴉の予想通り、街はずれにある教会に確認した。

用は済んだと、漆黒の外套を翻す。

その外套を羽のように広げながら、鴉は闇の夜を飛ぶ黒い鳥になった。

- - - - -

「……お帰りなさい。成果は、どう？」

沈んだ気持ちを隠しきれなかったかもしれない。

彼が手土産を持っていればいいが、世の中はそんな甘くは無いだろう。

「一度見失ったが、街はずれの教会に居る事を確認した。
距離があつたからな、撒いたと思つたのだろっ」

この街の教会は、聖堂教会に所属している。

聖杯戦争において、そちらから監督役が派遣されていた。

サーヴァントを失い、棄権するマスターを保護する役割を担っているが、

ランサーが教会へ戻ったというのならば、

「——あんの似非神父……!!」

監督役が一枚噛んでいるという事。下手をすれば、ランサーのマスターだ。

「……知り合いがマスターか」

あの性悪なら、今頃ほくそえんでいるだろう。
でも、今夜の事は授業料と思って諦めた。

「まったく、監督役が介入してくるなんて想定外だわ……」

「親しい間柄か？ 策を弄さねば足元を掬われかねんぞ」

「……私の、魔術の兄弟子」

不本意ではあるが、共に修練を積んだ仲だ。
私の行動など、予想するのは簡単だ。

「癖を知り尽くされてるところか。生半可に手を出すわけにはいかな。」

……凜？ペンダントはどうした」

「あー、私の切り札だったけど使っちゃった。

もう何の力も無い物だし、別に必要じゃないでしょ」

「……子に継ぐとか、質に入れるとか思わんのか」

そっか、そういう考えも有るか。けど、今更あそこに戻る気は起きない。

「父さんの形見だけど、残っている思い出はアレだけって訳じゃないし——」

「——たわけ、そこまで強くある必要は無いぞ」

彼が私を叱る。

あれは、私以外が持つべきではない。あれは私が持っていて意味があるのだと。

「……アレは、私が至らなかった代償。授業料と思って諦めるわ」

「そうか。……ならば、何も言うまい」

あの性悪に踊らされて形見を無くした。そう思わなければ、とても前に進めなかった。

父さんには悪いけど、形見をここで使った事に後悔は――

「――って、ちょっと待った」

ランサーが彼を殺したのは、目撃者を消す為だ。
殺したはずの人間が生きている事を知れば……。

「……ミスったわ。記憶が残ってるなら、生かしておかない」

立ち上がり、居間を飛び出して駆ける。幸いにも彼の家の場所は知っていた。

間に合うかは分からない。だけど、何もせず傍観して、形見をドブに捨てるような事は出来ない。

「まったく、仕方のない奴だな。君は」

呆れとも、親しみともいえる感情を乗せた言葉を耳にする。
漆黒の外套を身に纏う鴉と共に、私は夜空の下を走った。

本編書き殴り中に、キャラ設定に無かった外套を捏造してみる。

やっぱりアーチャーと言えば外套。鴉と言えば外套です(？

なんというか、”外套を翻す”という表現を使いたくなったのですよ。

鴉らしく、飛ぶ時に翼のように見えるって表現もソレです。

やっぱり軍服ちつくだけじゃカッコいけないし。

それじゃ、解放と漆黒の剣、追加した外套の紹介です。

・解放剣 (真名はナイシヨ) : 宝具ランク D 相当
装飾の無いロングソード。解放解答で紡がれている。

・漆黒剣 ケイオス : 宝具ランク E 相当
漆黒の刀身を持つジャマダハル。刃渡りは1m程と長め。吸収解答が刻まれており、任意で行使できる。

・八咫の黒衣

強化の解答式で紡がれた漆黒の外套。

体力系の内、1系統を一時的に2〜3ランク程度高める。防護としては魔除けの護符未満しかない。

#訂正：身体能力E↓Fにより1〜2ランクから2〜3ランクへ修正。

うん、まあ、ランサー相手に体力系人間並みだと、小手先だけじゃ敵わないかな、と。

あまりやりたくはなかったけど、出来そうな事だったからやつちゃいました。

漆黒剣の真名は本編の最中に決めました。

彼の名は彼の属性であり、彼の剣は彼の属性。即ち、混沌そのものです。

彼は秩序を装う事が出来ますが、混沌である事を覆せません。やっぱり、人間ってそういうものでしょう？

真名を決めるに当たってケイオスの神話と、混沌とは何かを参照しました。

鴉がどういうモノか知る事が出来るので、気が向いたら読んで見てください。

・投稿後に追記

ランサーに対して扱った剣技はパンプキン・シザーズのアレを基にしています。

そういえば、ランタン無くても901ですね。この人。

同盟締結

人気の無い、深夜の街を駆け抜ける。

目指すは衛宮士郎の家である武家屋敷。

しかし、そこには既にサーヴァントの気配があった。

遅かったか。いや、まだそうと決まっていな。

アーチャーに突入してもらおうとして、

「……嘘」

屋敷にいるであろうランサーの気配が眩む様な、莫大な魔力の奔流が起った。

ランサーの仕業じゃない。

となると、これはサーヴァントの召喚。それもとびきりのヤツか？
まさか、アイツが召喚した？

武家屋敷の塀の向こうで剣戟の音が響く。

そして茨のような空気が辺りを満たした後、ランサーが塀を飛び越えて去っていった。

召喚されたいらしいサーヴァントの気配は未だに残っている。

ならば、アイツは無事だろうか。確認したいが、余計な手出しになりかねない。

いや、ここは一旦離脱して、遠めからアーチャーに確認してもらう。

そうやって声をかけようとしたが、アーチャーの舌打ちと同時に、私の前に立ち塞がった黒い外套が何者かに弾き飛ばされた。

一瞬の空白。

私の目の前にいるのは、青き騎士。

そして、その手に持った何かを振りかぶり――

「――舐めるな!!」

風呪を織り込んだ宝石を、何の加工もせず魔力にして叩きつけた。家の一軒や二軒は跡形も無く吹き飛ばす、風の呪文の塊。私の十ある内の切り札。

倒せずとも足止めぐらいには――ならなかった。

切り札の一つは、強大な対魔力に対して傷一つ付ける事が出来なかった。

何かが私に迫る。

辛うじて躲けたけど、打つ手はもう無い。

空を見上げる。

その空を彩るのは、私にとって冷徹な死神の姿。

「今の魔術は見事だった、メイガス魔術師」

確証も無く、一目で判った。

これが私の欲しがっていたカード、最高と言われる剣の英雄。

見えない剣が振りかぶられる。

ここで終わりか、早かったなあと思いながら、私は目を瞑った。

「——っ!？」

私の上を、風を切るような音を立てて何かが通り過ぎる。

目を開けると、伏せた私の前に黒い外套が立っていた。

何かが風を切り裂きながら、彼の手に戻る。

それは、四つの漆黒剣を十字に重ねたような、巨大な手裏剣と言える物だった。

「……アサシンか」

言われて見れば、彼の風貌は確かに暗殺者と言える。

彼の手には巨大な手裏剣。現代に生きる忍びと言われれば、納得してしまうかもしれない。

「さあな。それよりも、貴様はセイバーだろう？」

騎士であろうものが女子供に躊躇い無く斬りかかるとは、剣の英霊も堕ちたものだ」

「戦いに女子供も無い。武器を持って立ち塞がるのであれば、斬り倒すのみ」

「貴様にとっては魔術師など、木の枝を振るう子供に過ぎんだろう。」

粗暴なランサーでさえ、マスターへ手を出す事は無かったぞ？」

「……貴様のマスターが、私のマスターを狙うとも限らない」

「そう言い訳して貴様が手を血に染めるといふのなら、俺も躊躇う事は無い」

彼の手から手裏剣が消える。そして、その両手には漆黒剣があった。

「主の為に敵を殺し、そして報復を受けて自身の主を失う。
そうなれば、敵を手にかけてサーヴァントは不忠者どころか、
とんだ道化だな」

「……ならば貴様から倒す事にしよう、アサシン」

その呼び名から、彼が苦笑した。

暗殺者が騎士に対して、騎士道を説くとは滑稽なものだった。

「これでも一応、騎士をやっている」

セイバーが構える。

剣の英霊という名に恥じないその構えは、清廉された芸術品に通ずるものがあつた。

辺りが殺気で満たされている。

それを何事も無いかのように受け流す、悠久を戦い抜けてきた黒衣の戦士。

彼の構えは無形。さながら、その構えは全てに通じていると語っていた。

両者が対峙する。

しかし、その戦いの火蓋は切られなかった。

「セイバー、止める！」

何時の間にか、アイツが屋敷の門の方にいた。

命を無くしかけたお陰で、すっかりと失念していたようだ。

「……………」

剣の英霊は応えない。

目を離せば、その一瞬で殺されかねないのがサーヴァントの戦いだから。

「……止める。頼むから止めてくれ、セイバー」

懇願する彼の言葉に、敵を睨み付けながらセイバーが答えた。

「何故止めるのです、シロウ。敵はここで仕留めておかなければ」

「だから待てって言ってるだろう！俺の事をマスターなんて呼ぶんなら、少しは説明してくれ！」

ああ、そういう事が。

彼女も、とんだ外れクジを引かされたものだ。

「どうする、セイバー。君のマスターは止めろと言っているが」

「……………」

両者は構えを解かない。構えを解けば、その一瞬で倒れ付すのが判

りきっていた。

「セイバー、俺は君がなんで戦うのか知らない。けど、話してくれるなら聞くから、そんな事は止めてくれ」

「そんな事、とはどのような事か。」

貴方は無闇に人を傷つけるな、などという理想論をあげるのですか」

「え……？」

命をやり取りする戦いの最中、そんな事をのたまう馬鹿者が一人。戦いに臨むサーヴァントと、戦いを望まないマスターとは。

「つまり貴方は、敵であれ命を絶つなと言いたいのでしょう？
そのような言葉には従えません。止めるというのであれば、令呪を以って私を律しなさい」

「いや、そんな事つてのはお前の事だ。女の子が剣なんて振り回すもんじゃない。」

……って、そっか、剣を持ってるかどうかは判らないんだっけ——
ああいや、

とにかく女の子なんだから、そういうのはダメだっ！」

サーヴァントを、既に死した英霊を女の子呼ばわりされたセイバーが呆氣に取られた。

アーチャーは何時の間にか漆黒剣を消して、二人のやり取りを楽しそうに、ニヤついている。

「……それで、何時になったら剣を下げられるのかしら、セイ

バーさんは」

「諦めなさい。私に敵を前にして下げる剣は有りません」

「こちらは剣を収めて、貴女のマスターも下げろって言っているのに？」

ホントに貴女、セイバー？ 騎士が主に逆らうっていうんだ、不忠者なのね」

それedyouやく、アイツは私に気付いたようだ。彼の顔が驚愕に染まった。

「……遠坂？」

「ええ。こんばんは、衛宮くん」

「遠坂……魔術師だったのか」

「今更隠す必要ないわね。いいから話は中でしましょ。どうせ何も分かってないんでしょ、衛宮くんは」

まったく、こんなヤツがセイバーを召喚するなんて。

状況を掴めない彼が、屋敷の門を潜ろうとする私に呆氣にとられた。

「待て遠坂、何考えてんだ……！」

「バカね、いろいろ考えてるわよ。だから話をしようって言うてるんじゃない」

彼は唸る事しか出来なかった。

何も知らず、このような戦いに巻き込まれれば、混乱しても仕方ないか。

「分ければよろしい。それじゃ行こっか、衛宮くんのおうちにね」

- - - - -

サーヴァントとは何か。マスターとは何か。聖杯を巡る戦争とは何か。

凜が士郎にありだこーだと説明しているが、暇な俺は欠伸を嚙締めてみたりする。

そんな俺をセイバーが睨め付けてきた。

おお、こわいこわい。

「とにかく、マスターになった人間は召喚したサーヴァントを使つて、

他のマスターを倒さなければならない。その辺りは理解できた？」

「……理解はしたけど、納得できない。

そもそもそんな悪趣味な事、誰が何の為に始めたんだ？」

「それは私を知るべき事でも無いし、答えてあげる事でもない。その辺りは聖杯戦争を監督しているヤツ……あー、ごめん」

ランサーが言峰に繋がっている事を思い出したのだろう。
凜が言葉を切って、少々考えていた。

「本当ならこの戦争の監督者に訊くのがいいんだけど、ランサーがその監督者と繋がっていきそうなのよね。

知らない振りして訊きに行けば大丈夫だと思うけど、ばれてたら殺されるかも」

あの似非神父の事だ。状況が違っていれば、ランサーの主のように凜の令呪も奪っていたかもしれない。

「って、何やってんだアンタ」

「茶を入れているだけだが」

あんまり暇なもんだったから、勝手に拝借して凜と自分の分を淹れていた。

「そうじゃなくて、他人の家で——」

「なんだ、お前も飲むか？飲みたいなら早く言え」

士郎の言葉を見無視して、湯飲みを取りに台所へ行った。
二人分の緑茶を淹れてセイバーと士郎の前に置く。

凜と俺が口を付けたのを見て、二人も同じく口にした。

「……Alteration」

その呟きと共に、士郎が壮大に叫んだ。我、してやったり。

「げほっ……まっず……」

その感想を聞いて、俺は歓喜に踊る。

爆笑していた俺を見て何をしでかしたのか予想したのだろう、凜が苦笑している。

セイバーはセイバーで、咳き込む土郎を見て混乱していた。

”修正”したのは土郎の物だけだ。普通のお茶を口にしたセイバーには分からない。

「ちよいと細工をな。……毒の類だったら、お前は今頃死んでいたぞ」

「アサシン、貴様っ！」

それで、セイバーは俺が”何か”を仕掛けた事に気付いた。その手に不可視の剣を持ち、そのまま斬りかかる勢いで殺気を飛ばしてきた。

おお、こわいこわい。

「軽々と敵を信用するな。代償に、命を取られかねん」

本心とは逆に、厳しい顔で警告する。

まあ、こっちも本心だが。

「……けど、俺を殺すつもりなら殺してたって事だよな」

「凜がそれを望んでいれば、殺しているな」

そう言っつて、怖いもの見たさに自分の茶にも修正を施した。

「げぼっ……我ながら、酷い味だ」

これなら、旨い毒を喰らったほうが良いかも知れない。

士郎の湯飲みを、有無を言わず掠め取った。一緒に自分のも捨てようと、台所へ立つ。

「なんつーかアイツ、面白いな」

「まあね。彼の昔話はもっと面白いわよ？」

- - - - -

矢能さんがお茶を淹れ直していた。

彼の悪戯はあまり褒められることでもないけど、衛宮くんには良い経験になったかもしれない。

……衛宮くんの性格は、魔術師の世界に向かない。

痛い目にあって学習する前に、命を落としかねないからだ。

本題に戻そう。

「衛宮くん、私と共同戦線張らない？」

貴方は一度、ランサーに殺されてるし、私は監督者に一杯食わされた。

その監督者は私をよく知っているヤツだから、一人で相手にするのは私でも難しいの。

最後まで続けても、いずれは戦う事にはるけど、どうっ。」

「む、俺は遠坂と戦うなんてしないぞ」

……コイツ、私の話聞いてたのかしら。

「貴方ね……サーヴァントは聖杯を求めるって言ったでしょ？」

私には望みは無いし、矢能さんも『考えるのダルイ』と斬って捨てる変り種。

しかし、聖杯は望むモノを与える。それを要らないなんて言うヤツは滅多に居ないだろう。

「……そういえば、セイバーの望みってなんだ？」

「申し訳ないのですが……」

セイバーの願いは他人に言えないものなのだろう。

そもそも同盟を組む前に、私達の前で言わせようとするなんて、と、頭を抱える。

「ああ、すまん。言いたくなかったら言わなくていい」

自分の失言に気付いたのか、セイバーの言葉を切って彼は少々考え込んだ。

「……俺だけじゃ聖杯を悪用する奴に倒されるかもしれない。けど、遠坂と一緒になら大丈夫だ。俺は同盟を組もうと思う。セイバーは？」

「聖杯は諦めません。ですが、同盟には賛同します」

私の物とは言えないが最高のカードが手に入った。
これなら、あの性悪に一泡吹かせそうだ。

「それじゃ同盟も組んだ事だし、彼の正体を明かしましょうか」

「そうだな。——私はアサシンではなく、そもそもサーヴァントではない」

セイバーの顔が驚愕に染まった。

普通の人間なら、彼は人間にしか見えないだろう。

しかし彼の持つ異質さは、サーヴァントに通ずるものがあるらしい。
彼女もランサーと同じく、彼の事をサーヴァントと思っていたようだ。

「なっ……では、貴方は」

「召喚に応じたイレギュラーだ。

サーヴァントでは無いが、アーチャーを代行している。

名は黒羽矢能。どう呼んでも構わないが、戦闘時はクラスで呼んでくれ」

「……遠坂、サーヴァントって代行できるものなのか？」

「彼の場合は例外ね。魔術師が束になっても倒せないし、サーヴァントも倒すだけなら出来るから」

彼は死なない。死なないから、何度でも勝負に持ち込める。
そうやって繰り返し返せば、いつかは倒す事ができるだろう。

「倒すだけ？」

「私を守りきれるかどうかは別の話ってことよ」

実際は彼にとつて、私は足枷にならない。けど、彼は敢えて足枷にしてくれている。

その枷が無くなったら、彼を止められる者は居ないかもしれない。

「……矢能さん、強いんだな」

「年季が違うからな」

そう言つて、彼は愉快そうに笑っていた。

同盟締結（後書き）

なげる	↓	風魔手裏剣	↓	セイバーは回避した！
なげる	↓	ちゃぶ台	↓	それを投げるなんてとんでもない！
なげる	↓	しりあす	↓	ランサーはお星様になった！

過去への願い

星空の下で、四人が歩いている。

夜のお散歩、なんて洒落たものではなく、俺達は教会へ向かった。

「セイバーがこちらに付いたのだから、ランサーに負けることもあるまい。

その監督者とやらがどう動くか、見極めたほうがいいだろう」

もちろん、ランサーの繋がりの事は伏せて、だ。

その事については皆も異論は無かったが、

「やはり、その……この格好は如何な物か」

「鎧を脱ぎたくないのだろう？それとも、雨合羽の方が良かったか」

武装を解く事を渋ったセイバーに差し出されたのは黒と黄。

まだマシだと思ったのか、鎧の上から矢能さんの外套を羽織っていた。

ちなみに、貸してくれと言ったセイバーへ矢能さんが放り投げて渡した。

遠坂が変な顔をしていたが、どういうことだろう。

「要らなくなったら捨てていい、どうせ私以外には唯の外套だ。材料もタダだしな」

とは本人の談。

……いったい、どうやって外套を作っているのだろう。

- - - - -

教会に着いた。

神の子の家と呼ぶに相応しい作りだろうが、あの似非神父の家と思えば感慨も無い。

「シロウ、私はここに残ります」

「え？なんでだよ。セイバーだけ置いてけぼりなんて、したくないぞ」

「私は教会に来たのではなく、シロウを守るために着いてきただけですよ」

「私も残ろう。坊主の説法なんざ聞きたくも無い」

自身の言葉で、前の世界を思い出す。彼らの風化した信仰には、説得するのに骨を折った。……二つの意

味で。

「……分かった。それじゃ、行ってくる」

気を許さぬように、とセイバーが注意する。

まあ注意した所で、あの似非神父に挟まれるのがオチだろうな。
凜と一緒に扉をくぐり、中へと入って行った。

「――」

音も無く、風が吹く。

俺達は互いに言葉も無く、夜空を見上げていた。

「――アーチャー。貴方は聖杯に、何を望みますか？」

「……そんな感情、遠の昔に捨ててきた」

求めても、この体には無意味でしかない。

「では、貴方は何故……」

「凜が望んでいるからな、私はソレに臨むだけだ」

「……………」

音も無く、風が吹く。

俺はただ、双月の無い夜空を見続けている。

「……私は、過去をやり直したい。助けられなかった者達を、助けたい」

「何時まで過去を夢見る気だ？騎士王」

「——っ！？……貴方は、私を知っているのですか」

俺はそれに答えず、”答え”を知っている者として彼女に問いかける。

「君が諦める事で救えぬ者を救ったとしたら、君が救ってきた者達はどうなるだろうな」

「……………」

選ばされるのは救った者達が救われなかった者達が、どちらかではない。
それに気付かず足元しか見ていない者に、その手にある者など見えはしないだろう。

「俺は世界の全てを殺すことでしか、救う事が出来なかった」

この手には救った者はおるか、足元にすら何も無い。

この手で救われた者は等しく、全てが無へと還る定めだった。
残されたものは、ただ空虚な世界だけだ。

「君は救ってきたのだろうか？ ならば、それ以上に何を望む」

セイバーはまだ恵まれている方だ。

俺にすら望みは無いのに、恵まれている者がやり直しを望んでいる事に腹が立つ。

「……アーチャー。私は、どうしたら——」

「——もっと真つ当なモノを望め。

人として二度目を謳歌するも良し、伴侶を見つけて共に過ごすも良し。」

それくらいは、君の功績に対する報酬と考えれば妥当だろうよ」

彼女は救国の英雄だ。

それが如何な結末であろうが、幸せを手にする権利があるだろう。

「……どうやら、むこうの話は終わったようだな」

扉の向こうから近付いて来る足音。

そして開かれた先に一瞬だけ残っていた土郎の感情に、私は思わず苦笑してしまった。

- - - - -

四人で坂を下りていく。

来た時も話したほうじゃないが、帰りは一段と会話が無い。

ここから先は単純な分かれ道だ。

新都の駅前に続く大通りへ行くか、深山町に繋がる大橋へと進むか。

その交差点で、ピタリと遠坂が立ち止まった。

「悪いけど、ここからは一人で帰って。」

衛宮くんにかまけてて忘れてたけど、私だって暇じゃないの」

「——他のマスターを探すのか？」

「そう。貴方がどう思っているか知らないけど、私はこの時をずっと待っていた。」

七人のマスターが揃って聖杯戦争という殺し合いが始まる、この夜をね」

……遠坂の目に迷いは無い。

それで思い知らされた。遠坂凜は、一人前の魔術師だ。

それなのに、半人前な俺を抱え込んだ彼女は——

「——やっぱり、遠坂っていいヤツなんだな」

「は？ 何よ突然。おだてたって何も出ないわよ」

「知ってる。けど出来れば、ずっと敵同士になりたくない。」

——俺、お前みたいなヤツは好きだ」

「な……………」

何故か、それきり遠坂は黙ってしまった。

人気の絶えた郊外。

遙か頭上にそびえる教会と、丘に広がる外人墓地の静けさが、今は不思議と温かい。

「と、とにかく、私は新都の方へ行くわ。危なくなったら……つて連絡手段が無いわね」

「遠坂、携帯持つて無いのか？」

今時珍しいな。と思ったが、あたふたと挙動不審な行動をする彼女を見ると、どうやら違うようだ。

「……笑わない？」

「何をだ？」

「……持つてるけど、私、機械苦手なの」

ソレを聞いた矢能さんが吹き出した。

「ちよつと！貴方が笑うなんて酷いじゃない！」

「いや、完璧に見える君が機械オンチとは、中々に可愛げがある」

そうやってケラケラと笑う遠坂のサーヴァント（代理）。

そんな二人を、セイバーが微笑みながら見ていた。

「それじゃ士郎の携帯に接続するでしょう」

俺の携帯を渡すと、遠坂が身に着けていたネックレスを手に持ち、矢能さんが何かを唱えた。

「名を呼びかければ繋がるが、緊急時以外は多用するなよ。」

凜は知らないが、私は長話する趣味は無い。と言っても、お前は繋げてないがな」

必要ないだろう？と、矢能さんは何故かニヤニヤとしながら遠坂を見た。

「……連絡がしたければできるんだし、もう行くわよ！」

くるり、と新都に向けて歩き出す遠坂。

それが幽霊でも見たかのような唐突さで、彼女の足がピタリと止まった。

「——お話は終わり？」

幼い声が夜に響く。

歌うようなそれは、紛れもなく少女の物だろう。

視線が坂の上に引き寄せられる。そこには——

「——バーサーカー」

聞き慣れない言葉を遠坂が呟く。

その言葉の意味は判らない。それでも、あの巨人が持つ異質さは嫌と言っほど感じ取れる。

アレは人間ではない。

ならば、セイバーと同じサーヴァントと呼ばれる存在か。

「こんばんは、お兄ちゃん。こうして会つのは二度目だね」

微笑みながら少女は言う。

その無邪気さと、背後の異形が余りにも不釣り合いで、悪い夢を見ていたようだった。

「——驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

舌打ちをしながら、頭上の怪物を睨む遠坂。

その背中には、俺と同様の絶望と——それに負けまいとする確かな
気迫が感じられた。

「アーチャー、いくらなんでも貴方じゃ無理よ」

「私もアレに接近戦を挑むほど酔狂ではない。だが、言っただろ
う？ 私はアーチャーだ」

そう言いながらも、彼がその手にするのは漆黒の双剣。

弓兵を名乗る以上、俺が知らない戦い方で臨むのだろうか。

「セイバー、大丈夫か？」

「私も言っただけです。私は貴方の剣となり、盾となると」

黒い外套を纏ったまま、彼女に不可視の剣が握られる。

しかし、大きめな外套で少々動き辛そうだ。

「ああ、悪い」

それに気付いたアーチャーが苦笑して、彼女の外套が消えていった。
……まるで、闇から作られているかの様に。

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

軽やかな笑い声。

少女は行儀良くスカートの裾を持ち上げて、この場にまったく不釣り合いなお辞儀をする。

「はじめまして、リン。私はイリヤ。

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

その名前に聞き覚えでもあるのか、遠坂の体がかすかに揺れる。
そんな遠坂の反応が気に入ったのか、少女はうれしそうに笑みをこぼし、

「——じゃあ、殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

過去への願い（後書き）

鴉「黒衣は羽毛で出来ている」

いや、この人嘘つきなんで相手にしないで下さい。

鴉「幾度の戦場を越えて裁縫」

本当の事を混ぜるから手に負えませんよ？

鴉「故に、外套はボロボロであり」

そんなもんセイバーに渡すなよ。

鴉「その黒衣は、きつと羽毛布団になっていた」

なんでやねん。

放たれた矢

巨大な体が降ってくる。

坂の上より飛来したソレは、圧倒的な死を撒き散らす狂戦士。その手にした岩盤から削りだした様な、無骨で巨大な斧剣で襲いかかってきた。

手にした双剣を一息で投擲。狙うは眉間と心臓。

瞬時に投影した四方漆黒剣に、全身で最高の回転を加えながら投擲。狙うは両の膝。

後の先。

狂戦士の急所に剣弾が迫る。それはしかし——ガキン、という鋼に当たる音と共に地へと堕ちる。

四方剣は射線上にマスターが居た為か、斧剣で叩き落とされた。

セイバーが走る。その手に持つは不可視の剣。

逆袈裟に斬り上げたその刃は、やはり狂戦士に傷を付ける事が無かった。

横薙ぎに斧剣が迫る。それは正に暴風——掠るだけでも致命傷となるだろう。

剣の腹で受けたセイバーの体を吹き飛ばした。

結果は分かりきっていても、剣弾を放つ。その数は速射を重視して四連。

本来なら岩盤をも穿つその剣弾は……目眩ましにすら成り得ない。

「■■■■■■——！！！」

狂戦士が咆哮を上げた。

この黒い巨体に剣は通らない。その上、セイバーは明らかに力負けしていた。

それでも、やはり彼女は一步も譲らなかった。態勢を整えて立ち向かっていく。

「喰らいやがれ」

四方剣二連——跳躍して重力をも用いた、鋼の壁ですら膾の如く切り刻む最大限の投擲。

それが左右同時、全くの真逆から狂戦士の首を刈り取らんと襲いかかる。

だが、その体を止める所か傷一つさえ付けられない。

間髪入れずに不可視の剣が薙ぎ払われるが、余りにも凶悪な一撃によって彼女の体ごと弾き飛ばされた。

追撃せんとする黒き暴風に剣弾を放つ。

しかし正確に頭部へと奔る二本の剣は暴風の前に、ただ堕ちていくしかなかった。

振るわれる斧剣を、セイバーは剣で受け止める。

弾き飛ばされたその体は地面に弾かれた後にまた、叩き付けられた。目が眩んでいるのか、彼女は地面に膝を付いたまま動かない。

「Gewicht, um zu Verdoppelung—
—!」

凜が黒曜石を中空にばら撒いた。天空より無数の銀光が飛来する。それを受けてなお、狂戦士は止まらなかった。

「うるさいのは無視なさい。どうせアナタの宝具を越える事なんて出来ないんだから」

何処から響く少女の声。

狂戦士の咆哮と共に、巨大な斧剣が薙ぎ払われた。

それをセイバーは不屈の眼差しのまま剣で受け止め、大きく弾き飛ばされる。

坂の上へ何十メートルと飛んでいった。そして落ちていく先は……。

剣の英霊を追う狂戦士を見定め、俺はその場を離脱した。

- - - - -

墓石が飛んでいる。

咆哮をあげて巨人が一閃する度に、両断された重い墓石が冗談のよ

うに飛んでいく。
そんな死を振りまく暴風とも言える中に、悠然と駆け抜ける蒼い騎士の姿が在った。

「■■■■■■——！！！」

両者の立場が逆転している。
障害物に阻まれる巨体と、障害物など無いかのように疾走する小柄な騎士。

狂戦士を相手にするその剣舞は、さながら舞踏の様に見えた。

「バカっ！ とばっちり食らうわよ！」

「えっ、ちよっ……！？」

後ろから襟首を引つ張られた。
振り返ると、遠坂が頭を抱えて溜息を付いていた。

「アンタねえ……魅入って近付いたら巻き込まれました。なんて、セイバーでも守りきれないわよ？」

「あ……いや、スマン」

どうやら、少し惚けていたらしい。
人間では到底辿り着けぬ英霊の戦い。そんな幻想の様な剣戟に魅入っていた。
木の陰に隠れながら、遠坂は墓地の様子を覗き見ている。

両者の戦いに変化は無い。巨人の一閃は空を斬り、台風のように辺りを薙ぎ倒すだけだ。

土塊が暴風に舞い上げられ、切断された墓石が雨の如く降り注ぐ。そんな中を鎧さえ汚さず、セイバーは走り抜けていた。

だが、これでは千日手だ。あの狂戦士に致命打を与える事が出来ないでいる。

「——アーチャー？ 離脱させろってどういう事よ……消し飛ばすって、貴方まさか!？」

遠坂が声を上げた。

その言葉が文字通りならば、尋常じゃない切り札だ。

「っ!？ セイバー、離れろっ!!!!!!!!!!」

叫ぶと同時にバーサーカーの周りに巨大な——四メートルはある鉄塊そのものの様な大剣が降り注いだ。

「■■■■■■——!!!!!!」

離脱するセイバーの後をバーサーカーが追おうとした。

行く手を阻む巨大な剣に斧剣を薙ぎ払うが、結界となった剣獄は……
…ビクともしなかった。

「Annihilation」

そんな言葉が聞こえた気がした。

声が届くはずも無い数百メートルほど離れた場所に、「弓」を構える黒い弓兵の姿を幻視する。

弓など持っていなかった。矢など持っていなかった。

その手にあるのはロングソード。
その剣が番えられているのは、人体の限界以上に引き絞られた”ヒ
トの軀”。

引き絞られた軀が、空へ向かって剣を放った。
剣獄に吸い込まれるかの様に、放物線を描いて飛んでくる。

「■■■■■■——！！！」

バーサーカーが咆哮を上げた。
放たれた剣を、全力で以って自身の剣で迎え撃つ。

そして——

——光と共に、全ての音が無くなった。

吹き荒ぶ爆風。

撒き上げられた破片が辺りを蹂躪する。

それを地面に伏せて、ただ耐えた。歯を食いしばって、なんとか耐
えきった。

耳は麻痺したままだが、閃光は一瞬だけだったのだろう。
目眩を覚えながらも、その目に光を映し出してきた。

「な——」

俺の前で、セイバーが呆然とソレを見ていた。

何が起こったのかは判らない。ただ、アーチャーが放った”矢”によつて、墓地が紅蓮に染まつただけ。

爆心地であつたであろう結界があつた所に剣獄は無く、クレーター状に全てが消し飛んでいた。

それほどの破壊をアーチャーが巻き起こし、それほどの破壊を以つてしてもバーサーカーは健在だった。

「……Aランクの宝具に届く一撃ですら、倒れぬとは」

セイバーの声に力が無い。

黒い巨人は微動だにせず炎の中に佇み、それ以外の者は声も無くこの惨状を見据えている。

カラン、と硬い音をたてて何かが転がってきた。

なんの装飾も施されず、ただの数打ちでしかない長剣だ。

しかし、例えそれが剣であつても矢として使われたのならば、矢と言える。

バーサーカーによつて叩き落とされた矢は、闇に還るかのように消えていった。

それを見て、何故か吐き気を覚えた。

「——シロウ、今のは」

「っ……アーチャーの矢だ。それ以上、判らない」

顔をあげ、遙か遠くのアーチャーに視線を移す。

弓も矢も持たぬ弓兵が、軀を弓にして”矢”を放ち、全てを消し飛ばした。

それがサーヴァントであつたら、納得していたかもしれない。

「なんて、デタラメ」

だが、彼はそれを人の身でやらかしたのだ。

「……ふうん。見直したわりん。やるじゃない、アナタのアーチャー」

何処にいるのか、楽しげな少女の声が響く。

「いいわ、戻りなさいバーサーカー。つまらない事は初めに済ませうと思っただけど、少し予定を変えるわ」

「なによ、ここまでやって逃げる気？」

「ええ、気が変わったの。セイバーはいらないけど、アナタのアーチャーは面白そう。」

……だから、もうしばらくは生かしておいてあげる」

バーサーカーの姿が消えていく。

「それじゃあバイバイ。また遊ぼうね、お兄ちゃん」

白い少女はそう言い残して、ここから去って行った。

口ではああ言っていたが、遠坂も彼女を追いかける気は無いだろう。

俺にだって、見逃してもらえたと判るのだから。

「助かりましたマスター。貴方が声をかけてくれなければ、私もアーチャーの矢に巻き込まれていた」

「あ——ああ、それは」

役に立ててよかった。と続ける事が出来なかった。

「マスター……？」

大した傷も負っていないのに、酷く気分が悪い。

「衛宮くん？……顔が真っ青じゃない、貴方」

「っ、シロウ！」

膝から力が抜けた。

唐突に、目の前が黒で埋め尽くされていく。

倒れる体を支えてくれる感触。

それも直ぐに消えて、全ての感覚が落ちていった。

意識が落ちようとしているのに、激しい頭痛と吐き気だけが鼓動と共に続いていった。

放たれた矢（後書き）

鴉「この投法、筋肉が千切れ続けて痛いからしたくねえわ」
あんた射出解答持つてるだろ。

鴉「いや、それじゃ味気ないだろ？カッコよくもないし」
あーはいはい。すごいね。

鴉は放って置いて、設定追加と補足です。

・八咫の黒衣（追記）
強化の解答式で紡がれた漆黒の外套。
体力系の内、1系統を一時的に2〜3ランク程度高める。
筋力最大強化時には投擲技能のランクを1つ上げる。
にう！
↑お
防護としては魔除けの護符程度。

・アーチャーの矢
解放剣に対滅解答を上書きしてぶっぱしただけです。
最低限でも、ちよいと破壊力がありすぎるモノなんで、事前に結界

作用のある鉄塊剣をぶん投げてます。
鉄塊剣の正体はまだナイシヨ。

ほんととは本編中に「臍物を！撒き散らす！」って感じで鴉がぶつちやけられる予定だったんですが、
士郎君が何故か飛び込んで来なかったので、お流れになってしまいました。

むう、残酷描写が無いぞ。いいのかコレで。

鴉「あんま鴉いぢめんな」

死なないんだから我慢しろ。

鴉「ヒデーな、おい」

解放する者

——見た事も無い景色だった。

頭上は闇に閉ざされ、二つの月が大地を照らす。

その大地は果てまでも砂で覆われて、無数の鋼（こう）が立っていた。

世界は限りなく不毛で、生きているモノは何も無い。

砂を乗せた風が、鋼の森を駆け抜ける。

剣は樹木のように乱立し、その数は異様だった。

十や二十ではきかない。百や二百でも届かない。

到底、人に数えきれぬモノではなかった。

……ならば、それは無限と呼ぶるモノなのであろう。

砂漠に突き刺さった幾つもの剣は、使い手が不在のままに立ち続けている。

——それを、まるで墓場のようだと思った。

パシャン。パシャン。パシャン。

そんな音が道場に鳴り響いていた。

薙ぎ払われた剣を、剣に乗せて逸らす。

袈裟切りに迫り来る剣を、剣に乗せて逸らす。
突きに来る剣を、剣に乗せて逸らす。

それを、何十合と繰り返している。

「——正に、柳に風と言いましょか」

斬りかかっていたセイバーが、その言葉と共に竹刀を降ろした。

「確かに、風は私を傷つけないな」

対峙していたアーチャーは、だらりと両手に持っていた竹刀を逆手に持ち直した。

「私の剣技だけでは、貴方の守りを越える事は難しいようだ」

「……ふむ、剣の英霊にお褒め頂けるとは光栄の極み」

そう言つて賛辞を送る彼女に、まるで主従を誓う騎士のように膝を付いた。

「む、貴方は私を馬鹿にしているませんか？」

「半分な」

道場には、仕様がなない男だと呆れて笑う少女と、そんな少女をからかって笑う男がいた。

「すごいな、二人とも」

二人の剣戟を見ていて、感じた事があつた。

セイバーの剣技は……清流。

その清廉された一刀は、一級の芸術品を思わせて人々を魅了するだろう。

彼女が振るう一閃に、自分もそうでありたいと焦がれてしまう。

矢能さんの剣技は……なんというか、無造作だ。

見ただけで簡単に真似出来そうな程に、軽く剣を振るう。しかし、それは見た目だけだろう。

彼と同じような結果を得たければ何万回と剣を振るい、何万回と剣を振るわれなければ、到底真似出来ないかもしれない。

何万回と剣を振るわれる。

それに彼が何度も殺されてきたのを、何故か幻視した。

「ん？目が覚めたか、へっぼこ」

「うぐっ……それ、矢能さんの仕業か」

起き抜けに遠坂から「うん、やっぱり衛宮くんに合ってるわ。へっぼこ」と言われて、

ちよつと自分に泣きそうになった。

「ヤータ、貴方でも私のマスターを侮辱する事は許しません。事実であってもです」

つて、セイバーも何気に酷いな。

「何もしてないのに倒れるとは思わなかったからな。まあ召喚から直ぐに、ああなったら無理もないか」

まったく、人生の中で一番と濃い夜だったとは思えない。

「それで、体の方は大丈夫なのか？」

「ええ。……まあ、変な夢を見ましたが」

それを聞いて、矢能さんが竹刀を放り投げてきた。思わず受け取る。

「セイバーと俺、どちらの稽古を受けたい？」

先程の二人の戦い方を思い出す。どちらを受けたいか、と言われれば……。

「セイバー、頼めるか？」

「ええ、喜んで。シロウ」

「……ま、せいぜいボコられてろ」

選ばれなかったのが余程悔しかったのか、矢能さんの口調が若干変わった。

言うや否や道場を後にしようとして、何かを思い出したのか肩越しに振り返る。

「朝食で食材を使い切った。昼の分は確保したが、夕飯の分までは無いから買ってこい」

俺の言葉を待たず、矢能さんは道場を出て行った。

って、一日分は有った食材を使い切った？

とても一食じゃ消費できる量じゃ無かったはずなのに……寝てる間に、何が有ったんだろうか。

-
-
-
-
-
-
-
-

――不自然な闇を駆ける。

人気も無い深夜。

先の見えぬ闇に閉ざされた通路を抜けて、彼女と共に踏み込んだ。

新都にある建物の一室。

収容された五十人ほどの従業員たち。

男性ばかりで、全員が糸の切れた人形の如く散乱していた。

屋内は腐った空気と、草の薫りで満たされている。

闇で染まっていたのは救いだろうか。

彼女が覚悟をしているといっても、あまり女子供に見せたくはない光景だ。

「――なんの香だろう。アーチャー、判る？」

窓を開けながら聞いてきた。

「浮気性の夫に耐えかねた調合師が、同じものを作っていたな。」

これで不能にしてやる、と意気込んでいたよ。まあ……結局は使われなかったが」

「それじゃ魔力喰いだけじゃ飽き足らず、男を不能にして愉しんでるってこと？」

「だろうな。……こんな八つ当たりをするとは、よほど男に根深い恨みがあると見える」

状態の悪い人間だけ手当てをして、私達はそこを後にした。

「マスター、これからどうする？」

「……………」

考えに没頭しているのか、返事が無い。

「……姫？」

「馬鹿にされてる気がするからやめて、それ」

思考を中断して、彼女が頭を抱えた。

「それで、このまま柳洞寺へ行くのか？ 先程の戦闘で疲れているだろうし、あまり勧められんが」

収容所への道に夥しく蠢いていた、骨作りのゴーレム。

それに手を出すなど言って、彼女一人で全て破壊していた。

「……キャスターを追う。逃げ込まれる前に片を付けてやりましよう」

「喧嘩を売らねば気が済まない、か？　だが、奴は既に柳洞寺にいるぞ？」

怒りからか、拳が固く握られていた。その手から赤い物が流れ始める。

「いいわ、アーチャー帰りましょ。……今度見かけたら、目にモノを見せてやるんだから」

街を照らす月明かりの中、彼女はそうやって気丈に振舞いながらも歩き始めた。

この戦いにおいては、キャスターを見逃す事はできない。

人殺しなど何とも思わないが、彼女は竜の骨を使役している。

一時的にしろ、彼等は魂を束縛されて器に閉じ込められるのだ。

私はそれを、許す訳にはいかない。

解放する者（後書き）

鴉の二つ名は複数あります。その一つが主題にある解放者。

彼は人の世には、気紛れ起こさない限り、介入しません。
不死者が人を殺し、食らっていても是とします。

しかし、魂という存在を束縛することを嫌っています。
理由は自身が束縛された存在という事もありますが、彼の正体にか
かわる事なので伏せておきます。

士郎が解放剣を目にした事で、同調が起きました。
これが後にどうなるかは見物……に出来たら良いなあ。

余談 鴉の癖

・モノを放り投げる。

投擲技能が「あらゆるもの」なので、これが影響しています。

いや、逆ですね。

なんでも放り投げるからこそ、この投擲技能を得られたのでしょう。

前の世界で「そんなもん投げるな！」って怒られまくってました。

例： 某左手にデル君を投げる ↓ 刺さる ↓ 「あ、悪い」

例： 某ツンデレを某左手に投げる ↓ 某左手転倒して頭部強打
↓ 「あ、悪い」

・無造作

手を抜きまくった成果です。

手を抜いても変わらず結果を得る為に、莫大な時間をかけてきました。

なんか本末転倒ですね、この人。

戦鬼

——夢を見る。

血液が流れ出るように、繋がった小さい穴から、手が届くはずのない記録を見る。

それは、あいつの思い出だった。

少なくとも自分の物ではない、他人の物語。

気が遠くなるほど昔の、知り得るはずも無い古い記録。

刻まれてしまった、契約という重い枷。

そいつは、何かを欲しがった訳でもなかった。

強いて言うのなら、お人好しな人間だったのだろう。

まわりに泣いている人がいれば支え、

まわりに傷ついている人がいれば護り、

まわりに死に行く人がいれば、看取る。

それはやっぱり無造作で、見ていてハラハラとする。けれど、最後は皆が笑顔で去って行った。

傷付こうが、殺されようが、そいつは人々に救いの手を差し伸べていた。

でも、そいつは自分を救えない。人が自分を見れないように、救うことが出来なかった。

どうして、そうなったのかは判らない。

……いや、そうならなかったのか不思議なぐらいだったのだ。

酷い災禍が起こった。

世界が千切れて業火に包まれ、黒い影が人々を殺していく。そいつには、どうしようもない出来事。

世界の死を前にしてそいつは――

” くだばりやがれ、役立たずが ”

何も出来ない自身に対してか、何もしない世界に対してか。
……

それとも、両方か。
世界の終わり際に、呪いの言葉を吐き捨てた。

それで終わり。——それでも、終われない。

そいつはそこへ流される。

そいつには仲間もいたし、友人も多くいた。
その全てを失って、そこへ流された。

行き場も知れず、砂を踏み締めながら、そいつは歩き続けた。
失う事を知りながらも、未来を信じて、奇跡を目に焼き付けようと願って。

……けど、未来なんて最初から無かったのだ。

無限に繰り返す、閉ざされた世界。

未来を拓く為には、世界を一度壊さなければならなかった。

そして、辿り着いたのは剣の墓場。

共に歩んできた者達が眠る墓標の中で、そいつの戦いが終わった。

……やはり独り。

それでも世界を解放できたのだから、悔いる事など何も無いと、
そいつは満足げに笑いながら何も無い牢獄で——歌を歌っていた。

- - - - -

外は既に茜色。生徒達も既に下校していた。

遠坂と一緒に、学校中を歩いて回る。

学校には何箇所か結界を張る為の呪刻があるらしい。

それを遠坂とアーチャーが何日も前から、見つけては消すというのを繰り返していた。

しかし、その度に新しい呪刻が作られてイタチゴッコとなっていた。

「結界はアーチャーが夜のうちに消してくれるけど、見てないうちに張られちゃうのよね。」

私には発動時の効力を弱める事しかできないから、後はアーチャーに任せるわ」

「……遠坂。聞きたい事があるんだけど、いいか」

屋上に隠された呪刻を消去した後、遠坂を呼び止める。

「え、何？ まだ屋上に違和感あるの？」

「いや、それとは別件。ここにはもう変な所は無いぞ」

「なら生きている呪刻はほとんど消せたかな。

衛宮くん、魔力感知できないクセに場所の異常にはアーチャー並に敏感よね。

こんな早く校舎中の呪刻を消せるとは思わなかった」

役に立てて嬉しいのだが、今はそんな気分になれない。

「なあ遠坂。マスターってのはマスターが判るのか？」

「細工をしてなければ判るわよ。

マスターは魔術師がなるものだから、魔力を探っていけば見つけられるし」

ふむ、それじゃあアイツがマスターって線は無いか。

「なんだ。結構簡単なんだな」

「そうでもないわよ。例えば魔力を隠してしまう道具を持っていれば判らないもの。

まあ、サーヴァントの魔力すら隠せるのなんて少ないでしょうから、

そんなマスターは居ないと思うけどね。……近くに居れば判るわ」

教室に戻った。

マスターの手がかりは無いとは言え、大部分の呪刻を消せて遠坂は満足したようだった。

これだけハデに邪魔をされたら、近いうちに尻尾を出してくるだろう、と。

「気が長いな。近いうちって言っても、何時かは判らないだろ」

「そうね。けど、もう何度もアーチャーが消してるから、明日には出てくるんじゃない？」

ふふん、とまだ見ぬマスターを鼻で笑う。

「そんなもんなのか」

「そんなもんよ。——っ!？」

下の階から女性の、悲鳴が聞こえた。

「っ!？ 遠坂っ!」

「ええ、行くわよ!」

階段を駆け下りる……一秒でも惜しい。手摺を越えて飛び降りた。

「ちよつと!？ 一人で先走ったら危ないじゃない!」

「そんな場合か!？ 普通の悲鳴じゃなかったぞ!」

「わかってるわよ! だから危ないって……バカ!」

一階に降りる。廊下には誰も居なかった。
ただ、女生徒らしき人影が非常口の前に倒れ伏している。
傍まで駆け寄って、無事を確かめた。

「……良かった。気を失ってるだけだ」

「バカ！この子、中身が空っぽじゃない！？」

「中身が……空っぽ……？」

「魔力、極端に言えば生命力。この子、血がぜんっぜん足りてない。」

でも、これなら手持ちの石でなんとか——」

ごそごそとポケットを探る。

……良かった。遠坂は治療法を知っているようだ。
遠坂がしゃがみ込んで、女生徒を介抱している。

「——ああもう、気が散るっ……！ 衛宮くん、そのドア閉めてくれる？ 風で髪が乱れるのよ」

「え……ああ、非常口か」

開けっ放しの非常口に視線を送った。

その開けっ放しの非常口を見ていたお陰か、黒い何かが飛んでくる気がして——

——咄嗟に右腕で遠坂の顔を庇った。

何かが突き刺さる。右腕に痛みが生えていく。
肘と手の中間に刺さったそれは、釘そのものの様な短剣だった。

「な、なによソレ——腕……いた、痛く、ないの……？」

「……痛い。とんでもなく痛い」

が、そんな事は後でいい。
それより、こんなモノを、遠坂の顔に目掛けて投げやがった奴が許
せない。

「遠坂、その子任せる」

遠坂の返事を聞かずに床を蹴って、非常口を飛び出した。

- - - - -

呼ばれる声に従って転移した。

場所は……学校か。

目の前には廊下に伏す少女と、介抱しているであろう凜がいた。

「マスター、状況は？」

少女の近くには血痕。それが後ろにあった非常口へと続いている。

「——あのバカ、一人で飛び出してった。多分……相手はサーヴァントよ」

「ったく、あのへっぽこめ……」

ぼやきながらも駆け出した。

状況からすれば相手はライダー……ならば、雑木林か。

「バカにも程があるぞっ……！」

士郎の手には何も無かった。

奴が空手で、ライダーを相手に出来るはずがない。

距離は二百メートル程——それがどうした。

「——Projection」

右手に持つ漆黒剣に射出解答を乗せて投擲する。そして振り下ろされる釘剣。

だが、光すらも置き去りにする剣に射貫けぬモノなど無い。

「——！？」

釘剣が弾かれる。

私には気付いていたようだが、間に合うとは思わなかったのだろう。

弾かれた事が信じられないという目で、私を見ていた。

- - - - -

「……アーチャー？」

漆黒の外套を纏い、漆黒の双剣を持つその後姿は、普段の矢能さんとは別人に思えた。

——戦気。

その男には、何人たりとも後ろへ通さぬという決意が纏われていた。

「たわけ者め、素手で臨むとは何事か……！？」

言い返せない。

自分が殺されかけて、初めて何も持っていない事に気付いたのだ。自分が、ここまでバカだったとは思わなかった。

「——士郎、後でボコる。……それで、結界を張ったのは貴様だな？」

「……………」

黒いサーヴァントは答えない。

「――Projection」

アーチャーが漆黒剣を投げた……のか？

その手を離れる瞬間――剣が消えた。

それと同時に黒いサーヴァントの後ろで、ズガンと音を立てて、木に突き刺さっていた。

「……慎二？」

漆黒剣が突き刺さった木の後ろに、隠れていたらしい慎二が尻餅を着いていた。

「二度は言わん、結界を消せ」

「…………マスター」

「ラ、ライダー！今すぐ――」

ズガン、と今度は慎二の両足の前に剣が突き刺さる。
衝撃に撒き上げられた土塊が、慎二を塗りたくった。

「――言い忘れた。オマエが口にしていい言葉は”消せ”だけだ」

……人は、状況でこつも変わるものか。

人の好かった黒衣の男は戦鬼アーチャーとなり、俺を笑っていた慎二はただ震えていた。

「け、け……」

「そら、どうした小僧。国語は苦手か？」

獣のように牙をむいて笑い、アーチャーの手に次の”矢”が番えられる。

「消せ！早く消せ！」

「……………」

学校を満たしていた違和感が晴れる。結界が解かれたようだ。

「——警告しよう。次に結界を張れば、容赦はせん」

アーチャーが纏っていた戦気と、漆黒剣が失せる。

「……戦わないのですか？」

「貴様を討伐しろとは言われていない。もっとも、結界を解かねば殺していたが」

ライダーが警戒しながら後ろへ下がる。慎二は……既に逃げたか。

「お人好しですね、アーチャー」

「腰抜けに付き合わねばならない君も、な」

気のせいか、二人が笑ったような気がした。

ライダーが振り返って疾走し、直ぐに見えなくなる。

「——アーチャー、なんで倒さなかったんだ？」

遠坂は、この戦争に勝つ事を望んでいる。
勝つ為には敵のサーヴァントかマスターを倒さねばならない。
それなのに、彼は絶好の機会を逃したのだ。

「なんだ、殺して欲しかったのか？」

「いや……許せないけど、殺して欲しくない」

あんなんでも、一応は親友だ。あくゆう死んで欲しくは無い。

「まあ、マスターにはバカを連れ戻して来いとしが言われなかったからな。……で、覚えてるか？」

「？ 何を」

「ボコるつつつたろうが」

一瞬、目の前に拳が見えた。

その次に、枯れ枝に覆われた空が見えた。

それで、目の前には……お星様？

腕を刺された方がマシだったなあと思いながら全身（特に額）に痛みを感じて、

俺の意識も飛んでいった。

戦鬼（後書き）

アーチャーさんって怖いものあります？

鴉「まんじゅうが怖い」

駄目だこいつ。

鴉「あと、たまに太陽が怖い」

して、その心は？

鴉「……死なないからって、俺を燃やしながら墓石（本物）投げつけるのはどうかと思った」

ああ、アレか。いーじゃん、死なないんだから。

鴉「俺だって痛いモノは痛いんだから止めてくれ」

だが断る。

鴉「……如何にかならんかなあ」

あの後、気を失った士郎を衛宮邸へ転送した。

ナマモノなら壊れかねないが、アレを目にしないのなら問題無い。
目が覚めたら自分の家の庭で転がされていました、なんて理解した
時の顔を思い浮かべてニヤつく。

だが、丁度駆けつけたセイバーにしこたま怒られた。

……ぬう、悪ふざけが過ぎたか。

襲われた少女の方は、凜の治療で大事無かった。
流石と言えよう。どこぞのヘッポコに見習わせたいものだ。

——で、だ。

町並みは闇に沈んでいる。

月明かりに浮かぶ柳洞寺を監視していたら、やたら細い、妙な物が
張られている事に気付いた。

「……やられた」

見逃していた。……いや、そもそも俺の目は人並みでしかない。

擬装された魔術の類を拾うのは至難だ。微かな違和感から解析解答を行使し、それを見つけたのは本当に偶然。

「Acceleration」

翼を世界から解き放つ。

この加速解答は他と同じく一小節だが、事前に確認する事項が多くて咄嗟に使えないものだ。

そして例え光を置き去りにして走れたとしても、時間の壁までは越えられない。

山門の前でアサシンとセイバーが互いの剣を合わせていた。

セイバーに加勢している暇は無い。手を出して手遅れになったら笑い話にもならないだろう。

山門に跳んで状況を確認する。

正にアイツと同じタイミング……間に合ったか。

山門を跳んで世界に帰順する。

世界へ光が戻ると同時に漆黒剣を手にした。

「——！」

キャスターが咄嗟に後退した。漆黒の双剣が空を切る。

「っ！？ 貴方、さっきまで——」

「——テメエの物差しで俺を測るな」

思考が憤怒で染まる。

「アー、チャー？」

「テメエのヘッポコさも、いい加減に頭にくる。キャスターの糸は斬ったぞ」

後ろで自身の体を確認する気配がした。

「……キャスターの呪縛は解けた、けど」

「なら、とつとと失せろ。と言いたところだが——」

「アサシンめ……あの役立たず……っ！」

「——動けば、お前も八つ当たりを受けかねんな」

憤怒に染まったまま、思考は冷えていく。

「さて、そう怒ってやるなキャスター。あの侍、セイバーを押し留めるとは大した剣豪だぞ？」

アレは俺でも相打ち覚悟で無ければ倒せん……むしろ、褒めてやれ」

「ふざけた事を。貴方を止められないようでは英雄などと呼べない。剣豪を名乗らせるには実力不足です」

「……言っただな？」

無形ではなく、狼の様に身を屈めて牙を構える。

「ならば我が一撃、避けて見せろ」

外套の上限を越えて強化を発動する。

跳躍に過ぎた力が骨と筋を破壊し尽くし、耐え難い激痛が脊髄を突き抜けて行く。

——それがどうした。

破壊されたモノが瞬時に塗り替えられていく。

一足で十メートルもの距離を無くし、キャスターに両の牙をむいた。

それに穿たれたのは……黒いローブ。やはり、時期が悪いか。

- - - - -

はらり、と持ち主を失ったローブが舞い落ちた。

アーチャーが苦も無く殺した相手の亡骸を前に、納得いかなげに立ちつくしている。

今の一撃は完全に入ったと思ったが、警戒を緩めていない彼の様子を見ると避けられたのだろうか。

……漆黒の外套を纏う、弓兵の代行者。

その両手にはジャマダハルと呼ばれる、一メートル程の剣が握られている。

外套と同じく、漆黒に染められている剣。それに……やはり心を奪われる。

曰くの有る名剣なのだろうか。

彼が持つ漆黒剣には何の邪気も感じられず、それは闇に溶け込んでいる黒衣と同じ存在にも思える。

だが、アレは何かがおかしい。

他者を倒す事を目的とする戦意、後世に名を残そうとする我欲。

誰かが作り上げた武器を越えようとする競争心。

何か、絶対的な偉業を成そうとする信仰。

そついった名剣、魔剣に無くてはならない創造理念がスッポリと抜け落ちている。

強いて言うのなら……在ったから鍛えた、だろうか。

闇に在る剣。

何処にでも在るからと鍛えられた、無心で無骨な剣。

闇をそのまま体現した、ただ空虚でしかない漆黒の剣だ。

そんな剣に見とれたのは――

――その存在を、何故か懐かしく感じたから。

- - - - -

「……残念ね、アーチャー。貴方がその程度だったなんて」

人気の感じられない境内に、キャスターの声が響き渡る。

空から降り注ぐ一筋の光弾。

視認して間も無く、交差した漆黒剣を盾にして喰らい尽くした。

空を見上げる。

相変わらず双月は無く、闇の中に在るのは大きな黒い鳥。

その身に纏っていた黒いローブを展開する、キャスターの姿が在った。

「……ふむ、魔女相手に空中戦を挑むわけにもいかんしな」

……まあ、空を飛ぶ事はできる。

戦闘機まがいな戦り合う事も出来れば、対地爆撃すら可能。

しかし、相手に制空権を握られてしまつては飛び立つ前に撃ち落とされるだけだ。

「出来もしない癖に。見下げ果てたわアーチャー。使えると思つ

て試して見たけど貴方、アサシン以下よ？」

「いや、耳に痛いな。しかし君が降りるのであれば、私が飛んで見せるのだが」

「……戯言を。貴方はここで消えなさい」

照準を狂わす為に、不規則な機動を交えて疾走する。

「避けられると思って？」

収束するは無数の魔力塊。

掠っただけでも、この身を消し炭にして葬り去るだろう。それが、雨が降るかの様に降り注いできた。

「っ……クソが、どれだけ溜め込んでいやがる!？」

直撃せずとも、炸裂に巻き込まれるだけでも終わりだ。至近弾へ漆黒剣を投げて無へと還していく。

だが、幾ら無限に作り出せようとも一回のミスが命取りになってしまふ。

「ああ、つたく……ヘツポコめっ!」

未だに呆けているバカが一人、視界に入った。
無理やり機動を切り替えて走り寄る。

「間抜け!とつと逃げやがれ!!」

「え?」

「クソ、なんだってこんな手間……」

まったく、アイツがコイツを殺したくなるのも頷ける。

バカが走り寄る俺を避けようとしたが一瞬で増速し、その腹を目掛けて肩を打ち付けた。

「ぐあっ！」

背中では何か呻いてるが、知った事か。俺だって肩が外れて尋常じゃなく痛い。

「——っ！ 降ろせバカ、何考えてんだ！」

「うるせえ黙れバカ野郎！！ 動くなと言われて呆けるバカが何処にいる！？」

そう怒鳴り散らしながらも、復元された肩の調子確かめた。

偶に、肉体とずれた認識が齟齬を生んで、感覚が狂っている事がある。

とりあえずは問題無いようだ。

「だからって、ぶつかって来る事は無いだろ！？」

「テメエは車道の真ん中で立ち止まるバカか！？少しは状況を考えやがれ！！」

魔力弾が雨霰あられと降っているのに、律儀に言い付けを守ってくれていては困る。

そんなんじゃ俺でも守りきれない。

「このっ……いいから放せ！これくらい一人でなんとかする！」

空間に奔る微かな違和感に思考が冷えていく。

……ああ、まずい。昔見た、あの時と状況が全く一緒だ。

「アーチャー！聞いているのか、おま——っ!？」

何か言っていたが、問答無用で肩のお荷物をぶん投げた。

瞬時に手にした四方剣を上空目掛けて投擲——すると同時に捕縛されてしまった。

「あらあら、残念ね。

……気分はどうかしら、アーチャー。いかに三騎士といえど、空間そのものを固定化されては動けないのではなくて？」

襲い掛かった四方剣を避け、勝ち誇ったキャスターの声が響く。

「どうやらこれで詰みのようね。

外にはセイバーもいる事ですし、これ以上構ってあげられる時間はないわ。

何処の英雄だったかは知らないけど、貴方とはコレでお別れね」

キャスターの左手に魔力が収束していく。

「……クソが」

「？ 何かしら、アーチャー。命乞いなら聞いてあげても——」

「——テメエの物差しで測るなっつってんだ」

—— 我等は何人たりとも束縛する事能わず

世界に罅が入っていく。

ソレは神代の魔女よりも、起源が凌駕する証拠。

硝子が砕けるような音を響かせて、束縛は砕け散った。

「な、バカな—— …… っ!？」

キャスターがソレに気付く。

背後、頭上より風を切り裂きながら迫り来る四方剣。しかし、寸での所でキャスターは避けた。

「Roll out Continuation . Sword
maker Execution . Steels storm
Operation .」

「—— ふん、なかなか…… っ!？」

俺の周りに浮かぶ五十もの解放剣を見て、一瞬だけキャスターは我を忘れた。

「Blast it , dancer .」
くたばり やがれ

剣に纏われた風が咆哮を上げて、夜空へ向かって雨が降る。
迫り来る剣の雨を前に、キャスターは咄嗟に障壁を展開した。

射ち出されるこの剣は、サーヴァントにとっては何の変哲も無い長剣ではない。

キャスターの障壁を突破する事は出来ず、出来る事と言えば掠り傷を付ける位だろう。

「——嘘、でしょう?」

撃ち出されているのは剣、剣、剣——止む事の無い、鋼の嵐。
一つ一つは大した事が無い。しかし、無限に生み出される刃は確実に障壁を削り取っていく。

突破するのは時間の問題だろう。突破されれば、サーヴァントと言えど無限の剣に蹂躪されるのみ。

キャスターが一言で転移を紡いだ。主を失った障壁が瞬く間に砕け散る。

「……ふむ、正解だ」

「——」

恐れという感情を顔に出しながら、キャスターは無言で立っていた。

「されど逃れた所で、何が変わる事でも無し」

「――」

雨は止んでいる。

待機状態となった剣群は一斉に標的へ、確実に死へと導く切っ先を向けていく。

全方位へ射出してしまえば、いかに転移を繰り返そうと何れは喰らい付くだろう。

しかし、障壁を併用されれば無駄に時間が掛かるだけだ。

「……千日手だな。ここは一つ、取引といこう」

「――何？」

「竜牙兵行使の厳禁。それを誓えば退いてやる」

キャスターの思考が疑問で満たされた。

確かに互いの魔力が尽きるまで繰り返す、千日手。

だが、釘付けにされる。そうなれば、マスターを守る事が出来ない。絶好の機会を手放す、黒き弓兵の真意は何か……いや、それよりも行動を起こすべきだと思いを切り替えた。

転移で離脱するか？ ……愚策。境内にいるマスターを守れなくなる。

士郎を再度人質に取るか？ ……嫌な予感がする。それに、こちらのマスターも人質にされかねない。

状況の好転に賭けて交戦……相手の底が知れない。未だに切り札を

隠し持っていそうだ。

結局、今は応じるのが最善だと決断した。

「——いいわ、誓いましょう。それで良くて？」

「構わん。誓約は設けないが……覚えておけ、違えれば後悔する事になるぞ」

展開していた剣を破棄して、未だ呆けているバカに声をかける。

「どうした？ 帰るぞ」

「……あ、ああ」

二人で山門を潜る。

山門の外では攻めあぐねているセイバーと、飄々と立つ柳のような陣羽織——アサシン。

「時間切れだ」

「……ふむ。何時の間にか忍び込んで派手にやらかしていたみたいだが、貴殿も相当の腕前とお見受けする。

いやはや、今宵は中々に楽しい一時だったのだが」

そう言ってアサシンが得物を降ろした。

「セイバー、貴殿との勝負は次回に繰り越すでしょう」

だが、セイバーは剣を降ろさない。

「帰るぞ」

そんな彼女の応答も聞かず、石段を降りた。

三人で深夜の町を無言で歩いている。

あの時、”加速”に入るのが少しでも遅かったら、一人で帰路に付いていただろう。

「アーチャー」

「黙れ、聞く耳持たん」

何の感情も乗せられていない俺の言葉で、ヘツポコが怯んだ。

外へは漏らしていないが、内心呆れ返っている。

あのような事態ならば、令呪を使ってでも己のサーヴァントを呼ぶべきだろう。

経験不足の士郎にそれを求めるのは酷かもしれないが、次は間に合わないかもしれない。

まったく……コレがアレになるとは、この世は不思議で出来ている。

「……なんで、キャスターを」

「テムエが俺に意見するなんざ百年早い」

形振り構わず殺しに掛ければ造作も無い事。だが、俺は彼女の事を
知っている。

自ら外道に堕ちた者に対して躊躇いは持たないが、そう在る事を強
制された者は殺したくない。

ただ自らの手を下すのが嫌なだけ。例え偽善と蔑まれようが、嫌な
ものは嫌だ。

もつとも、守ると決めた者に手を出されれば黙ってはいないが。

それからやり取りも無く、衛宮邸の門前に着いた。

「セイバー、こいつに首輪でも付けておけ。毎日こんなんじゃ俺
でも手が回らん」

キャスターの手が巧妙だったとはいえ、見逃したのはセイバーにも
責任が有る。

マスターを守るのはサーヴァント。それが、何も出来なかったなん
て話にならない。

「……以後、気を付けます」

セイバーの顔に影が差した。

大方、気付ける状況では無かったのだろうが、至らずにマスターを
危険に晒したのは事実。

これで二人の在り方が改善すれば良いが……。

「それからヘッポコ」

「……………」

「テムエは俺が居なけりや、セイバーを奪われていた。これからも、そんなクソつたれな覚悟でいるなら……俺が直々に殺してやる」

純粹な殺気を乗せて、言葉を吐き捨てた。常人では竦み、恐怖で染まるそれを士郎は、

「……分かった」

真っ直ぐな瞳で受けて、俺に応えた。

深夜の町を一人で歩いていく。
その空は、相変わらず一つの月が俺を照らしていた。

凜「で、何か言い訳有る？」

鴉「……済まん、報告忘れてた」

投稿後追記。

「Blast dancer / 風と共に踊る者」

元々、「鋼の嵐」の発動キーは真面目に設定していましたが、スラングを用いて「畜生が、踊りやがれ」となりました。
ソレの名前から相手を呪う言葉になってますね。

「風を切り裂きながら」と「剣に纏われた風が咆哮をあげて」
鴉は彼等を殺す様な事はせず、彼等の力を借りる事も出来ません。
それが何故こんな表現になるかというと、

前者は「バカヤロウ！危ねえじゃねえか！？」と彼等が逃げ回つて
ます。

後者は「ヒヤッホー！いてこましたりゃー！！」と彼等が歓声を上げています。

鴉もそうですが、ガラ悪いですね、こいつら。
まあ味気無く言えば、空気を押しのけてるだけだったりするんですけど。

#10月28日 表題を「剣製師」から「剣嵐舞踏」へ変更。
#「鋼の嵐」を「剣嵐舞踏」と命名。元ネタはまんま絢爛舞踏。

サーヴァント

——夢を見る。

血液が流れ出るように、繋がった小さい穴から、手が届くはずのない記録を見る。

世界は閉ざされる事を恐れていた。

世界は死なない。世界は無くなるうとも、黄泉返る。
元より、世界は無より始まったモノだから。

しかし、閉ざされてしまえば、消す事も分ける事も出来ない。
未来という可能性が潰えてしまうそれは、世界にとっての死と同義
だった。

だから、世界達は全てを無に還すモノを、一つだけ残していた。

——解放者。

全てに束縛されず、全てを解き放つ者。

世界を再生させる為に、全てを無に還す者。

それは、世界へ反逆しかねない諸刃の剣。

世界はそれに、一つだけ足枷を付ける事にした。

限られた時間。

世界が閉ざされない限り、死を迎えさせて無へと還す。
何事も無ければ、ただのヒトとして過ごさせたのだ。

それに、誤算があつた。

閉ざされた世界へ送られた彼は、一つの契約を受ける。
行使者が死なない限り、死ぬ事が無くなる復元の刻印。
絶対なる法、絶対なる理が、彼を束縛した。

当然、彼の起源が反発する。

そして解呪された刻印が、契約を満たす為に変質した。

——刻まれ続ける、不滅の刻印。

閉ざされた世界へ送られるのは常に、何も知らない解放者だった。
本来ならば世界によって刻まれる筈の知識は、刻印によって阻害されてしまった。

彼は成す術も無く、閉ざされた世界で彷徨っしかなかった。

でも、閉ざされた世界には既に、彼が居た。
最初は別の存在とされたが、元は同一。
世界が巡ると同時に、同じ存在と見なされた。

何度も出会う、彼と彼。

幾度も巡る、閉ざされた世界。

彼の手には何も残らなかった。

手にした物は、いつも無くなっていく。
手にした物は、砂の様に、手のひらから落ちていく。
ただ、自分が自分に重なっていただけだった。

———
それに、何度泣いたか分からない。

スタートから先の見えぬゴールまで、気が遠くなるほどの道のり。
彼は、それに耐えた。
絶望もせずに、耐えた。
そうして、ようやく彼は終わりまでやってきたのだ。

でも、彼に与えられた報酬は何も無かった。

彼が助けた者達が、全て無へと還っていく。
彼が護った者達が、全て無へと還っていく。
彼が救った者達が、全て無へと還っていく。

彼の手には、やはり何一つ残らなかった。

――ふざけてる。

彼は世界を再生させる為だけに、必要とされた存在だった。

世界にとっては、使い捨ての奴隷サーヴァントに過ぎなかった。

そして辿り着いたのは、何も無い無限の牢獄。

彼は刻印の為に、無へすら還る事が出来ない。

それでも、彼はそこに在ることを、是としていた。

世界を解放できたのだからと、悔いる事すらもない。

彼は無限の牢獄で待ち続ける。

世界が黄泉返るのを、ただ待ち続ける。

彼は再び光が点される事だけを、ただ願っていた。

「……あのバカ」

そんな言葉しか出なかった。

体が妙にだるい。ベッドから起きる事も出来ない。

ただ天井を見る事しか出来なかった。

「……アレ、やっぱりアイツのだったか」

何故こんな夢を見たのか、私には分からない。けど、そんな事はどうでもよかった。

「まったく…… 誰がどう考えたって、カミサマじゃない」

彼の昔話は途中までしか聞かされてないけど、こんな話したくないだろうな。

本人に確認して夢の通りだったら、泣き顔見られそうだし…… 止めとこ。

ベッドから体を起こす。

体の重さは変わらず、目蓋も重い。

朝に弱い体質を恨みつつ、制服に着替えた。

「……うつわ、凄い顔」

姿見に映った顔は、まるで一晩中泣いていたかの様になっていた。とりあえず、顔洗ってこよう。

サーヴァント（後書き）

自分で描いててボロ泣きするとか、どんだけ感情移入してんだ……。

時系列的にはUBW九日目の朝。八日目の朝も混じってます。

穿たれた穴を世界の光と勘違いした鴉が、無理やり決じ開けてこっちに来る前の話です。

凜がこの夢を見た理由は、凜が世界の根源（混沌）と一時的に繋がっていたってのと、

解放剣との同調から、既に記録を受け取っていたって事にしてくれると助かります。

この前日に鮮血神殿を消化してますが、原作と一緒に展開になってます。

まるまるコピーになるんで、本作では描けません。申し訳ない。

設定上、鴉の結界破りは結界を起動されると、

外側からでは結界内まで消滅するんで、介入できませんでした。

転移と接続も、「外界から断たれてる」と原作で言われてたんで無

理つす。

ライダーさん、見所無くてごめんなしあ。

本作ではUBW準拠で士郎令呪残り2。ライダー死亡。キャスター
竜牙兵使用。で行きます。

空虚な剣（前書き）

ターゲットロスト。

セカンドターゲットへ同調開始。

空虚な剣

夜が更けた人気のない公園。

待ち合わせの時間通りに遠坂が来た。

「おまたせ。ちょっと準備に時間かかった。そっちはどう？」

手にした竹刀袋を見せる。中には木刀が一本だけだ。
家に武器として使えるような物といえば、これ位しかない。

「ま、しょうがないか。そもそもセイバーがいるんだし、必要も無いわね」

「そうだな。俺はセイバーをフォローするよ」

……セイバーの背中を守るといふ状況も考えられない。
考えられるとすれば不測の事態、セイバーの手が足りなくなった時に遠坂の盾をする位か。

「凜、アーチャーは来ていないのですか？」

「ええ。今夜は確認だけだし、大丈夫だと思う。」

……正直なところ、アイツ、私を無視してる感じなのよね」

遠坂が悲しげに溜息をついた。
何度呼び掛けても応じないらしい。

「……まあ、アイツが死んでるって事だけは有り得ないと思うけど」

それでも、心配なのだろう。遠坂は苦笑しながら言った。
今のアーチャーがどういう状況かは分からないが、今回は手助け無しと考えた方がよさそうだ。

深山町の交差点で待ち伏せした。
学校から柳洞寺へ帰るには、必ずここを通るしかない。
俺達の目的は、その柳洞寺に居ると思われるマスターの確認だ。

「——来た。衛宮くん、隠れて」

遠坂が防音の結界を張った。

長身瘦躯にスーツ姿。

校舎で見慣れたその姿は間違いもなく、教師である葛木宗一郎。
……戦いを知らぬ、一般人であるかの様に歩いている。

「なあ遠坂、やっぱり葛木は違うんじゃないか？」

「……ま、やってみればハッキリするでしょ」

無防備に歩いている葛木に向かって、遠坂が人差し指を向けた。

「いくわよ」

短い呼吸音。

その直後、遠坂の指から黒い魔力塊——熱病の呪いが放たれた。

受ければ二日は寝込む呪い。

マスターにとつては、それでも致命的なものだ。

その上、遠坂のモノは銃弾並に威力が有る。

……だが、葛木には何の反応も無い。

「——やばっ」

葛木は気付かず、避ける様子もなかった。

銃弾となった黒い呪いが、頭部めがけて直撃——

——寸前、虚空から出現した紫紺の布によって遮られた。

「——ほう」

葛木が俺達に向かって、そう漏らす。

……まるで、最初から知っていたと言わんばかりに。

咄嗟に木刀を抜き、強化を通した。

「忠告した筈ですよ、宗一郎。
このような事になるのだから、貴方は柳洞寺に留まるべきだった」

人型を成した紫紺のローブ、キャスターが葛木を諫めている。

「それでもない、実際に獲物が釣れた」

サーヴァントが現れたのならば、逃げるのは愚策。

……戦うしかない。

「——っセイバー！」

俺の声で、蒼の騎士が跳躍した。

遠坂の切り札をも無効化する対魔力。

アーチャーは空間自体に固定されていたが、アレは咄嗟に行使できるモノでは無いだろう。

魔術師であるキャスターに、セイバーを止める手立ては——無い。

一足で距離を詰めたセイバーが、葛木を一刀の下に斬り伏せる。

アーチャーのような戦鬼ならまだしも、人間である魔術師では剣の英霊を相手出来る術は考えられない。

セイバーが剣を振るった姿勢のまま、静止した。

その後に、キャスターは彼女に対して成す術も無く斬り倒される。

——筈だった。

「——ばか、な」

セイバーですら、事態を掴めていない。

横一線に薙ぎ払った必殺の一撃が、止められていた。

高速で切り払われる不可視の剣を、葛木が膝と肘で挟み込んでいた。

「侮ったな、セイバー」

セイバーが挟み込まれた剣を、全力で引き戻そうとする。
その瞬間、彼女の後頭部に衝撃が炸裂した。

葛木の手には何も無い。

互いに肌を合わせるような距離で、葛木は彼女の後頭部を殴っていた。

——長柄の武器を持つ以上、素手の相手に対して密着戦闘は不利。

セイバーが自身の間合いまで後退した。

それを何故か、葛木は追って来なかった。

葛木にとって不利な間合いまで後退されれば、倒されるのが道理。
だが、葛木はその場に踏み留まったまま——彼女の鳩尾を貫いた。

——剣の英霊が、対応しきれていない。

葛木の持つ格闘技術はセイバーでも見切れない、特殊なモノか。

その上、キャスターの身体強化を受けて彼女を圧倒している。

拳の雨が降り注ぐ。

鋼で作られているかの如く、硬く、重い連撃。

反撃を許さず、剣を振るう腕さえ射抜かれていた。

それを、セイバーは直感だけで致命傷を免れている。

「——よく躲す。未だ見切れていないというのにな」

葛木の腕が止まった。

その構えは拳と同じく、巖のように不動。

一瞬の間を置いて葛木が動いた。

その繰り出される一撃は、今まで何が違ったのかも分からない。

致命傷を避けていたセイバーが、躲せなかった。

重い一撃をまともに喰らったセイバーが膝を付く。

今まで一度も使われなかった右の拳。

機と見た葛木が、それを彼女の喉へ砲弾の如く放った。

だが、未来予知に近い直感に従ってセイバーが避ける。

葛木の拳が、彼女の首横を掠っていった。

セイバーが不可視の剣を返す。

人間の体を一刀の下に両断するそれは——

——彼女の首に食い込む、彼女が避けた葛木の右手によって阻まれた。

彼女が剣を振るい切るよりも速く、首を握りとして剣の様に振るわれた。

葛木はそのまま片腕で放り投げ、彼女は成す術も無くコンクリートの壁へ叩き付けられた。
気を失ったのか、瓦礫に塗れたセイバーは身動き一つしない。

「——マスターの役割は後方支援などと決め付けるのはいいが」
英霊を打ち倒した瘦躯が振り返り、何の感情も乗せずに俺達へ視線を向けた。

「私のように、前に出るしか能の無いマスターも居る」

……そうやって普段と変わらない姿、学校で生徒に教えるかの様に葛木が言う。

マスター サーヴァント
後方支援に戦闘担当という役割。

それが、この二人の組み合わせでは全くの逆になっていた。

「キャスター、事前に言った筈だが？」

後方支援をするなら、敵の飛び道具を始末しておけ」

人間の身で、最優と謳われる剣の英霊を打ち倒す。

それを実際に成したマスターを目の当たりにしたキャスターは、自身の役割を失念していたようだ。

葛木の視線が遠坂を捉えた。

ヤツにとって脅威なのは剣の英霊ではなく、遠距離攻撃を可能とする——魔術師か。

「どうしたキャスター。好きにしてい、と言っただろう?」

「……セイバーは私が手を下します。宗一郎、貴方は残ったマスターを」

キャスターの提案に葛木が頷く。
その足が、俺達へと向けられた。

「——上等。あいつのネタは分かった。要は近付かれる前に倒せば」

いかに化け物染みていても、葛木に対魔力は無い。
故に、放てば勝てる。

——だが、一手足りない。

手に力を込めた。
ヤツが遠坂へ向かった瞬間、俺は体を割り込ますだけでいい。
そうすれば、遠坂が葛木を倒してくれる。

——そんな余裕は、無い。

僅か一瞬。

葛木が遠坂の目の前にいた。
その胸の中心に、セイバーの首を貫こうとした右手が放たれた。

それで、終わり――

「――ざけるな」

木刀を葛木に振り下ろす。

遠坂の胸を打った拳が、一転して向かってきた。

重い打撃音と、木刀が砕ける音。

目の前には、次弾を構える葛木の姿。

――終わった。

強化した木刀は鉄と同じだ。

それを一撃でへし折るのなら、俺の体は木板にも劣る。

葛木の拳が、俺の額へ放たれた。

頭蓋ごと脳髓を破壊して地面に血の雨を降らす事など、造作も無いだろう。

そして、遠坂は、コロサレル。

……武器が欲しい。

せめて、あいつのような。

……作ればいい。

例え無理だとしても、作る。

それに支払られる代償など――

――どうでもいい。

「――トレース
投影、開始
――オン」

くぐもった声。

ソレは、葛木の声だろうか。

耳がどうかしてしまったのか、音が良く聞こえない。

——それが、どうした。

迫り来る拳だけを見る。

俺は、それを防いでいるソイツを見ている。

「

ソイツの腕は千切れそうだった。

ソイツの右手には、アイツの剣があった。

無より鍛え上げられし、漆黒のジャマダハル。

デタラメに複製された剣が、それでも作り手に自らの存在を提示した。

我が真名は『ケイオス混沌』と。

「がつ——！」

砕け落ちる、硝子の音が聞こえた。
三十もの拳を弾いた漆黒剣が、闇へと還っていく。

葛木の拳に負けたからじゃない。

俺が、オマエを、鍛え上げる事が出来なかった。

「……………」

葛木が間合いを離していた。

今の攻防が予想外だったのか、初めて躊躇を見せていた。

だが、一回きりの投影でこちらは手詰まり。

投影の代償に持っていたモノが大きすぎる。

葛木が様子見を終えれば、この体をへし折って終わりだ。

——交差点に、突風が巻き起こりさえしなければ。

「せ……イ、バー？」

回復したのか、彼女が立ち上がっていた。

その手に纏われる風を見て後じさる、キャスターの後姿が見える。

強力な対魔力を持つ、セイバーがキャスターに倒される事はないだろう。

ならば、彼女が起き上がった今なら俺達は——負けない。

葛木が庇うように、キャスターの横に跳んだ。

「——ここまでだ。退くぞ、キャスター」

「いえ、セイバーは手負いです。貴方なら先程のように——」

「——二度通じる相手ではない。侮ったのは私の方だったな。
……あと一芸、手を凝らすべきだったか」

セイバーが倒されたのは、葛木の格闘技術があまりにも特殊だったからだ。

そして剣の英霊ならば——見切られてしまえば、斬り倒されるだけだろう。

キャスターが大きくローブを翻した。

紫紺のローブが葛木の体を包み込み、それこそ魔法のように交差点から消えていった。

- - - - -

新都のビルから、相変わらず、そこにある月を見上げる。

ヤツが、オレを、その手に呼び込んだ。

ヤツは、到底、人の身で成し得る筈が無い、奇跡をしでかした。

オレの、虚空から、ヤツは無を鍛えたのだ。

「……コレだから、面白い」

思わず、顔が愉悦に染まった。

「さて、ほつたらかせばヤツが壊れかねんな。——ちよいと、修正してやるか」

ビルを跳んで、一羽の黒い鳥が夜空を飛ぶ。

この世界はやはり面白い、と眩きながら翼を武家屋敷へと向けていった。

空虚な剣（後書き）

根源への接続を確認。

事象固定、開始

認識コード「Blade maker」送信、開始。

否定、コードロスト。

認識コード端的送信、開始。

事象固定、完了。

次元解析、完了。

敷写、開始。

複写、完了。

——並列回路、起動。

全身の感覚がおかしい。

視界は度々ぼやけ、右の耳がまったく聴こえない。
手足は動くが、まるで自分の物じゃないかの様に違和感がある。

何度も躓く俺を見かねたのか、セイバーが強引に肩を貸してきた。
だが、確りとした支えが有るにも拘らず、またも膝を付いてしまった。

「シロウ、歩けませんか？」

「……悪い。こつもグチャグチャだと、無理みたいだ」

さっきまでは何とか踏ん張っていたが、体力の方が尽きてしまったらしい。

セイバーが背中へ負ぶさるよう、促してきた。
場違いに恥ずかしくは思ったが、状況が状況だ。素直に自分の体を預けた。

そんな俺を、遠坂は心配そうにしながら後を付いて来た。

誰も居ない家に着いた。

あの二人が居なければ、この家はいつも静まりかえっている。

住人は俺一人だけなのだから、賑やかで在る事は殆ど無い。

セイバーが居るから今は一人じゃないが、活気が有るのは飯時と稽古を受けている時くらいだ。

——なのに、居間には明かりが点いていた。

「……何やってんのよ、アンタ」

「見ての通り、茶を飲んでいるだけだが」

湯飲みを手にしたまま悪びれた様子も見せず、矢能さんが遠坂に答えた。

「その有様はどうした。交戦する予定は無いと聞いたぞ？」

「葛木がキャスターのマスターだった。今日は確認だけにするつもりだったけど、そうもいかなかったのよ」

俺がセイバーを睨けたせいで、撤退を考える事すらままならなくなつた。

遠坂自身もいけると判断したらしいが、流石にアレは予想外だったのだろう。

「それより、何で応えなかったの？ 何度も呼び掛けたわよ？」

「柳洞寺の周辺を調べていた。一時、魔力が濃い所に居たからな、その影響で繋がらなかったのだろう」

そういえば、学校が結界で閉ざされた時も繋がらなくなっていたな。電波のように、魔力で阻害されるのだろうか。

「シロウを休ませたいのですが」

俺を背負ったまま、二人のやり取りを聞いていたセイバーが割り込んだ。

女の子然とした小柄なセイバーの体だ。自然と、おんぶ状態になる。正直、そのまま放置される恥ずかしさに耐えかねていた所だ。

「いや、ここに置け。私が診る」

「今更アンタが治療できるって言うっても驚かないけど、治せるの？」

「医学的にも魔術的にも、何でもござれだ」

セイバーが畳の上に俺を降ろした。
デコード
解読と呟いた矢能さんの眉間に皺が寄る。

「……体と精神がずれているな」

「えっと、つまりは？」

自分の体だが、違和感がある事しか分からない。

「魂が乖離しかけている、と言ったところか。下手をすれば植物人間だ」

……一回の投影で、これか。

双剣として投影していたら、そのまま死んでいたかも知れない。

「眠っていた回路が幾つか、ショックで目を覚ましているな。

次は耐えられるだろうが、あの剣を投影するのは止めておけ」

「……なんで知ってるんだ？」

あの場に矢能さんは居なかった。遠くから見ていたりしなければ知り得ない事だ。

遠坂も連絡を取った様子は無かった。

「あの剣は私の分身みたいな物だね。投影だろうが、現界すれば知覚できる。

アレは虚空そのもので出来ているから、完全に投影すれば飲まれるぞ？」

まあ……俺の剣を投影するのが気に食わないってのが本音だがな」

地が出たのだろう。時々、矢能さんは自分の事を俺と言う。

普段は私と呼称しているが、使い分けているようにも思える。

しかし、虚空の剣か。

以前にも俺の投影はデタラメだと遠坂に言われたが、無から有を作

り出す矢能さんも大概デタラメだ。
そんな彼の剣を投影した俺は、やっぱり遠坂の言う通りデタラメな
んだろうか。

「かなり痛むと思うが、我慢しろ。――――Alteratio
n」

「―――っ!？」

下手をすれば死に至る、魔術回路の起動を越える苦痛が全身を奔る。
なまじ抵抗力のある魔術師の体に対して、強引に手を加えているよ
うだ。

痛みには慣れているが、それでもショック死しそうな衝撃を感じた。

……せめて、覚悟する時間くらいは欲しかった。

「ほれ、どうだ」

意識が飛びそうになったのを何とか耐えて、自身の体を確認する。
……全身にあつた違和感は無くなっていた。

「シロウ、大丈夫ですか？」

一度閉じた目を開けると、さっきまで霞み掛かっていた視覚はハッ
キリとセイバーの顔を映し出した。

「ああ、完全に治ったみたいだ」

体を起こした。

立って歩く位は出来そうだ。体力の消耗は一晚寝れば戻るだろう。

「そういえば、俺も似たような事があったな。あの時はうつ伏せで息も出来なかった。」

そんな状態で一週間ほど動けず、流石に死ぬかと思ったよ」

「いや、魔術師でも死にかなないわよ。それ」

呆れながら突っ込みを入れる遠坂に対して、矢能さんは楽しそうに笑っている。

過ぎてしまえば、どんなに辛い事も笑い飛ばしてしまう性格が少し羨ましく思った。

「さて、私は柳洞寺の偵察に戻るとしよう。凜はどうする？」

「そうね……衛宮くん、部屋を貸してもらえるかしら」

「……貸すって、泊まっていくって事か？」

「今襲われたら、あなた一人じゃ逃げられないじゃない。セイバーはサーヴァントの対応で手一杯になるだろうし」

「ふむ、一理ありますね。動けないシロウが戦いに巻き込まれたら、私でも守りきる事は難しい」

セイバーがそう言うのなら、仕方ないか。でも、女の子が家に泊まるというのは流石に気が引ける。

セイバーでさえ隣の部屋で寝るところまで譲歩させたのだ。同じ屋根の下というのもどうかと思う。

「離れの客間を使ってくれ。洋室だから、遠坂もそっちの方が良

いだろ」

「ありがと。……あ、そうだ。偵察の前に私の着替え持って来てくれない？ お風呂入りたいし」

パシリに行けと言われた矢能さんが、不機嫌そうに遠坂を睨んだ。

「……何で俺が」

「アンタなら、私がお風呂に入っている間に持って来れるでしょ？」

「……下着もか？」

「んー、まあ今更そういうのに興味無いだろうし……いつか。持って来て」

男として全否定され、肩を落とす様が同じ男として同情を誘う。サーヴァントと渡り合える人をパシリ扱いとは……なんというか、凄いな。

「……了解した。地獄へ堕ちろ、マスター」

捨て台詞を残して居間を出て行く背中が、心なしか煤けて見えた。矢能さんも、嫌なら断ればいいのに。

……俺も、同じ状況だと断れない気がするのは何故だろうか。

「と言う事で、お風呂借りるわね。セイバーも一緒に入る？」

「私は構いませんが」

「それじゃ、一緒に入りましょ」

立ち上がった居間を出た遠坂に続き、セイバーも出ていった。
残った俺はお茶を飲もうと、台所へ立つ。

が、開いたままの障子から顔だけ出した遠坂と目が合った。

「……覗いちゃ駄目よ？」

「——ばっ、そんな事するわけないだろう!？」

赤面して抗議する俺を見て、ケラケラと笑いながら障子は閉められた。

「ああ、もう……気にしないようにしてたのに……」

脳裏に浮かぶ映像を必死になって打ち消しながら、今夜の出来事を反芻する。

葛木の拳技に対峙して投影した、漆黒の剣——ケイオス。

矢能さんは分身のような物と言っていたが、確かに意思が有るかの
ように、俺に名乗りを上げていた。

今の俺では贗作とすら言えない出来だったが、あれを足掛かりにすれば
投影の質が上がるかもしれない。

「けど、出来るんだろうか？」

宝具の投影。

サーヴァントの持つソレを投影できれば、一時的でも渡り合う事が出来るだろう。

しかし、複製しきれなければ漆黒剣の様に砕け散るだけだ。第一、俺には維持できる程の魔力が無い。

「一瞬、か。切り札としては使えるな」

もつとも、集中しなければ形にする事も出来ない。集中しても、形にするだけでも精一杯だ。時間が掛かりすぎて使いどころが難しい。それに投影は綻びがどうしても残る。同じ宝具ならば、質で劣るこちらが負けてしまう。

「……状況次第か」

宝具とはサーヴァントの切り札なのだ。如何に劣るとはいえ、その一撃は無視出来ないだろう。
ならば、その一撃を入れられる状況を作り出すまでだ。

「……言うが易し、だな」

「何がだ？」

「——っ!？」

突然の声に驚き、茶の入った湯飲みを落としそうになった。
湯飲みから視線を上げると、そこには音も無く障子を開けた、ボストンバッグを担いだ矢能さんが居た。

……早いな。まだ十分も経ってない。

「気配消して入ってくるのは止めてくれ。心臓に悪い」

「ああ、済まん。長年の癖で染み付いているからな、意識しないと難しい」

無造作に放られたバッグから、ガシャンと金物の音がした。

「あれ、着替えだけじゃないのか」

「どうせアイツは此处に居座るだろうから、研究道具も適当に詰めてきた。」

二度も小間使いはやってられん」

まったく、と呟きながら矢能さんが飲みかけの湯飲みを呷った。

「いや、持って来なければ今日だけだったんじゃないか？」

そんな気を回されて、居座られる環境を作られたら非常に困る。この家に入入りしている、虎と後輩に遠坂が泊まっている説明をするのは俺だからだ。

……考えたら胃が痛くなってきた。

「少なくとも聖杯戦争が終わるまでは居座るぞ、アイツは。お前がぶっ倒れる事が無くなるとは思えないからな」

何度もこういう状況になれば、遠坂も自ずと言い出すかもしれない。それを先見して、どうせなら今晚から留まらせてしまおうという魂

胆なんだろう。

反論しようにも、魔術使いとしても未熟という理由で強引に押し切られそうだ。

「……はあ、分かったよ。非力な自分が恨めしいな」

「阿呆、お前に足りないのは経験と知識だろう？」

俺なんて最初は魔術どころか、武術の類も無しに戦場に放り込まれたんだぞ」

自分も魔術を知らない状態で、この戦争に巻き込まれたとしたら、どうなつて居ただろうか。

……駄目だ。ランサーと対峙した時点で、どうやっても殺される。

「矢能さん、よく生き延びたな」

「胸を刺されて気を失った俺を、相手が死んだと勘違いしたみたいだな。

……… ついているんだか、ついていないんだか」

……… 俺と大して変わらないのか。

胸を刺されたけど止めは刺されなかったし、二度目もランサーが手を抜いたお陰で生き延びる事が出来た。

あの時セイバーが居なかったらと思うと、自分にも悪運が有るように思える。

できれば幸運の方が良いが、まあ無い物ねだりしても仕方がない。

「——うるせえ。自分で取りに来い」

急に矢能さんが独り言を…… ああ、遠坂が上がったのか？

しかし無茶を言う。ここまで裸で来る訳にはいかないだろう。
体を隠せるものといえば、バスタオルくらいしかない。若しくは、
セイバーの服を借りるかだ。

「まったく、しょうがねえな」

そう言つて湯飲みを呷ると、矢能さんはバッグごと着替えを持って
居間を出て行つた。

「……なんだかんだで、お人好しだよな。ほんとに」

暫くして、風呂場の方から喧騒が聞こえた。もう少し時間を考えて
欲しいものだ。

夜はいつも静まり返っている家が、今晚は二人の主従で賑わってい
る。

今日から暫くこの調子かと思うと、なんだか懐かしさを感じる。

俺と親父の、二人っきりの家。それでも、あの頃は毎日が賑やかだ
った。

「……賑やか過ぎるのも考え物だな」

遠坂の怒声と共に、壁に重い物がぶつかる音。それと、何かが壊れ
る音がした。……何が壊れたんだろう。

足音が居間へ近付いてくる。矢能さんだろうか。

「済まん、タオルあるか？」

居間に戻ってきた矢能さんは、何故か頭から血塗れだった。

「うわ、酷いな。台所の使ってもいいけど」

血塗れのまま台所へ歩いて行った。

未使用の物が見える所に有るのに、何を思ったのか使用済みの物を水で濡らして、ガシガシと拭っている。

「……一体、どうやってたらしめるのさ」

「あのヤロウ、自分で持って来いと言っておきながらガンドぶっ放しやった。」

裸の一つや二つ、見られても減るもんじゃねえだろうに」

つまりは遠坂かセイバー、若しくは二人が裸を見られたと言う事か。

「いや、流石にそれは怒るだろ」

「興味無いだろと言って、下着を持って来させる奴がか？　ったく、仕返しが高くていたわ」

……仕返しと言っている時点で、自業自得だろう。

拭い終えて赤く染まったタオルを、矢能さんが水で洗い流している。固く絞ると何も言わず、そのままゴミ箱に放り投げた。

まあ雑巾代わりに使うのも気が引けるし、どうせ安物だから良いか。

「また文句を言われるのも億劫だ。偵察に出たと言っても言ってくれ」
ふらふらと肩越しに手を振って、矢能さんが居間を出て行く。入れ替わりに、遠坂たちが戻ってきた。

「……あのバカ、どこ？」

物凄い怒気を乗せて、遠坂に睨み付けられた。

「偵察して、くるって、言ってた、けど……」

怒気と言うよりも、アーチャーの戦気に近いものがある。思わず言葉が固くなってしまった。

……正直、あの遠坂がここまで怒るとは夢にも見なかった。

「……逃げたわね」

なんというか、背後にゴゴゴゴと擬音が着きそうな雰囲気だ。

「ふ、ふふふふふふふふ」

……怖い。ひたすらに怖い。

俯いて笑いながら居間を出て行く背中に、声をかけたら殺される予感をした。

「……セイバー、なんであんなに怒ってるんだ？」

「私の陰になって凜の体は見えなかった筈なのですが、子供と言われてから……その、胸の大きさで……」

遠坂が逆上して、矢能さんが撃たれたんだな。

胸の事は逆鱗のようだ。しないとは思うが、擲うのだけは止めておこう。

「私も些か癪に障りましたが、剣を手にする前に、凜の勢いに飲まれて忘れてしまいました」

……恐ろしい。

一歩間違えていたら当分風呂に入れなくなるどころか、家が崩壊していたかもしれない。

「頼むから、家の中での剣を出すのは勘弁してくれ……」

鉄筋なら耐えられるかも知れないが、家は木造だ。内側から暴風が起これば、どうなる事が。

戦いの最中なら諦めも付くが、矢能さんの悪ふざけで崩壊でもしたら堪ったもんじゃない。

「……私が浅はかでした。次があれば剣ではなく、拳を使う事にします」

小柄な体と行っても、そこは英霊。まともに喰らえば矢能さんもタダじゃ済まないだろう。

まあ、大人しく受けるかは別の話だが。

「んじゃ、俺も体だけ流したら寝る事にするよ」

おやすみ、と声をかけて居間を出る。

自室から着替えを持って、風呂場へと足を向けた。

掲げられた反旗

(8月14日 加筆)

強い陽射しは既に沈みかかっている。

普段より海風は心地よく、家族連れのお父さんや恋人達に好まれそうな冬木の港。

だが、今は港の関係者くらいしか見当たらない。

「世は事も無し。されど塞翁が馬、か」

一瞬、ソレを聞いた時に、呆れを通り越して納得した。
やっぱりアイツの幸運Eは伊達じゃないんだな、と。

『シロウが攫われました!』

あのバカ、凜には何の連絡も寄越していない様だ。

何の為に凜と繋げてやったと思っっているんだか……電話扱いしていたらボコろう。

後で凜に聞いてみるか。

とりあえず、セイバーに接続品を持たせておいたのは正解だった。
しかし、ソレに疑問を持つ。

この状況で一体、誰に攫われたのか？

……俺の影響で、世界が波紋を起こしているのか。

予測はしきれないが、まあどうにでもなるだろう。

セイバーが合流場所にしたのは町外れにある樹海。ならば、アインツベルン。

あまり手は出したくなかったが、仕方ない。あんなに面白いモノ、失くすには惜しい。

「ま、ゆっくりしていても間に合うだろ」

脇に置いた手製の魚籠一杯に魚が入っている。

久しぶりに煙草でも吸おうかと、小遣い稼ぎに釣り上げた物だ。

「――Transportation」

荷物になる、これまた手製の釣り竿を遠坂邸の庭へ飛ばす。簡単に作れる代物だが、使い捨てにするのは気に入らない。魚籠を小脇に抱え、魚屋のある商店街目指して駆けだした。

人を拒む、ただ闇に在る森の結界。

周辺には何の気配も無い。やはり、先に着いてしまった様だ。

向こうへ到着の旨を伝えと、セイバーからタクシーで移動するとの応えが返って来た。

暇潰しに紫煙を燻らせながら、彼方へと置き去りにした欠片を拾っていく。

ノアの箱舟より放たれ、小枝を嘴にして舞い戻った一羽の鳩。そんな平和の象徴を箱に刻んだコレが、この世界でも手に入れられ

るとは思ひもしなかった。

数千億もの年月の間に様々な煙草を手に入れたが、やはりこの銘柄は思い入れがある。

「……思えば、つくづく鴉に縁が有るな」

鳩がノアより放たれる前に、一羽のワタリガラスが放たれている。帰ってこなかった彼のその後は語り継がれていないが、世界中に居る彼の子孫達を見れば、きっと元気に生き抜いたのだろう。

そんな事を考えていると、到着したと連絡が来た。

見える範囲に人影はおるか、自動車のエンジン音も聞こえなかった。場所が違っらしい。

セイバーがこちらを把握していたので、素直に彼女の誘導に従って跳んだ。

どうやら、待っていた場所は奥過ぎたようだ。樹海へ至る道の入り口に二人の姿を確認した。

「……………」

世界へ翼を収めると同時に一つ、失念していた事を思い出した。

「……………」

お互いに無言。

セイバーはそんな空気を察したのか、やはり無言だった。

「……とりあえず、動くな」

俺の目の前には、こちらに人差し指を向けた赤いあくまが居る。

「……動いたら？」

脳裏に剣を交えた歴戦の勇士達の姿が、浮かび上がったは消えていく。

どいつもこいつも化け物だった。俺も何度と倒されたか数える事すら出来ない。

「ブツチKILL」

そんな彼等の記憶に今日、新たな戦鬼が参列した。

合流したセイバー達と共に、闇に落ちた樹海を駆け抜ける。

バーサーカーが俺達から離れるように森の外へ向かっている事を探知。

二人にはソレを教えたが、樹海の結界を越えた事で気付かれている事は教えていない。

どうせ戦いになるのだから必要無いだろう。

城の中を歩く、なんざ何百……何千年ぶりか。

妨害も無くアインツベルンの城へ侵入した。セイバーが示す一室の中で、息を飲む気配がする。

「……バカか。いや、そういえばバカだったな、お前は」

ぬいぐるみ達が住まう、少女らしさを感じる一室。

そんな部屋で、ベッドに潜り込んでいるバカが一人。

……せめて、奇襲を掛けるくらいしろ。

ベッドからバカが顔を出す。

俺達を見て、今の状況が分かったようだ。

「……完璧だと思ったんだが」

「俺がお前だったら悶死しているぞ？ バカが」

「……………」

なんか、バカが一人で悶えている。

「……シロウ、流石に底いきれませんか」

セイバーが溜息をついた。

凜は吹き出すのを我慢しているのか、背後でやたらプルプルと震える気配がする。

「さて、長居は無用だ。バーサーカーがこちらへ向かってきている」

探知もせずに予想を述べる。

ここまで史実通りならば、覆すことは難しいだろう。

エントランスから出ようとする所で遭遇した。

俺達が降りてきた階段に、バーサーカーとイリヤが立っている。

……あの概念武装とも言える宝具は厄介だ。

持ち得る解答式の殆どが通じず、剣の刃も通らない。唯一突破出来る対滅解答も、使ってしまった。

「……まったく、難儀な事だ」

それでも、解放剣を右手に現す。

「セイバー、二人を連れて離脱しろ。私が食い止める」

バーサーカー相手では、魔力を制限されている今のセイバーでは太刀打ち出来ない。

令呪を使用して宝具を使わせれば倒す事も出来ようが、魔力を使い果たして座へ還る事になるだろう。

結果は相打ち。そんなのは俺が面白くない。

それに、クソジジイの動向が不穏だ。下手をすれば”アサシン”の襲撃が有るかも知れない。

直感に優れている彼女が付いていれば、離脱する間に襲撃を受けても何とかなるだろう。

こちらはこちらで”聖杯”を奪われないように守らねばならないが、守護対象を減らせばどうとでもなる。

「アーチャー……アンタ、死ぬ気じゃないでしょうね」

「たわけ、私は死なんと言っただろう。とっとと行け」

猫を追っ払うかの如く、半身になって左手を払った。

「……アーチャー、貴方は」

「なに、弓兵を名乗る以上は単独行動も出来ねば話にもならんだらう？」

英雄と比べて最弱としか言えない、ただの人間。

セイバーは俺がバーサーカーを止められるなんて夢にも見ないだろう。

「加勢します」

「貴様の力など必要無い」

「ですが——」

「まったく、そんなに頼りないか」

「……アーチャー？」

ならば、見せ付けてやらねばなるまい。この身に、敗走は無いという事を。

「我が骨子は——」

いつか見た、斧剣の担い手のように。
いつか見た、彼のように。
いつも俺は、この手に在る剣を解放する。

「――捻れ狂う」

全身が、世界から肅清を受ける。
全身が、地獄の業火に包まれる。
全身が、痛みを以って否定される。
全身が、焼き切れていく。

――それが、どうした。

両の手で持った解放剣が、歪む。
解放剣を持つ私が、歪んでいく。
解放者で在った俺が、歪んでいく。

解放者は此処に——反旗を掲げた。

捻り曲げられた剣が本来の姿を現していく。
以前にバーサーカーを消し飛ばした時、結界として用いた鉄塊のよ
うな剣。

この剣は、世界すらも絶ち斬るモノ。
世界が唯一恐れている、唯一つしか無い反逆の証。
その剣が、解放者である俺の手に握られた。

ただの人間である筈の解放者——それが、此処に反旗を掲げた。

「——」

誰も、何も言わない。

その瞳は、在り得ない剣を見ている。
その瞳が、在り得ないモノを見ている。

ただの人間だった筈のモノが、最上級の英霊に匹敵する力を得たモノを見ている。

人の身で、英霊に等しい存在となったモノを見つめていた。

「だから、言っただろう？ 助力など……要らんだ」

世界すらも絶ち斬る反逆者——それが、解放者の正体だった。

「とつとと失せる。 下手をすれば城が崩壊しかねん」

- - - - -

——アレは、何だ。

漆黒の剣は理解できた。
解放の剣も理解できた。

——アレは、何だ。

剣に見える。

剣に見える筈は無い。

——アレは、何だ。

剣しか見えない。

剣が見える筈が無い。

アレは、この世界に在る筈が無いモノだ。

——アレは、何だ。

理解できない。そもそもアレは——

体を落として、何かが腰溜めにソレを構えた。

——アレは、何だ。

人間だ。

人間じゃない。

英霊だ。

英霊じゃない。

——アレは、何だ。

アレは、この世界に在る筈が無いモノだ。ならば、アレは——

不意に視界が変わった。何故か顔が……痛い。

「——う！なにやってんのよ！？ 逃げるわよ！」

遠坂が俺の肩を揺さぶっている。
剣を目にしたからの記憶が無く、状況が分からない。そんな俺の頬を……遠坂が叩いている。

——俺は、何をしていた？

「士郎！？呆けてないで走りなさい！！」

遠坂が俺をエントランスの外へ押し出した。
訳も分からず、俺は闇に染まる樹海を何かから逃げる様に……俺は走って行った。

- - - - -

狂戦士の身の丈を上回る、常識では考えられない長さの鉄槐。
そんな巨大な剣を分相応と言えない体で、虚空を持っているかの様に軽い動作で肩に担いだ。

数多居る解放者でも、コレの担い手は俺しか居ない。

剣に重さは感じないが、慣性をも無視するこの剣に触れた者は瞬く間に血の花を咲かせるだろう。

これは全ての理を否定する剣——宝具だろうと、例外は無い。

「……嘘、嘘よ。そんな、貴方は」

在り得ない存在。

伝説自体が存在せず、英霊の座にも存在しない英雄。

それは人の歴史が始まる前に、嚴重に封印されて無き物とされたが為。

「嘘、か。……確かに、”本当を否定”するこの剣は嘘だな」

故に、神秘である宝具の理も有って無き物。

ソレを否定さえすれば、蘇生の理を持つ者ですら……一撃の下に葬り去る。

「だが、それも嘘かも知れん。試して見るか？」

狂戦士を前に歩き出す。

その一步を踏む出す毎に、エントランスの床が存在しない質量に因って破壊されていく。

「■■■■■■——！！！！！！」

「ダメ！下がちなさい！！」

狂戦士はマスターを守る為に、少女を守る為だけに絶望を否定する

咆哮を上げる。

敵う事が出来ないと理解してしまった主の言葉にも、彼は否定するかの様に立ち向かってきた。

この身を一撃で殺す凶悪な一閃。

しかしそれは、俺の前にただ掲げられただけの剣に弾かれる。

作用を否定され、反作用のみとなった在り得ないほどの衝撃は、その巨体ごと斧剣を跳ね返していた。

咆哮が城を震わせる。

剣戟が無駄ならばと、床を一閃して無数の飛礫を打ち出してきた。

放射状に迫る飛礫。

避ける場は有らず、撃ち返す技量など俺には無い。

そして如何に英霊並の力を得ていても、この身は人間のままだ。高速で飛来する弾丸を受ければ無事では済まないだろう。

だが、それも当たればの話。

床を蹴り、天井を蹴る。

床が瓦礫を撒き散らすよりも早く、穿たれて瓦礫となった天井が落ちるよりも早く。

音を置き去りにして肉薄する俺を迎え撃つ斧剣に、鉄槐を盾にして狂戦士の体を蹴り飛ばした。

壁に激突した巨体と、置き去りにされた音の衝撃が城を震わせる。

「流石に、ダメージにはならんか」

自身の足の破壊と引き換えに、そんな惨状を起こしても狂戦士は健

在だつた。

……　そもそも、この程度で傷を負わせられる様な存在ではない、か
その身を埋めている瓦礫を吹き飛ばし、マスターの前に盾となって
立ち塞がっている。

狂気で染まっている筈の瞳に、不屈の意思を見る。

それは何人たりとも後ろへ通さぬという……鋼の心。

「諦めも肝心だぞ？」

例えば致命傷を負っても即時に復元し、死に至る一撃を以ってしても俺は死なない。

そして神秘に守られようと穿ち抜く牙と、それを成し得る力を持ったのだ。

既に……俺が反旗を掲げた時点で、詰んでいる。

■ ■ ■ ■ ■ ■ ————— ! ! ! ! !

狂戦士はそれでも、咆哮を上げて斧剣を掲げる。

例えその身が滅ぼされようと、例え守りきる事が許されずとも、ただ彼は咆哮を上げて立ち向かおうとする。

そんな彼の在り方に……自身が重なっ
て見えた。

「……仕方無し」

右手に持った鉄槌を地に付け、狼の如く身を屈める。左手で地に楔を打ち、因果をも否定する”最終方程”を宣言した。

「Answer」

蹴った床が弾け飛ぶ。

音が置き去りにされて行く。

弾丸と成ったこの体に、決死の覚悟を纏う斧剣が振り落とされる。

「Rebellion」

紅い花が咲くかの如く、辺りに血が撒き散らされた。

「……痛てえ」

そう愚痴を漏らしながら視線を落とすと、肩口から斬り飛ばされた右腕が鉄槐を握ったまま転がっていた。

振り向けば、右の頬から血を流している狂戦士の姿。その傷は……掠り傷でしかない。

「外れ、た？」

そんな事を口にした少女に、少々憤ってしまった。

「当てる心算なら突く訳がないだろ」

突きではなく、払いならば確実に殺していただろう。

「じゃあ、どうして……」

「元々、俺が此処に残ったのは足止めの為だ。それに娘子を守る勇者を屠れる程、悪人には成りきれんな」

……自分も以前は、そうやって在ろうとしていた。

その様な者を手に掛けて、自分を否定できるほど落ちぶれちゃいない。

そんな戦いに相応しくない俺の応えに、白い少女は瞳を瞬かせた。

「んで、続けるか？俺としちゃ痛いだけだから戦りたくないんだが」

そう、痛いだけだ。

斬り飛ばされた右腕が相変わらず其処に転がっているが、既に右腕は元通りに復元されている。

しかし、反旗は体から離された為に効力を失っている。

剣の解放からやり直しとなると、さっきの焼き写しだ。

そんな事になったら、途中で噴出して台無しになりそうだった。

「……はあ、もういいわよ。何だかやる気無くなっちゃったわ」

彼女も俺と同じ予見をしたのか、うんざりとした様子で溜息をついた。

「それじゃ、ここらでお暇させて貰おう」

エントランスは凄惨な事になっているが、その事に関しては気にしていない様だ。

扉へ向かって歩き出しながら、背中越しに右手を振った。

「ああ、そうだ」

扉を前にして、振り返る。

「……守りきれよ?」

少女の横で静かに佇む巨人に言葉を投げて、戦場となった城を後にした。

掲げられた反旗

(8月14日 加筆)(後書き)

——事象設定、誘導開始。

該当条件、送信。

条件送信、完了。

条件達成、確認。

誘導完了。

——並列回路、同調開始。

ただ、守る為だけに

……どうしてこうなった。

バーサーカーを足止めして、三人と合流すべく廃屋へ向かった訳なんだが、三人はアレの真っ最中だった。
予想外な事態に……俺も含めて、皆が無言でいる。

……どうしてこうなった。

「済まん、邪魔した」

とりあえず、ドアを閉める。

真っ赤になった三人の顔は見物だったが、私に出歯亀の趣味は無い。

……どうしてこうなった。

いや、こうなる事は予想出来る事。

そもそも俺が噓けて、あの二人をそういう関係に持ち込もうとも考えていた。

だが……俺一人でバーサーカーを止めてる状況で、普通ヤルか？

……まあ、いいか。

樹海に光が差ししていく。

そんな朝の光を浴びていたら、なんかどうでも良くなった。

- - - - -

——その夢の正体に、いつ気付いたのだろう

見渡す限り、大地を砂で覆われた世界。
その砂漠に突き刺さった無数の剣には、誰一人として担い手が居なかった。

空は砂塵に閉ざされた闇の世界。

遠く地平の彼方には、森も街も海も見えない。

ただ、無限に続くかのように剣が突き刺さっている。

戦友達が眠る、剣の墓場。

——それが、アイツの心の中に唯一残っているモノだった。

様々な経緯を経て英霊となったモノは、”座”と呼ばれる所へ招かれる。

人々に親しまれたまま他界した者もいれば、高潔な王と讃えられて他界した者もいる。

戦いに臨んで散る者もいれば、満ち足りた余生を終えて消えていく者もいる。

その様な英雄が人々の信仰を受けて、英霊の形を成して招かれる。

それは、信仰を受けさえすれば本人の意思に沿わずとも、祭り上げられるという事でもあった。

英雄とは逆の存在でありながら、結果として英雄として奉られたモノ。
人間を恨みながら、人間に恨まれながらも、英雄として奉られたモノ。

そういうモノでさえ、人間は守護者として使役する。

英霊、サーヴァントと呼ばれる使い魔の中で”守護者”に位置づけられる霊長の抑止力。

彼等はあらゆる時代に召還され、人の世の破滅を防ぐ。
けど、彼等が呼び出される条件は”人間の手による破滅”だけだった。

———
原初の英雄。
サーヴァント

世界が生き続ける為に、全てを破壊するモノ。

世界によって生み出され、ただ世界を抹消していくだけの存在。

だから、彼等はいつも世界の終焉を見せられる。

世界を救う”英雄”として呼び出されるのに、全ての破壊を押し付けられ続ける。

何も知らされず生かされ、事が起これば自身を含めて消滅させられる。

それを彼等に気付かれれば、世界は”殺される”かもしれない。

———
そしてアイツはもう、それに気付いている。

「凜、大丈夫か？」

不意に声をかけられて、目が覚めた。
周囲に見えるのは……墓石の立ち並ぶ、外人墓地。
空は既に、闇に染まっている。

「……ごめん、寝てたみたい」

「まあ昨夜から大して寝てないからな。無理もないだろう。
だが、どうする？体調が悪いのなら見合すのも手だが」

「……キャスターがこっちに居る内に、決着つけちゃいましょう」

そう決断して、自分の体が温かい事に気付いた。
彼の黒い外套が、私に掛けられている。

「……別に、起こしてもらっても良かったのに」

「あんまり無理させる訳にもいかんだろう。
それに、立ったまま寝る人間を見るのは中々に面白い」

「……女の子の寝顔を見るなんて、性質悪いわね、貴方」

「姫君を守るは騎士が役目、ならば役得というものだ。」

しかし……君が泣き始めるとは思わなかった」

そう言つて、彼の手が私の顔を拭った。

……寝顔を見られた上に、泣き顔まで見られてしまったのか。

「役得つてだけじゃ、済まされないんじゃない？」

「ならば我が姫君に、此度の戦の勝利を捧げるとしよう」

なんて言いながら、彼が騎士の礼をする。

「……アンタって、カッコいいのかバカなのか、時々判らなくなるわね」

「何、それが私の本望というだけの事だ」

そんな事を趣味にして欲しくない。けど……私は、そんな彼の事を結構気に入っていた。

「アーチャー、行くわよ。教会なら少しは詳しいし、何処に隠れてるかくらいは見当ついてる」

彼の外套を返して無言で歩き始めるが、

「……自分のやってきた事、後悔した事ってある？」

私は振り返らずに言葉を投げた。

「――」

「私は出来れば最後までしたくない。

けど、それって難しいんじゃないかな。きっと、私が考えてる以上に」

「出来る者もいれば、出来ない者もいる。ただ、それだけの事だ」

「……アーチャーは？」

「後悔なぞ、一度たりとも無かったな」

黒衣の外套に身を包む騎士が、そう断言した。
例えその手に何も残らなくても、彼はそれを受け入れていると言う。

……まるで、それが当たり前であるかのように。

「——そう。それじゃ綺礼は殺したわけ？」

「ええ、始末したわ。」

素直に聖杯を差し出す人間でもなかったし、邪魔をされても困るもの」

……あの性悪に死ぬ日があるなんて、夢にも見なかった。

あんなんでも居なくなると、まあ、少しは寂しい気もする。
例えば気に食わない奴でも……殺したコイツは許せない。

でも――

「綺礼もそれぐらい覚悟してたでしょうけど、あいつの死体は確認した？」

「……それはどういう意味かしら、お嬢さん」

「あいつが簡単に死ぬヤツかって。
はつきりと死体を確認してないんじゃない、間違いなく生きてるわよ」

やっぱり、あの性悪が死んだとは思えない。

「まったく、どうせ綺礼を襲うなら、しっかりきっかり息の根を止めておけての。」

……まあいいわ。やる事も出来たし、早めに終わらせましよう。

今回は人質もないし、気持ちよく戦えるわ」

「大きく出るわね。貴女はこの状況で勝てるというの？」

「愚問ね。セイバーを制御しきれてないようだし、私のアーチャーは貴女なんかには負けない。」

私が葛木先生に殺られる事も無いし、貴女達の負けは揺るがない」

キャスターが相手なら、彼は太刀打ちも許さず打ち倒すだろう。それを――

「理想論だな。逃げるだけなら彼女は逃げ切る。ここで倒す、ということとは難しい」

――彼自身が否定した。

「……アーチャー？」

「ならば何度でも君を襲い、いつかは殺されるだろうな」

「そうね、そこのお嬢さんと違って判っているじゃない」

「……でも、貴方なら守りきれるでしょ？」

「たわけ、俺でも守れん事は有る」

彼は死なない。何度でも戦える――けど、私は一度死んだらそこで終わり。

「ええ、そうでしょうね。それで、貴方はどうするつもり？」

「何、命乞いという物だ。私が降る代わりに、彼女を見逃してやつてくれ」

そう言いながら彼はキャスターを背に、私に対峙した。

「……恨むなよ。俺には、こうする事しか出来ん」

「ふ——ふふ、あはははははははははは！」

キャスターが笑っている。

私の為に膝を付く彼を、滑稽だと笑っている。

——私は、彼の足枷にしかなれない。

「いいでしょう、アーチャー。そこのお嬢さんは見逃してあげる。
でも、私に齒向かうと言うのであれば容赦はしないわよ？」

「その時は……この手で終わらせてやるよ」

——私は、無力だった。

「それじゃあ、私の所へ来なさいな。令呪に縛られたままで、牙
を向けられたら困るもの」

「別に構わんが、そもそも彼女とは契約していないぞ？
元より私は何人たりとも縛れぬ存在だ。対価が無くては言う事
すら聞かん」

警戒も無く近付いた彼の胸に、キャスターがセイバーの契約を破った短剣を突き刺した。

「……驚いた。貴方、そもそも人間だったのね」

「ああ……英霊相手に戦える、ただの人間だ」

キャスターが笑っている。

キャスターの下に……私の為に、解放者が降った。

「さて、凜よ。君との主従の誓いは破棄する。……この戦いから降りろ」

「……ふざけないでよ」

「相手が悪過ぎる。それでも君が納得できないのなら——」

彼の両手に漆黒の剣が握られた。

彼の目には、殺意だけが映っていた。

- - - - -

降りた。

階段なんて使ってられなかった。

気付けば5メートルもの高さから、遠坂の真後ろに飛び降りていた。

突然乱入した俺に、皆が目を見張る。

その中で一人、当然のように動く敵がいた。

躊躇など無く、その男は突如現れた俺に抱く感慨も無い。

そして、その死神の拳が打ち出された。それは花の茎を折るかの如く、俺の首をへし折るだろう。

——防ぐ手段など無い。

わずか二秒すら、俺には保てない。

何も出来ず、遠坂を逃す事さえ叶わない。

——手段など、最初から持っている。

「^{トレース}投影、^{オン}開始」

概念、創作者の思想思惑道德信仰から起源そのものを^{リードする}読み込む。

” C a u t i o n ”

故に投影。其は真物より落ちる同一の影。

” C a u t i o n ”

一度成したモノならば、再現に支障など——

” P u r g i n g ”

——問題は、別の事だ。

体が焼ける。

神経が千切れる。

視界が罅割れて、心音が消えていく。

この体は……ソレに耐えられない。

——有り得ない。

この体は、ソレに特化した魔術回路。

この体は、剣と共に生きるモノ。

故に、剣製で衛宮士郎が自滅する事など——有り得ない。

死を与える鉄槌を弾く。

手にした得物が同じなら、対峙する敵もまた同じ。
違う事といえば、俺の手には漆黒の双剣。

「——」

葛木が退いた。

前回と違って、俺の手には二つの剣が在る。アーチャーの本来の剣
技が使える。

ならば、ニンゲンのクズキなどコロシ——

「ぐ——げふっ……………」

肺が爆発した。

止まっていた呼吸が、血と共に吐き出された。

……そんな事はどうでもいい。

遠坂が逃げ切れるまで、この体を保てればいい。

「ば、バカ……！！ アンタ、なんだってこんな所に来てんのよ！？」

それなのに遠坂は逃げもせず、俺を罵っていた。

「わるい、文句は後で頼む。今はアイツらをなんとかしよう」

隙を見せれば、葛木は容赦なく俺を殺す。

アーチャーは……それを静観していた。

「手を出してくると思っていたが、飛び降りてくるとは思わなかった」

拳を構えたまま、葛木が俺と遠坂を見据えている。

遠坂を見逃すといっても、遠坂自身が手を出せば容赦は無いだろう。

「そこまでよ。貴方の乱入には驚いたけど、状況は変わって無いわ。

退くのなら、お嬢さんは見逃してあげる。……けど、貴方は別ね」

キャスターの手が俺に向けられた。

「生かしておいても面倒でしょうし、ここで終わらせて——」

「——キャスター、追加だ。そいつも今は見逃せ」

「……アーチャー？ 貴方、彼に情けを掛けろというの？」

「こいつは先走って出てきただけだ。俺の警告を勘違いしたんだろっよ」

黒衣の騎士が、仕方のない奴だと笑っている。

「こんなバカでも、身を挺して姫君を守る騎士サマだろう？」

それがバカやらかして死なせたとなれば……流石に後味が悪い」

アーチャーは遠坂を裏切った。だが、それは遠坂を守る為だけにした事だ。

……ああ、俺が出て行かなくても良かったのか。

「まあ君が、姫君を守る騎士サマを蹴るのが趣味というのなら話は別だな。

俺は例え全員死なす事になろうが……君と主を必ず殺してやる」

”そう在るのが気に食わない”

アーチャーは、それだけの理由で復讐者に身を堕とせると言っていた。

「……ふん。貴方、結構甘いよね」

「ニンゲンだからな。慈悲を掛けることも有るだろ」

「……いいわ、今回は見逃してあげましょう。その代わり、次に目障りな真似をしたら殺します」

「そこまでバカだったら、俺が直々に殺してやるよ」

霊廟に満たされていた圧迫感が薄れた。

キヤスター達も、俺達を見逃す事に決めたらしい。

「とつと尻尾撒いて失せろ、小僧」

そんな言葉を吐くアーチャーを睨め付けるが、遠坂が俺の腕を引っ張った。

「行きましょう。……もう、いいから」

その囁きに呼吸を鎮めて、目の敵に背を向けた。走る事はせず、ゆっくりと階段まで歩いていく。

遠坂が階段に足を掛ける前に、振り返ってキヤスターを睨んだ。

……いや、見据えた相手はアーチャーの方か。

「——私は絶対に降りない。キヤスターを倒してアンタをボコる。謝っても許さないんだから」

「……その考えが変わる事を祈ろう。さらばだ、凜」

遠坂が階段を昇り始める。

その横顔は、ただ悔しげな感情に染まっていた。

ただ、守る為だけに（後書き）

—— 根源への再接続を確認。

認識コード「Blade maker」破棄。

コード「Revolt」発信、実行。

—— 対象の沈黙を確認。

認識コード「Faker」送信、実行。

……… 確認、敷写完了。

—— 自動再起、確認。

並列回路、同調開始。

洗礼

（8月14日 加筆）

「キヤスター、野暮用が出来た」

喘ぎ、抗うセイバーの前で嘲笑していたキヤスターに声をかける。

「……一体、何の用よ」

「アサシンがやられたのは知っているだろう？ 連中が動いたぞ。私の本業に関わる事なんでな、そちらを片付けにいく」

「……ふん。せいぜい役立たずの狗みたいにな、返り討ちにされない事ね」

「そんな事を言っただけでやるな。体ごと依代にされて召喚されたんじやあ、ヤツに術は無い」

呼び出した奴も、呼び出された奴も既に確認済み。

この状況で動き出したとなれば……狙いは”聖杯”だろう。

「好きにきなさいな。どうせ、私が止めても行くのでしょうか？」

「勝手に動いて、凜へ手を出されても困るからな。屠ってくるだけだから待ってろ」

茜色に染まった樹海を駆ける。

ランサーの存在を確認。　バーサーカーの存在は……消えていた。

——やはり、ヤツは守りきれなかったか。

”アサシン”は感知できなかった。　……流石に、残滓が少なすぎる。

その代わり、此処から離れた場所に不明のサーヴァントを感知。そして、”クソジジイ”と対峙している綺礼を発見した。綺礼は……蟲の大群を前に苦戦していた。

「教会の外れ者風情が……貴様などサーヴァント無しでも、どうとでもなるわ——！！」

嘲笑が樹海に響き渡る。

魔を退ける聖職者が、嗾けられる蟲共を無言で焼き払っていた。

……だが、あれではジリ貧か。

「——貧しさや飢えは耐えられよう。怠慢や墮落も許されよう。軽い罪なら咎めはしない」

俺の言葉が、樹海に響き渡る。

「——っ！？ぬかったわ、新手……何？」

蟲供が、沈黙していく。

「殺す無かれ、犯す無かれ、盗む無かれ。其は原始の戒律なり」

「……？——っ！？」

咎人が、沈黙する。

「掟を守らぬ者には死を。天から血の雨が降るまで制裁を」

信じられないモノを見るかのように、綺礼が俺を見ている。

「我が名は解放^{リベル}。……我等は、全てを無の下へと還さん」

その言霊に従って、咎人は”拘束”された。

「……ふむ、それは洗礼詠唱か？」

似非とはいえ、綺礼も神の子ということか。同じソレに気付いたようだ。

「いや、私に唯一許された”束縛”の法だ。こういう外道にしか効果は無いが」

クソジジイを見て、鼻で笑う。

「綺礼、手伝え。貴様も神の子ならば、こういう輩は無視出来んだろう？」

和服の襟首を左手で締め上げて、持ち上げた。
それに倣って、綺礼が右手で締め上げる。

「手伝え、とは言うが……さて、どうしたものか」

その言葉に、鼻を鳴らして答えた。そんなコト、決まっているだろうに。

——外道には、コレが一番いい。

「私が殺す。私が生かす」

「……私が傷付け、私が癒す」

俺のコトバに綺礼が続く。

『我が手を逃れうる者は一人もない。我が目の届かぬ者は一人もない』

俺達のコトバに、咎人が声も無く慟哭を上げる。

『打ち砕かれよ。』

敗れた者、老いた者を私が招く。私に委ね、私に学び、私に倣え。

唄を忘れず、祈りを忘れず、私を忘れず。私は軽く、あらゆる重みを忘れさせる』

このコトバは、ただ咎人に刻むモノ。

『装うなかれ。』

許しには報復を、信頼には裏切りを、希望には絶望を。
光あるものには闇を、生あるものには暗い死を』

そのコトバは、咎人を無へと還すモノ。

『休息は私の手に。

貴方の罪に油を注ぎ、印を記そう。永遠の命は、死の中でこそ
与えられる。

——許しはここに。受肉した私が誓う』

咎人が、断頭台へ立たされた。

「この魂に憐れみを」
キリエ・エレイン
「この魂に憐れみを」
liberation
「この魂に憐れみを」

輪廻の中で巡る、魂をも抹消する言霊。解放の解答式で発現する——
絶対なる法律。

その法に裁かれた咎人が、その身を灰と化して無へと還っていく。

——もし、選択を間違えた事に気付いていれば。

俺はそんな事を考えながら、輪廻の輪から外された咎人を見送っていた。

「……妙な輩とは思っていたが、まさか同業とはな」

「聖職者ではないぞ？ 神に使役されていた、元執行者といったところだな」

黙っていたれば俺も見逃してやる心算だったが、しゅしゅり出てきた以上は目障りだ。

慈悲も無く容赦も無く、審判の場に立たせて断罪してやった。

「懺悔の天使、か。……やはり、同業だろう？」

「抜かせ、クソ坊主共と一緒にされちゃ困る。

……あと、俺をその名で呼ぶな。天使と呼ばれても嬉しくない」

不機嫌になった俺を見て、綺礼が苦笑した。

「私としては、その嫌がる名で呼びたいところだが」

「そもそも俺とは管轄が違う。連中も怒るぞ？」

「……連中、とは？」

「お前が口にした、天使ってヤツだよ」

外道に落ちた者は死した後、”世界”によって抹消される定めにある。

そんな外道は死するまでに、人々にとっては多大な損害を撒き散らすのが常だ。

それでも、頭の固い”世界”は規則通りに手を出さない。”世界”にとっては規則が全てだからだ。

だから、この世には私と同じモノが残されている。

彼等の導きによって、外道共を断頭台へと担ぎ上げるだろう。人々は何時も己が為に、自らその手で駆逐していくのだ。

その手助けをしているのが天使と呼ばれる連中だが……まあ、俺は鴉と呼ばれるほうが性に合っているな。

「さて、本業も終わりだ。癩癩持ちの魔女様を諫めんな」

「……貴様は、本当にキャスターの下に付いたのか？」

立ち去ろうとする俺に、綺礼が言葉を投げてきた。

「まあ人質を取られているようなものだからな。仕方ないだろう？」

背中越しに視線だけ向けて、そう答えた。

綺礼に手を振りながら歩き出す。

俺は闇に堕ちつつある樹海の中を、ゆっくりと歩いて行った。

「……無念、だな」

既にこの世に居ない、バーサーカーと雪の少女を思う。
分かりきっていた事とはいえ、やはり悲しいものは悲しい。

「まあ手向けだ、俺が君の無念を晴らすとしよう」

俺は全てを受け入れる。だが、俺はそんなモノ認めない。
あいつの口癖が俺を塗り替えた。あいつの口癖は、俺をも嘘つきに
仕立て上げていた。

「世界は良くなる、絶対に」

だから俺は嘘をつく。
嘘について如何にも為らなければ、それはそれで仕方ない。俺では
如何にも為らないのだから。

”ただの嘘”で駄目ならば……その時は”本当の嘘”をつくとしよ
う。

太陽が昇る。

だが、俺の心を写すかのように空は沈んでいた。

教会の前で対峙するは、口約束とはいえ元の主。そして士郎と……ランサーか。

「へっぽこだけじゃ飽き足らず、敵の騎士まで己に組み込んだか。……まったく、強欲な姫様だな。よく付き合ってもらえるものだ」

そんな彼女を嘲笑するかの如く、鼻で笑った。

「前から気に喰わねえヤロウだと思っていたが……性根まで腐っていたか」

「裏切り者は嫌いか？ 自身が裏切られたという訳でも無いのに律儀だな、ランサー」

「別に嬢ちゃんに肩入れする気はねえよ。」

単に、テメエみたいな騎士サーヴァントがいるって事だけが気に喰えねえだけだ」

俺のような存在は英雄様には目障りか……いや、生前に忠誠を貫き通したランサーだからこそか。

目的の達成が困難ならば、環境を変える。このやり方が一番、理に適っているというのにな。

「まったく、少しは利口にならんものか」

「言ってる。その口……黙らせてやる」

見るだけで俺を射殺しかねない殺気をランサーから放たれた。

実際、一瞬さえあれば槍が繰り出されて殺されかねないが……黙って殺されるほど、御人好しでも無し。

「お前たちは中に行け」

「……わかってる。けど、アーチャーは」

「殺しても死なない、だろ？ ま、これでも英霊だ。足止め出来きねえと名が廃る」

……ネタをばらされたか、一筋縄ではいかんな。

「——危なくなったら、貴方だけでも逃げて」

そう言い残し、俺の横を凜と士郎が通り過ぎる。

それを阻む事無く、目を向ける事も無く、俺はランサーだけを視界に捉えた。

キャスター達が相手にするなら、人間の魔術師よりはランサーの方が厄介だろう。

この男さえ足止めすれば、言いつけられた門番の役割は果たしている。

と言っても、ランサーが相手では俺も手一杯だ。二人の目的が俺でない以上、阻止する事は難しい。

「……まったく、面倒な事になっちまった」

ランサーが頭を掻きながら、ぼやいた。

「何がだ？」

「いや、一時的とはいえ、お姫様に頼られる騎士って役も悪くねえと思つてな」

「ああ、彼女はソレに値するしな」

今は手を貸しているが、敵同士である事に変わりはない。肩入れを過ぎれば後味も悪くなるだけだろう。

それでも、ランサーは「違えねえ」と言つて笑っていた。

「だが、解せんな。オマエほどの奴ならキャスターに降らずとも、どうにでもするだろうに」

「損害を少なく収めるには、これが一番簡単な解決策というだけの事だ。」

諦めの悪い主のせいで台無しになつたが」

「……そのひん曲がった考え方だけが残念だ」

「曲がっていない物が良い物、とは限らんだろう。」

飽くまで気に食わないと言っのなら……その手で矯正してみせろ」

ランサーへ向かって駆けながら、漆黒剣を手にする。

迎撃するは神速……既に光にすら見えない突きが繰り出された。

体の動きから、見えない切っ先を予測してソコに剣を置いていく。

”合わせ”る事も出来ず、ただソコに置いて防ぐ。

「っ——！」

何度も槍が体を掠め取る。何度も体を抉っていく。

だが、致命傷となる一撃は何としてでも防いだ。一度喰らい付かれてしまえば為す術無く、蹂躪されてしまうだろう。

血塗れになりながらも、自身が持ち得る限界の業で捌いていく——

——限界など、誰が決めた。

「Intensification」

限界を越えた強化を叩き込む。機械的に増幅された負荷に、体全体が軋みを上げる。

この方法では人間の体である限り、膨大な反動に耐えられず動くだけで自滅するだろう。

動く度に肉が裂け、受ける毎に骨は破断する。

されど、腕が千切れようともし例え内臓が爆ぜようともし……この身は、不屈。

既に焼き切れ続けている神経に光を乗せて、繰り出される槍を視認する。

漆黒の剣を”合わせ”、逸らし、弾き、槍の英霊に肉薄した。

「まったく、手加減してたのはお互い様かつ……！」

ランサーの槍が軌道を変える。

槍を受けた剣が弾け飛び、俺はそのまま手に在る剣で斬り付けた。

「ざけんな……！ テメエの何処がニンゲンだ！？」

既に満身創痍な筈の俺は……血に塗れようともし無傷。
それに対して、ランサーの体は確実に傷を負っていく。

「——るせえ……！ テメエも、地獄に、焼かれて、みやがれ！」

—— いっぺん、死に続けてみやがれってんだ。

「はっ、御免だね」

胸元を強引に蹴り飛ばされた。

同時にランサーが地を蹴り、大きく間合いを離す。

広場の入り口まで跳んだランサーが獣如く四肢を付いている。地面に四肢を付いたままに腰を上げる様は、号砲を待つスプリンターの様にも見える。

「オレの槍の真名は知っているな、アーチャー」

「来な。その自慢の槍、へし折ってやる」

次に来るのは生半可なモノではない。きっと、”強化”程度じゃ話にならないシロモノだ。

「行くぜ……この一撃、手向けとして受け取れ——！！」

蒼い豹となったモノが広場を駆ける。

五十メートルもの距離を一息で駆け抜けた槍兵が、空をも穿たんとして跳躍した。

大きく振りかぶったその槍は——放てば必ず、心臓を貫くという魔槍。

……来る。

あの伝説の槍が、俺を殺しに来る。

だが、この体は死なない。何もせず受けても、俺にとっては痛みに耐えるだけで済む一撃だ。

それでも、俺は剣を手にして反旗を掲げた。

俺はただアレに――

い。――”世界に殺される”事だけは我慢出来な

「――突き穿つ」^{ゲイ}

「――我が骨子は」

「死翔^{ボルク}の槍――！！！！！！」

「擦れ狂う――！！！！！！」

地獄の業火に焼かれながら、赤で染まる視界で魔槍を凝視する。

躲しても、弾いても、必ず心臓を穿ちに来る魔槍。

その結果は既に決定事項。覆す事は不可能だ。

「 Answer 」

だが、例え世界の理が相手だろうが——この剣に絶ち斬れぬモノは無い。

「 Rebellion 」

迫り来る魔槍に鉄槐———反逆剣を叩き付ける。

腕が爆ぜた。

眼球が爆ぜた。

脳漿を撒き散らしながら臓物が散乱していった。

辺りは瞬く間に、何十人分もの血溜が出来ていた。

クソッタレガ コロシテミセロ

潰れた喉で、咆哮を上げる。

無限の命を燃やして、咆哮を上げる。

例え体が千切れようと、この身が焼き尽くされようと、俺はただ咆哮を上げ続ける。

———折られて、堪るか。

地に降りたランサーが俺を見ている。

俺の周りには血と臓物、四肢だったモノが散乱している。

そのアリエナイモノは直ちに、世界によって消滅させられるだろう。そんな惨状に遭っても、やはり俺は無傷だった。

だからといって、そう何度もやられると……流石にツライ。

この手のモノは本当に、相手にしたくない。

「……貴様、何者だ」

「ただの人間だ。その前には不死の、と付くがな」

そう、この体は紛れも無い人間の体。永遠で在る事以外は普通の体だ。

何の変哲も無い短剣一本でも、そこらにある石の塊でも簡単に”殺す”事が出来る。

解放者には無限の情報に耐えうる素質以外、何も与えられない。

耐える素質が有っても、処理する機能までは与えられない。

偉業を成す事も無く、子を生す事も出来ず……ただ、一人で平凡に

生きる事を定められた人形だ。

「ふざけるな。……人間が、宝具をも覆すモノを持てる筈が無い」

「テムエの物差しで測るなよ？ そんなんじゃ足元を掬われるぜ、ランサー」

永遠に生きる者にのみ、手にする事が出来る理があった。
不死となった者ならば、誰しも手にする可能性がある一つの答えがあった。

無で在ろうとも有に、有で在ろうとも無に。
世界を書き換え、敷写して発現させる、森羅万象を操る術――

――人々はそれを、魔法と呼んでいる。

目の前で力尽きた槍をランサーへと放り投げた。
へし折るとは言ったが、まあ概念の方をへし折ったから良しとした。

「セイバーには躲わされるわ、貴様には叩き落とされるわ……いっつそ、必中の看板降ろしちまおうかね」

「抜かせ。セイバーは兎も角、俺は無茶苦茶に苦労したぞ？」

因果を否定する反動で、一瞬にしてアレだ。散乱した肉片を集めれば、どれ程の量になる事が。
問答している内に消滅してしまったから、今更そんな事を考えても仕方が無いが。

「それより、気付いたか？ キヤスターの奴、俺たちの監視を忘れていやがる」

「……そうじゃねえかとは思ったが、やはりその考え方は好かん」

「ふん、テメエの我を通したいなら俺をコロシテみやがれ」

ケケケ、と悪魔染みた顔で笑ってやった。

「そんな割に合わないコト、令呪を使われてもしたくねえな」

ランサーがうんざりとした顔で槍を肩に乗せた。

「さて、魔女狩りの時間だ。貴様も来るか？」

「勝手にしてろ。……まったく、こんな茶番につき合わされるとはな」

またもばやきながら、その身を翻してランサーが去っていく。そんな彼を背に、俺は扉を潜って教会の中へ入っていった。

主の居ない教会。

代わりに居るのは魔女と草。

そして一人の騎士と赤の魔術師が、囚われの騎士姫を救出すべく死闘を舞っている。

「..... Sword maker delayed Execution
ion」

陽の無い、中庭の回廊から地下へと降りる。

聖堂では士郎を相手に、葛木が攻め倦ねていた。

贗作とは言え頑強さに特化した剣と、後の先に特化した無形。

葛木にとっては鉄壁を相手にしている様なものだ。相性が悪過ぎる。

キヤスターは凜の猛攻に圧倒されていた。

魔術戦でキヤスターを上回るのは限られている。しかし、接近戦となれば話は別だ。

格闘の術を持たぬ以上、術を持つ凜に接近を許した時点で挽回出来ないだろう。

葛木が加勢に回る事も叶わず、やはり二人の勝利は揺るがない。

このまま俺が傍観していればキャスター達は倒れるが――

「――っ、アーチャー」

階段から見降ろしている俺に、キャスターが気付いた。
その顔に浮かぶのは……希望と言う安堵。

「目測を誤ったな、キャスター」

一瞬、二人が俺の言葉に気を取られた。
その刹那を見逃さず、身を翻し、一息で接近した葛木が凜を弾き飛ばす。

「……形勢逆転、ね。後少しと言うところだったけど、お嬢さん達の負けよ？」

キャスターの前には葛木が構えている。

前衛と後衛、それも最高の組み合わせな主従。

奇襲が失敗に終わった今、突破出来る術は残されていない。

前に差し出されたキャスターの手に魔力が収束する。

たった一言紡ぐだけで聖堂は火の海と化すだろう。

それに対峙する二人は為す術も無く、焼き尽くされる。

キャスター達の勝利が確定した。

——君が、約束を違えていなければ。

「トレスオン
敷写開始
」

キャスターの瞳に戸惑いが灯る。

以前、その身を敗北へ導き出そうとした剣の雨。

生身の人間では避ける事も出来ずに蹂躪され、確実に死へと導く。

逃れ得る事の出来ない、告死の雨。

その対象は自身の主だ。

切っ先は全て、葛木へと向けられている……ソレを、彼女は瞳に映していた。

転移をすれば、彼女は逃げられるだろう。
障壁を張れば、彼女は生き抜けるだろう。

……しかし、やはり彼女はそれを選んだ。

葛木を庇い、自身の体を盾としたキャスターへ雨が降り注いでいく。
魔力を紡ぎ、障壁を張る事も出来ず、ただ剣に穿たれていく。

剣の雨は一度きり。通り雨の如く、直ぐに止む。

それだけで十分だ。死の宣告は確実に、命を一つ刈り取る。

血に塗れながらも、キャスターは葛木の無事を確認して、その顔を
一度撫でた。

無数の剣に串刺しにされながらも、そうやって、彼女はこの世から
消え失せていった。

葛木は死した彼女に感慨を持つ気配を見せず、俺を見据えている。
サーヴァント

「獅子身中の虫か。初めからこれを狙っていたな、アーチャー」

「キャスターとは以前、約束を交わしていたね。それを遵守して
いれば違う結果になっただろうよ」

「……ふむ、初耳だな。約束とは？」

「彼女は竜牙兵と言うものを使役していてな、召喚せねば見逃す
と言ったが——」

「——そうか、あの結界の時だな？」

「ああ。火急という事もあつて破つたようだ」

「……結局はキャスターの落ち度であつたか」

「そう言つな。彼女は貴様の為だけに、滅ぶ事を選択した」

「――」

葛木が構えた。これ以上、問答は必要無い。
右手に解放剣を握り、刺突の型で備える。

無形を使える漆黒剣ならば有利に立てるが、一振りしかない解放剣では見劣りする。

剣術にも自負が有ると言つても、それは飽くまで常人に対してのもの。

葛木の拳術を相手にすれば相討ちが良い所だろう。

……俺が、死ぬ事が出来るのなら。

「待て、どうして続けるんだ。キャスターはもう居ないんだから、戦う理由なんて――」

「――これは私が始めた事だ。それを、途中で止める事は出来ない」

「やめろ、勝負はついただろ。これ以上は」

士郎の言葉を切つて、瞬時に間合いを詰めた葛木が俺の頭を打ち抜いた。

額が弾け飛び、血と脳漿が撒き散り、視界が闇に落ちる。

脳という中枢を損傷すれば、俺でも感覚を失う。
現に、今は音も無ければ上下の感覚すら無い――

――闇に向かって、右手を突き出す。

この身体は感覚が無くなろうとも、意識は消えない。
この身体は感覚が無かるうが、動かせる。

元から俺は”生きて居ない”。器の欠損など今更、障害にすら成り得ない。

光を戻した視界には剣に貫かれた、自身の胸を見る葛木の姿が在った。

剣は正確に心臓を通っている。引き抜けば、何もせずとも死を迎えるだろう。

「わりいが、一人で逝ってくれ」

心臓より肩へ、強引に剣を斬り抜く。

激痛と急激な失血で昏倒し、葛木は眠るように、そのまま事切れた。

剣も、腕も、黒衣さえも返り血に塗れている。

何度と経験している事だが……やはり、気分の良い物ではない。

「――アーチャー、大丈夫？」

凜が俺に声を掛けてきた。

こちらへ来てから、実際に死ぬのは初めての事だ。
目の前で派手に死なれて、流石に心配になったらしい。

「死ぬ事には慣れている。問題無い」

……だが、出来れば殺したくは無かった。
悪に落とされた者と、共に在ろうとした者。
そんな二人を手には掛けたく無かったが、こうなっては仕方が無い。

”裏切りには死を”

数少ない、”俺達”の原則。

今の俺ならば誤魔化しも利くが、優先順位までは変えられない。

相反する、理念と理想——”俺達”は常に、理念を選択する。

理想は此処に潰えた。

せめて向こうでも一緒に在れと祈りながら、横たわる亡骸の頭を撫
ぜた。

「……そっか。変だと思ってたけど」

「……………」

「二人も、護りたかったんだ」

「……何を言い出すかと思えば、世迷い事か」

俺が守護する者は抗う事を許されない者だけだ。二人はその対象から外れている。

原則を犯した以上は殺すのみ。ただ、それだけだ。

「誤魔化しても無駄よ？ キャスターが約束破ってなかったら――」

「――もし、たら、れば。そんなものに……価値など無い」

価値が有るとすれば、この世は等しく……全てが無価値だろう。既に過ぎた事。夢を見る必要は無い。

「Incineration .」

”焼却”を紡ぎ、亡骸を火へ焼くべた。

即座に次代へと巡る事が出来るよう、世界に還元する。

「……不謹慎だけど、綺麗ね」

亡骸を包んでいるのは蒼い鬼火。そう感じるのも無理は無いか。鬼火は熱を残さず、灰すら残さず、跡形も無く亡骸を滅却する。

……結局、自分の手で始末した。

死を与える以外に、この手で救える者は限られている。

どう足掻こうが俺では如何にも出来やしないし、何度と繰り返そうが徒勞に終わる羽目になるだろう。

最期には、全てが無駄と化すだけだ。

「……下らねえ」

「なによ、急に」

士郎の肩を借りて、セイバーがこちらへ向かって来ている。
マスターからの魔力を得られないままに束縛されていた影響で、その足取りは覚束ない。

今なら俺でも簡単に殺せる。漆黒剣を具現し、即座に投擲した。

「——っ!!」

セイバーが咄嗟に士郎を突き飛ばし、紙一重で躲された。
瞳に映していたとはいえ、殺意を消した奇襲へ即座に対応したのは流石と言える。

「……力尽きようとも、英霊か」

セイバーは武装しているが、それを維持している魔力は直ぐに費える程しか残されていない。

だが、剣の投擲では少々手間が掛かりそうだ。

「ちよつと、何やってるの？」

突然の事に途惑いながらも、事態だけは把握出来たか。
俺がセイバーを殺そうとした事を、凜は問いただした。

「こんな下らん戦い、とつとと終わらせてやる。それが望みだらう?。」

「どう解釈したらそうなるのよ。私の目標は勝つ事であって終わらせる事じゃない。」

それに、弱った所で同盟破棄なんて私がすると思う?。」

「はっ、甘いな。どうせセイバーは敵に回る。ならば、ここで殺すのが手っ取り早いというもの。」

ただ、頑強さだけを求めた虚空の双剣を握る。

宝具に劣る駄剣と言えど、無属性が故に、霊体が相手だろうと確実に損失を与える代物だ。

それ自体は微々たる物。しかし、傷を付けた瞬間に”吸収”を発動させれば、何で在ろうが甚大な損失となる。

この剣の真価は無機有機、生死を問わず、その”存在”を無へと還す事。

如何に英霊であろうとも、その理に抗う術の無い者は等しく、消滅する。

今のセイバーは、それを持っていない。一撃が入れば、それで終わりだ。

これより先は巡る事を許さない。此处で、引導を渡す事にする。

「待ちなさい。もう、勝手な真似は許さないわよ」

「君の指図は受けん。俺は俺の意思で動く、そういう約束だろう?。」

「じゃあ何？ 貴方、また私を裏切るって言うの？」

「またとは心外だな。主従の誓いは破棄したと言った筈だ」

一足で距離を詰め、セイバーへ斬りかかる。

それは剣で受け止められたが、それだけだ。がら空きの腹部を蹴り飛ばす。

本来、英霊には物理的な攻撃は通じない。しかし、受肉している彼女は例外だ。

白打では致命傷を負わせる事が出来ずとも、その衝撃自体は無視出来ない。

壁へと打ち付けられたセイバーは、その場で膝を付いた。

「……そう。アンタがその気なら容赦しないわ」

「それで？ 君なら、俺を殺せるとでも？」

凜のそれは、脅しにすらなり得ない。

両の手に漆黒剣を握り締め、跳躍し、振り落とす。

「ぐっ——！」

あれだけで、剣も紡げなくなったらしい。

両腕の手甲で防ぎ、自ら跳んで俺から距離を離していった。

「アーチャー、何故だ！！ キャスターを倒した今、何故私に剣を向ける！？」

「貴様は生かして置こうかと思ったが、気が変わった。こんな馬

鹿げた茶番、付き合ってられん」

「茶番、だと？」

「茶番だろう？ この戦いが高尚な物とでも言いたいのか？
利用されているとも知らず、殺し合うのが茶番じゃなかったら
何が茶番だ」

まったく、馬鹿げている。

願望機として聖杯を構築するのは良い。しかし、此処の聖杯は欠陥
を抱えていた。

叶う願いは個別ではなく、全対象。”この世全て”だ。
その上、汚染されて逆転している。どう転ぼうが、当事者の思惑か
ら外れた結果となるだろう。

「……それでも、私は」

「ああ、セイバー。一つ言っておくが、貴様の願いは叶わんぞ？
願えば生き延びた連中が全て死ぬか、別の奴が貴様と同じ道を
歩む事になる。

”世界”はそう出来ているからな。過去を消しても無駄な事だ」

欠陥持ちの聖杯に、そもそも叶わない望み。

死に際して彼女が願った望みは、徒勞だけにしか成り得ない。

「……何故、私の望みを知っている」

「時と次元を超える魔法を目にした事が有る、としか言えんな。
貴様の事はその時に知った。

もう一つ言えば、この”世界”には俺とは別の者が呼ばれる筈

だったが、俺が呼ばれた以上は意味の無い事か。

……話過ぎたな。とつとと貴様を殺して、この戦いを終わらせに行くでしょう」

- - - - -

「このッ……………!!」

セイバーへ歩み寄るアイツへ向けて、遠坂が咄嗟にガンドを放った。

背中からの、完全な死角。見える筈も無い。

それにも関わらず、振り向き様に剣を合わせられた。

剣に触れた魔弾は音も立てず、跡形も無く消え失せる。

「無駄だぞ、凜」

「じゃあ、これならどう?」

遠坂の手には宝石が一つ。

秘められた魔力を解放する呪文を口にし、

「ウィング&イルヴォイデ
風よ凪げ」

形にする前に、掻き消された。

「……そんな」

無効や阻害ではなく、魔術が発現する前に、その魔力ごと消却する。そんな大魔術染みた事を、アイツは言葉だけで行使していた。

「俺に風は通じんと言った筈だが、忘れたか？」

遠坂は宝石を、風に属する魔術として放とうとしたらしい。

……風の加護、だろうか。

いや、そうだとしても、今は明らかに異常だ。あれでは、まるで

「大人しくしてろ」

遠坂に漆黒剣が突き出された。が、速度を押さえられた突きだ。アイツも遠坂を殺す気は無いのだろ。あれなら遠坂でも躲す事が出来る。

と言っても、躲す事が許されるのは剣だけだ。

握ったままに剣を消し、そのまま側頭部を襲う拳打は躲せない。

防備で緩和出来ても、その衝撃までは殺し切れない。

遠坂は俺とは反対、階段の方へと殴り飛ばされた。

……あれは、葛木の拳技に似ている。

幾度も徒手戦闘を重ね、築かれた拳技。その上に、あの剣技が築か

れている。

「凜！？ 貴様……正気か、アーチャー！！」

「正気だ。もつとも、最初から狂っているのかも知れんが」

アイツの業には同じ道に通じている者が、別の極みに至っている者でなければ対応出来ない。

……同じ道。

それに通じている者は――

「――なんだ、お前もか？」

「俺しか、オマエを止められないだろ」

この手にはアーチャーと同じ、漆黒の双剣。
中身までは同じと言えなくとも、耐えるくらいなら出来る。

「……小僧が、驕るな」

体ごと回転を加えた、上方からの二連撃。
それに”合わせ”ようと両手を振り上げ、

「――え？」

響き渡る金の音は無く、剣が空を切った。
浮遊感と共に視界が廻り、背中に衝撃が奔る。

「俺の剣を手にしただけで、いい気になってんじゃねえぞ」

……今のは投げられたのか。
強く打ち付けられたせいで息が出来ない。双剣も離してしまった。
壁に背を預けながら、臍に霞む目で前を見る。

アーチャーがセイバーへ近付いていく。次はもう、耐えられないだろう。

剣が、セイバーの胸を突き刺そうと――

「させるかつ――！！」

再度、双剣を投影して肉薄した。
倒せない事は分かっている。けど、セイバーが殺されるのを黙って見てるなんて出来ない。

「――いい加減に」

右手の突きが振り向き様に打ち上げられた。
左手の斬り上げも、叩き落とされた。

最初からアーチャーに剣が通じるとは思っていない。そのまま体当たりしようとして、突っ込む――

――それも、読まれていたらしい。肩で顎を打たれ、弾き飛ばされた。

「無駄だと分かれ、馬鹿が」

……足りない。

創造理念、鑑定

基本骨子、想定

構成材質、複製

アイツを止めるには、コレじゃ足りない。

製作技術、模倣

憑依経験、敷写

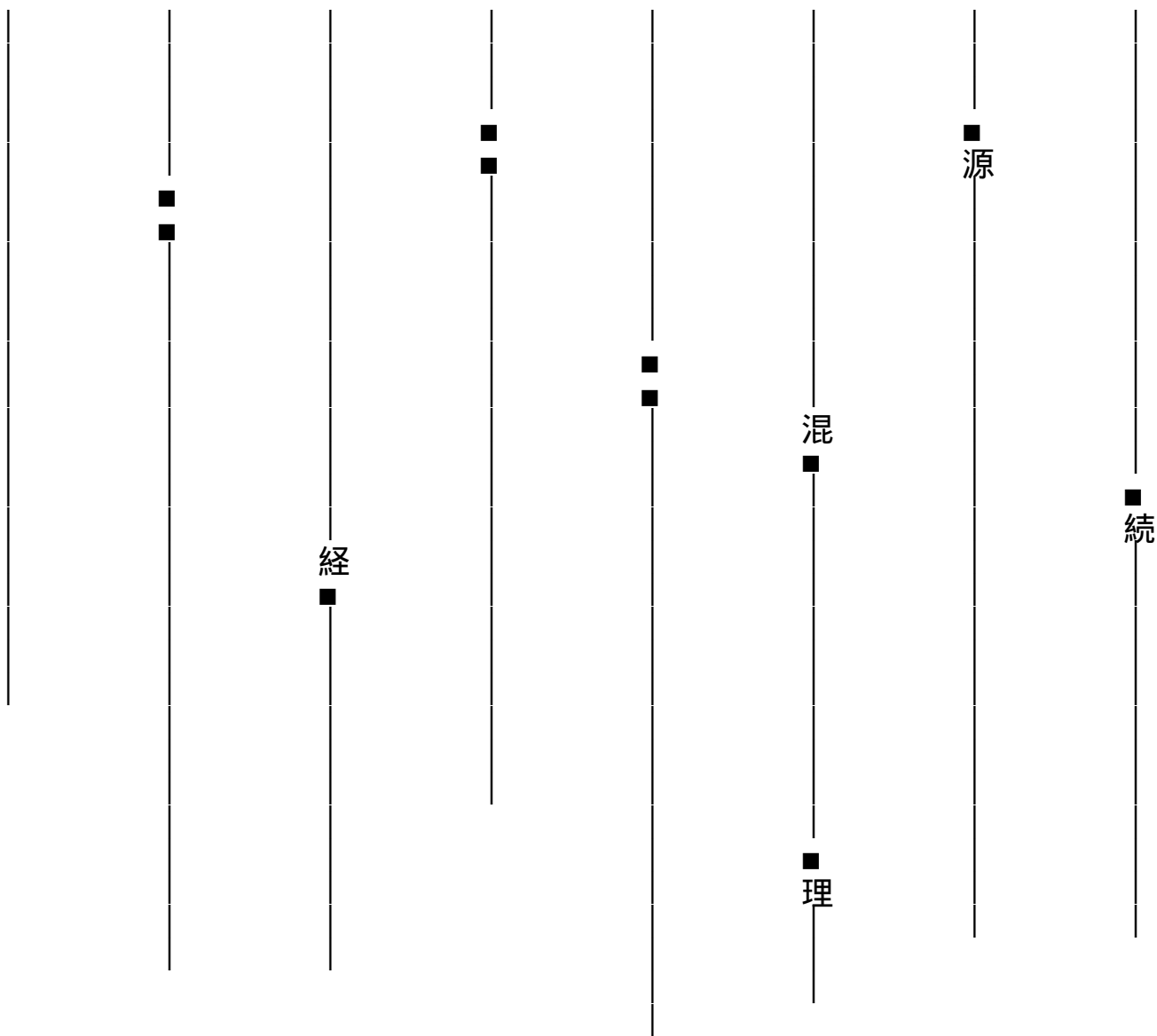
蓄積年月、同調

だったら、オマエごと——

結剣工程、完了

限定権限、行使

「——トレース
投影、開始」



■ ■ は

て消 ■ > > O b s t r a

c t < <

頭が痛い。

息が出来ない。

全身が痛い。

神経が無い。

痛みが無い。

「そは にト る 言 ぞ？」

無い頭が痛い無い痛い痛

ない無い無い無い

い聞じH

だれか言えらとコノ

は二消工し無くれここ力のハ

何もクらしいナい無

こイ無い聴こ工目才れハナい何モ > > A l t e r a t e < <

- - - - -

「――さて、頼りになる騎士サマがくたばった訳だが」

俺が感^かじている隙に、凜はセイバーの横で契約の詠唱をしていた。
契約が結ばれ、マスターを得たセイバーに吹き荒ぶ風が集う。

「そっちの騎士殿は悪足掻きか」

「……ふん。アンタの思い通りになんて、させてあげないんだから」

「アーチャー、貴方が未だ戦いに臨むと言うのなら……何度となろうが倒させて貰います」

令呪が三つに、剣の英霊が相手。

流石にこうなつては、セイバーのみを倒すというのは俺でも至難――

「――はっ、ほざいてろ。どうせ勝つのは俺だ」

漆黒剣を手放し、解放剣を具現した。

「無駄です。それは貴方も分かっている筈だ」

セイバーの聖剣と比べれば、俺の剣はナマクラでしかない。

解答式で護りを貫く事が出来ようと、斬り掛かる前に薙倒されるのがオチだ。

例えば体に”強化”を施そうが、今のセイバーが相手では傷一つ付けられないだろう。

I was the bone of my sword.

「だが、この剣を持つ者に敗北は許されん」

Start is my body and, last is my void.

「特に過去を見続ける、貴様にはな」

I have decoded over a trillion truth.

「……貴方に、私の何が分かる」

「分からんな、分かりたくもない」

Nothing of death. Nothing of life.

「俺が言えるのは一つ、貴様が大間拔けつて事だ」

Have withstood pain to create many weapons.

「自分で拓いた道を閉ざすクソツタレは」

Yet, those hands will never hold anything.

「——悉く、地獄に叩き落としてやる」

So as I pray, unlimited liberation.

遙かな時を経て築き上げた定理を刻み、”世界”^{あしもと}を穿ち貫く。

穿たれた穴を中心に荒れ狂う風が逆巻き、溢れ出た砂が砂塵となっ

て”視界”^{せかい}を埋め尽くしていく。

俺が巡り着く先は何時も——此処だった。

何も無い、ただ不毛でしかない世界。

双月がある筈の空は砂塵で閉ざされて何も見えない。

大地は完全に砂に埋もれ、墓標となった剣が彼方まで立ち並んでいく。

此処は何時も——俺だけしか居なかった。

「これ、は……」

「俺の世界へようこそ。見ての通り剣しか無いが、貴様が最期を迎えるのに相応しいだろう?」

「……固有結界。心象風景を具現化して、現実を侵食する大禁呪」

「御名答。此処は俺にとって、終わりにして始まりの地だ。戦友の墓場でもある」

此処に在る剣は例外無く、全てが戦友の墓標。

俺と共に戦い抜けた末に、死して尚も俺と在る、戦友達の成れの果てだ。

「じゃあ何? アンタには、こんな世界しか無いって言うの?」

「無いな。手に入れたモノは全て消し飛んだ。家族も、友も、仲間も。全てが消え失せた。

数千億の年を刻もうが何も残せず、俺が残せたモノと言えばコレだけしか無い」

世界が破滅を迎える度に俺だけ残り、他に残ったのは戦友の剣だけだった。

砂漠に立つ、剣の墓標……それだけしか、俺には残せなかった。

『故に、この世界は”俺”の歴史と言える』

俺の言葉に、剣を引き抜いた”戦友”が続く。
容姿は違えど、纏う黒衣と剣は俺と同じモノ。その姿は”彼”が死ぬ前と何ら変わっていない。

「……アーチャー、なの?」

『ああ。此処には――』

『――
”俺

”しか居ない』

別の”戦友”が剣を引き抜き、答える。

世界の解放に失敗し、俺が存在する故に、行き場を失った”彼等”は剣以外を失った。

その剣が俺と共に在る事で、”彼等”は英霊として此処に存在している。

死して器を無くそうとも、俺が存在している限り、”彼等”は永遠に此処に存在し続ける。

「この世界は”俺達”が生きてきた証だ」

『長い”俺”は千年

ほど』

『短い”俺”は一月も無い』

『それでも、全員が”俺”だった』

た』

「俺には何の才能も無ければ、魔力すらも無かった」

『無銘の剣を持たされては居たが』

『呼び出す術も、使い熟こなす術も知らなかつた』

つた』

「……鍛え続けて幾許か。

精霊や悪魔と呼ばれる者達と同じ権限を、俺も行使出来る事に
気付いたよ」

「それじゃ、やっぱリアンタは——」

「——そうだな、”俺達”は神霊ゴッド・スピリットと呼ばれる存在だろう」

原初の解放者が担い、そして自身の存在ごとく砕け散った、始まりの
剣。その欠片を”俺達”は持たされている。

欠片は一人一つ。全てが同じ人形レプリカだった。

散らばった数多の欠片が集い続けた末に、”俺達”は何時の間にか、
別の剣と化していた。

現ゆる者を屠り、全てを殺し尽くす。故に、世界の銘しるしは告死騎士団ラスト・レギオン。
此处こゝに誘われた時点で、如何なる者も確実に死へと導かれる——
断罪の場だ。

「セイバー……貴様が望む願いとやらはな、死者の功績を無視す
るに等しい。

死んだという結果が消滅すれば、死した末に築き上げた彼等の
歴史すらも消え失せる。

良い結果を得る為にやり直す、というのはまだ分かる……しか
しな、それすらも投げ出すとはどういう見だ？」

剣を手にした責任を放棄するなど、身勝手も甚だしい。

共に戦った者達を足蹴にし、戦いに命を落とした者達を無駄だった
と否定する行為でしかない。

「私が選定の剣を手にしなければ、あのような結末にはならなかつ
た。

別の者が剣を手にしていれば、もつと別の結果になった筈だ」

「他人任せか、騎士王の名も落ちたものだな。

テメエは自身が経験した地獄を、他人に擦り付けるつもりか？」

「それは違う……！！ 私でなければ、そうはならないと」

「結局は逃げ出してるじゃねえか。

こんなクソツタレが聖剣の担い手とは……笑わせてくれる」

『貴様に剣を持つ資格は無いな』

『下らん願いと共

に、此処で押し折るとしよう』

『別に抗うのは構わんが』

『貴様と同じく、”俺”も剣

霊』

『我等の勝利は揺るがんぞ』

総勢一億——既に、全ての”剣”が現界している。

俺が持ち得る内でも、蹂躪に特化した切り札だ。

例えセイバーに宝具を使われようとも、残った”俺”が必ず……殺す。

「Checkmate——セイバー、大人しく退場願おうか」

「断わる。私は、貴方には屈さない」

……告死の軍勢を前に、孤立無援。

そんな最悪な状況に陥って尚も、セイバーの瞳には不屈の意思が灯っている。

「流石は剣……しかしな、貴様は一つ、失念しているぞ？」

此処に居るのはセイバーだけではない。

生身である、簡単に死へ至ってしまう人間が二人居る。

「戦いの最中、”誰か”が間違えて剣を飛ばすかも知れん」

「……それ、本気で言ってるの？」

「本気も何も、余計に動けば無駄に犠牲が出る。それだけの事だ」

”彼等”が逆手に剣を掲げ、切っ先をセイバーへと向けた。

一億在る内の千本。だが、”俺達”の剣は何だろうが穿ち貫く。セイバーならば避け続ける事も出来るだろうが——

「——動くな。貴様は座して、此処で死ね」

本来の力を取り戻した剣を掲げ、投擲する。

剣の特効が意味を成さずとも、今はセイバーの聖剣に匹敵する。霊体の核を潰すだけなら一撃で十分。

しかしそれは、”俺の剣”によって、撃ち落とされた。

「っ——シロウ……」

目を移せば、漆黒剣を投げたままに俺を睨み付ける士郎が立っていた。

「……まだ邪魔をするか、小僧」

「テメエがセイバーを殺すって言うなら、何度でも邪魔してやる」

「そうか……ならば、邪魔して見せる」

外縁より対象へ、万を遥かに超える剣弾を空へ放つ。

同時着弾となる剣の雨だ。防ぐ事も避ける事も許さない——

「——^{トリガー}投影、^{オフ}装填」

それを、ヤツは投影しようとしていた。

剣を、ではなく、ヤツは”世界”^{せかい}ごと投影しようとしている。此処に綻びは無い。そんな事をすれば——死ぬだけだ。

「^{トレース}投影、^{オン}開始……！！！！！！」

世界が軋みを上げ、世界に罅が奔る。

その罅は直ぐに塗り替えられ、やはり破られはしない。

——地獄の炎が、全てを焼き尽くさない限りは。

煉獄の壁が失せると、世界は元の聖堂に戻っていた。

俺の前には完全なる結界を上書きするという、無茶をしでかした二ンゲンが地に伏している。

無理が祟ったのだろう。そいつの髪は白くなり、肌も黒ずんでいる
——エミヤシロウ。

「……ふざけやがって」

両手に漆黒剣を握り、士郎に歩み寄る。

「——っ！」

背後から斬りかかれ、そのまま蹴り飛ばされた。

セイバーは……土郎の前に、立ち塞がっている。

「主でもないのに、そいつを守ってどうする」

「私はシロウの剣となり、盾となると誓いました。それはまだ破棄されていません」

「セイバー、俺が言っているのはな——主君を蔑ろにして他人を選ぶなっつってんだ」

一足で凧の横に付いて、その意識を刈り取った。
崩れ落ちる華奢な体を支え、首に漆黒剣を当てる。

「くっ……でも、貴方には」

「殺せない、とでも？」

容赦せず、肩を握り潰す。

骨が砕ける音と共に、左手が赤く染まった。

「ここで証明していいのか？」

「……………」

土郎を護る為に、凧を犠牲にするか。それとも、土郎を犠牲にして凧を救うか。

かつては簡単に切り捨てる方を選んだらうに、セイバーは決め倦^{あく}ねている。

「らしくないな、セイバー。何を迷っている」

凜を救おうと動けば、俺は間髪入れずに殺す。
マスターである凜を失えば力を失い、復帰した俺に殺されて士郎も殺される。

例えそうならずとも、俺から二人を護りきる事は出来ないだろう。
どちらにせよ、士郎は俺の手に掛かる。誓いを反故にして凜の生存を選ぶしかない。

「……貴方は、本当に」

「必要ならば殺すさ。俺は何時も、そうやって生きてきた」

家族を殺し、主君を殺し、部下も戦友も殺してきた。

必要であるのなら星をも殺し、全てを殺す……それが”俺達”の宿命。

今更人間の一人や二人、殺す事に躊躇いは無い。

「……だが、牢獄から逃してくれた凜には恩がある。俺も、出来れば殺したくは無い」

「それでも貴方は、凜を手に掛けると言うのか」

「ああ。そのクソツタレと、貴様を殺す為ならな」

「アーチャー……何故、そこまでシロウに拘る。

シロウは貴方の前に、立ち塞がりはした。しかしそれは、貴方にとっては何に等しい筈だ」

「……言っても、貴様には理解出来んだろうよ」

護ると決めた者達が犯され、蹴られ、蹂躪され、殺されるのを何度も目にしてきた。

力を得るために数え切れない程に戦いを繰り返し、数え切れない程の仲間を失ってきた。

その末に手に入れたのが、この剣だ。

それを無視し、十数年しか生きていない若造が俺の剣を手にする。それだけなら俺も殴り飛ばすだけだっただろうが、衛宮士郎は”俺の全て”をもぶち壊した。

……到底、見逃す気になれない。

「それで、結局貴様はどうするのだ。一か八かで抗ってみるか？」

「……せめて、シロウと話す時間を下さい」

「ふざけるな。今此処で決めろ」

「出来ません。シロウを見殺しになんて……私には、出来ない」

セイバーの顔に影が落ち、その手に持った剣が揺らいでいる。

彼女が苦悩に溺れている今ならば、”射出”で士郎を殺す事も出来るが――

「――王で在った者が情に染まったか。昔は勝つ為に、民草を見殺しにしたというのにな」

「……………」

「いいだろう、アイツベルンの城で待つ。そのクソツタレも連れて来い。」

一人で来ようとは思うなよ？ どちらかが欠けていれば、街ごと消し飛ぶ羽目になると思え」

「……分かりました。しかし、凜の傷は」

「これ以上、甚振る事はせん。俺は護るか……殺すかだけだ」

苦悶を浮かべている凜を肩に担ぐ。

セイバーは剣を下げているが警戒を緩ませず、階段を昇って回廊へ出た。

講堂を抜け、教会の扉を開ける。

空は明るく——やはり、沈んでいる。

「……なんで、こうなっちまうんだろうなあ」

この腕に抱えられているのは、裏切って傷付けた元姫君。

騎士で在ろうとしても、結局はそうなる運命に在るらしい。

……見殺しにするよりかは、幾分かマシか。

自身の手で碎いた彼女の傷を修復して、城へ”転移”を紡ぐ。

虚しく泣く心を押し殺しながら、廃墟となった城の中へと入っていた。

解答せし者

(10月15日 修正加筆)

——
体は剣で出来ていた。

終わりに始まり、空虚に失せる。

無限の牢獄に在れど不屈。

安息を得る事は無く、

生きる理由も無い。

我等は常に独り、地獄の最中で破滅を告げる。

故に、生涯の意味も無く――

――この剣は、絶望だけで出来ている。

「……嗅ぎ付けたか」

誰も居ない筈の城で、気配がこちらへ近付いてくる。
気配はサーヴァントのソレだ。壁に預けていた体を起こした。

「——半信半疑だったけど、ほんとに、こんなトコにいたんだ」
部屋に踏み込んできたのは……アレっきり、姿を見せなかった間桐
慎二。

「物騒な真似は無しだぜ、アーチャー。俺は遠坂に用がある」

そう言ってこちらへ近付いてきたが、凜の意識はまだ戻って居ない。
疲れも出たのだろうか……少々、加減を間違えたか。

「見て分らんか、出直して来い」

「はっ何言ってんだ、起こせばいいだろ」

「……出直せ、と言っている」

身の程を弁えない不屈者を前に、漆黒の双剣を手にした。
それを見て顔を引き攣らせはしたが、慎二は引き下がらなかった。

「なに、やる気？ そっちがその気なら、こっちも黙って無いぜ」

入り口にサーヴァント……アレは英雄王か。

凜なら金の匂いかねと言っただろうが、俺でも分かり易い程に金色の気配
を纏っていた。

「はは、ブルってんだろ、アーチャー。」

バーサーカーだって難なく殺したサーヴァントだからな。お前
が怖気——」

「英霊風情が、俺を殺せるものか」

「……は？ こっちは最強のサーヴァントだぜ。強がるのも——」

「確かに、我^{オレ}でも”殺す”事は出来んな」

こちらへと歩きながら、そう俺の言葉を肯定した。

「人の身で、神と同等になるまで昇華したか」

その瞳は、俺ではない何かを見ている。

「流石と言おう、英雄王。一目で私を見抜くとはな」

「我^{オレ}の目は欺けん」

「それで、どうする？ 貴様の親友だろうと私は律せんぞ」

神をも縛る鎖ですら一瞬の足止めにしかならず、不死殺しをも無効にする。

出来る事と言えば、彼方へと吹き飛ばすのみ——それでも、瞬く間に復帰できる。

「……………」

英雄王は敢えて、それを口にしない。

「そういう事だ、小僧。残念だったな」

折角手に入れたと思つた強大な力が、敵わない相手。

自ら足枷を付けさえしなければ、”世界”だろうと束縛出来ない存在だ。

そんな俺を舐めて掛かった慎二が、不条理さに怒りで震えている。

「――客が来た」

二人の間を通って扉へ向かう。

「……傷付いたら殺す」

殺気を撒き散らしながらも双剣を消し、部屋を後にした。

夜が明ける。

光が差し込み始めたエントランスには、三人の人影があった。

「腐れ縁だな、ランサー」

「残念だが、今回は捕らわれの姫を助けに行く騎士サマの役でね。テメエとは戦らねえよ」

「だったら、さっさと行った方がいいぞ？ 先程、ライダーのマスターが来た。」

……傷付けるなどは言ったが、舐り倒されかねんな」

その言葉に何も返さず、ランサーが俺の横を抜けて駆けて行った。

「——何で、ランサーを見逃したんだ？」

「彼女をキズモノにしてやりたくないだけだ。それに……始末されるのは貴様らが先約だろう」

エントランスの階段を足を掛ける。

「それで、二人一緒に相手しようか？ 騎士らしく一騎討ちでも構わんぞ」

「その前に一つだけ、聞きたい事があります」

足を止めて、言葉を待った。

「……貴方は、どうして戦うのですか？」

「知れた事を……ただ、終わらせるだけだ。それ以外に理由は無い」

どうせ、この手には何も残らない。

「アーチャー、貴方はそれを望んでいるのですか？」

「望みなど遠に捨てた」

「ですが——」

「俺はな、もう疲れてんだ」

エントランスの階段を降りながら、

「閉ざされた世界で永遠に戦って、やっと終わったと思ったら何も無い牢獄にぶち込まれた。

彼女に呼ばれたと思ったら、今度はこんな下らん戦いに放り込まれた」

両の手にある漆黒剣を握り締めて、ソレを言う。

「最初は楽しかったよ。彼女は良いニンゲンだからな。

聖杯なんてふざけたモノさえ無ければ、真つ当な人生を送っていたかも知れん。

……ああ、聖杯にそれを願うのも良いか」

階段を降り切って、エントランスの床を踏み締めた。

「聖杯に望むものが聖杯の消滅とは滑稽な話だが、聖杯なんざ無くとも人はやり直せる。

もつとも、過去に拘る貴様は認めんだろうが……俺が居る限り、その幻想ごと何度でも叩き潰してやる」

「……………」

まだ、答えを出せずにいるのだろうか。セイバーの顔には迷いが見える。

彼女の心中は分からないし、どういつ答えを出すかも分からない。

だが、これが俺の答えだ。飽くまで認めぬと言つのなら……悉く否定してやるだけだ。

「言い分は分かった、アーチャー」

士郎の手に――漆黒の双剣が握られた。

「……勝手に人のモノ、使ってんじゃねえ」

エントランスを俺の殺気が満たしていく。

「俺は魔術使いだからな、使えるモノは何でも使う」

「クソツタレが、一人前の言葉を吐きやがる」

「ああ……アンタをぶっ倒して、一人で立つ事にするよ」

未熟者が、俺と一騎討ちか。

「シロウ――」

「セイバー、手を出さないでくれ」

……面白い。

「一回だ。一回でも俺を殺せば、くれてやる」

「要らない。勝ったら、俺は俺の力だけで立つ」

「俺に頼るのは今回きりってか……行くぞ」

一足で距離を詰める。

交差するのは同じ剣。それを持つのは、同じ剣技を持つ担い手。

突きが払われ、打ち降ろせば流され、斬りつければ”合わせ”られる。

”合わせ”られれば、お互いに無防備になる剣技……それを、”合わせ”に”合わされず”斬りかかった。

——変幻自在。それが俺の本質。

無防備になった筈の半身を、もう片方の剣で強引に防がれた。それを、双剣で挟みこむように砕く。

「……やはり、無理か」

漆黒剣は”此处に在りながら、此处に無い”という矛盾した存在。宝具としてのランクは低くとも、その概念の頑丈さだけは飛び抜けているモノ。

そんな捻くれたモノ、鍛えきれなくて当然だろう。

人間の視点である限り、そこそこ頑丈な駄剣として創る事しか出来ない。

「まったく、創るならマシな物を選んだらどうだ」

剣戟の押収に戻る。

似て異なる剣と、同じ剣技を持つ二人の使い手。

だが、片や不死に対して傷を負っていく体だ。

剣が碎かれ、弾き飛ばされ、また創り出す。その繰り返しをするだけで、倒れ伏すのは明確だろう。

本来の剣技に体が追いついていない。

漆黒剣を使っている限り、衛宮士郎に勝利は——無い。

「……勘違いも甚だしいな」

体ごと大回転を加えて、垂直に二刀を連続で叩き込んだ。

「つ——ぐ——！」

それを受けた士郎の双剣は碎け散り、無防備となった腹を蹴り抜く。

「どうした、さっきのは負け犬の遠吠えか？」

数十合の剣戟を越えて、士郎の体は満身創痍だった。
いくら業を手に入れしとも、器が耐え切れなければ意味が無い。

「ならば負け犬らしく……クタバリヤガレ」

心臓を穿たんとして、渾身の力で突き抜いた。

I a m t h e b o n e o f m y s w o r d .

——それが、俺の剣に砕かれた。

砕かれたのは、俺の剣。砕いたのは、”俺”の剣。士郎の手には、
”俺達”の剣が在った。

……そうだ。

同じモノで敵わないなら——”強いモノ”を創ればいい。

「はっ、やっと気付いたか」

剣霊の”俺”を模倣した剣が、俺を襲う。

剣霊の力をも投影したソレが、俺に喰らい付く。

「まったく、ホント……人間じゃねえなよな……!!」

ただの人間と名乗った自分の剣に、自分が蹂躪されている。
ただの人間でしかない相手に——俺が蹂躪されている。

「——調子に、乗るな」

渾身の力で”合わせ”、そのまま流れるように肩を打ち付け、弾き飛ばす。

「Intensification」

一瞬で剣戟に戻る。

相手は英霊としての自分。”強化”で何とか互角に持ち込める相手。解放剣が二刀在れば、瞬殺されていただろう。

突けば弾かれ、打ち降ろしを避けて斬り——返し刃で俺の腕が飛んだ。

「——っ！？　クソがつ……！！」

相手の体はボロキレの様に傷だらけだ。

指は折れ、手足も所々無く、内臓もロクに機能していない。

現に呼吸も無く、俺を見ることがすらしていない。

とても立てるような体じゃないのに——俺の腕を斬り飛ばしている。

——敵う、訳が無い。

対峙しているのは、正しく”俺”そのものだ。

人間という制限がある俺では、”強化”しても互角に至っていない。

——— ったく、これだからコイツは、

ギリギリの攻防を繰り返す。

その小さな綻びを、コイツは強引に奪い去っていく。

——— オモシロイ。

…… 何度、腕ごと持っていかれた事か。

気付けば、俺の心臓に、剣が突き刺さっていた。

「——— 俺の勝ちだ、アーチャー」

「…… ああ。俺の…… 負けだな」

まさか”自分”に殺されるなんて、バカげた事になるとは。

……いや、相手を”自分”と想定して対峙した時点で、誤っていたのだろう。

何千億と年月を重ね、何兆回と剣戟を交わし、幾度も自身より強き者に相見えようと、自身と同等の経験を持つ者など存在し得なかった。

——想定外。

自身と同じ経験、技能を手にし、自身よりも力強き者。そんなバケモノを相手に情けを掛け、剣戟のみで対峙するとは慢心も良いところだ。

——阿呆か、俺は。

これでは、負けるのが当然だった。

実力を上回る相手を捻じ伏せ続け、常戦不敗となって驕りが有ったのかもしれない。

それを、たった十数年しか生きていない未熟者に教えられたのだ。

——未熟者に教えを受ける戦神、か。

かつての二つ名を皮肉に思いながら、俺の顔は不意に笑っていた。

「それで、一体どういう状況よ？　アーチャーは血を吐きながら笑ってるし、士郎はボロボロだし」

死闘で興奮したせいか、胸に刺さる痛みをすっかり忘れていた。

このまま剣が刺さった状態で笑っているのも、絵的にアレだろう。

……第一、後から後から血が込み上げてきて笑い難い。

剣の刃で手が切れるのも構わず、胸から引き抜いた。

士郎は流石に力尽きたのか、俺の前で膝を付いている。

そんな士郎を介抱しようとセイバーが横に居るが、彼女も何と言え
ばいいのか困っている様だ。

「……愛する姫君を巡って決闘していた、という感じだな。喜べ
凜、勝者は士郎だ」

そう茶化した俺に対し一寸遅れて、彼女は鉄拳をもって応えた。

真っ赤になって喚く姫君と、まんざらでもない……勝利を手にした
騎士。

そんな二人をみて微笑んでいるセイバーがむしろ、微笑ましかった。

「さて、嫁いでいく我が姫君と騎士に……手向けといくか」

迫り来る宝具の雨を凝視する。

防護解答展開走査、猶予不足

来るとは思っていたが、些か勝手が違っている。

守護対象生存走査、確率不足

……また、護りたかったモノを失ってしまう。

漆黒剣迎撃走査、打破不能

———
ならば、我が身を盾とせん
———

” > i 1 2 7 2 9 — 1 7 8 9 <
”

剣の真名を詠う。

全ての礎となり、今も全てに宿っている、虚空を統べる神の名を詠う。

絶対なる盾を左手に。

光をも無に還す、この八方大輪は宝具だろうと消し去るのみ。

何物たりとも、この盾は通す事を許さない———

「っ——アーチャー!？」

……だが、これは禁じ手だ。

この盾は虚空ソノモノ。消し去るのは俺とて例外ではない。
媒体とした左手は既に――飲み込まれている。

「っ……とつとと失せる！！間に合わんぞ！？」

消え去りそうな意識を奮い立たせる。

少しでも途切れさせれば、次は何も無い牢獄で目を覚ますだろう。

「――damn it」

かつて、その牢獄を自力で抜け出した者が居た。

全てを開き、全てを分つ者。この世界を切り拓いた神の伝説。

「天地乖離す――」
エヌマ

虚空の盾を以ってしても、英雄王の――あの剣だけは、防げない。

「――開墾の星」
エリシユ

風の精霊をも斬り殺す、空間の断層が迫り来る。

万能なる絶対の盾は呆気無く、究極の剣の前に打ち砕かれた。

身体中を切り刻まれる痛みと共に、意識が途切れる。

——一瞬か、数秒か。

木漏れ日が瞳に映る。

辺りには木々が静かに佇んでいた。

遠くに見える城には……火の手が上がっている。

二人との”接続”は斬られたが、”奴”の事だ。多分、無事だろう。

「……いい加減、終わりといこうか」

樹海の中を一人、戦神が歩いていく。

幾度も世界を巡り、終焉を見続けた男が歩いていく。

ここにはもう、弓兵の代行者は居ない……否。

最初から”此处”には、その様な者は存在していない。

”この世界”が求めたのは反逆の理を持つ者。

漆黒の外套を身に纏う、たった一羽きりの鴉が此处へ呼ばれたのだから。

最期の舞踏

(8月16日 修正)

「——よう、似非神父。やっぱりここに居やがったな」

柳洞寺地下。

其処に在る大聖杯を破壊しようとする鴉の前に、一人の男が立ち塞がっていた。

「……ふむ。私としては意表について、君を驚かせるつもりだったのだが」

「悪いが、想定内だね。しかし問答の時間も無い……本気で行かせてもらっぞ」

鴉が徒手のまま、歩きだす。

「——信義。無欠にして万敵」

目の前で腕を交差し、跳ぶように地面を蹴り、体が縦に回転し始める。

何も無かった両の手には漆黒剣——四方剣を二重に重ねた様な剣を、連続で投擲した。

毎秒100回転に届く八連の刃に触れれば、概念の守りがない者は瞬く間に細切れにされるだろう。

だが、それは触れればの話だ。常人の目にも映る程度の速度で直線

軌道ならば、避ける事は難しくもない。

「力、山を抜き」

避けられた二つの八方剣が解かれ、中空で”影”へと変化して四方剣を投げ返した。

「剣、水を別つ」

死角より放たれた二つの四方剣が再び襲い掛かる。

「盛名、離宮に届き——」

二つの影達と共に漆黒剣を持ち、黒き風となって駆け出した。その瞳に捉える物は……四方剣を無理に避け、無防備となった獲物のみ。

「——我等、共に天を懷かず」

六つの牙が喰らい付き、獲物の肉を断つて骨を噛み砕いていく。獲物を食い殺した影は鴉を一人残し、そのまま闇へと還っていった。

「——よもや、為す術すらも無いとは」

力尽き、消えかけている命の灯火を使つて言葉を紡いでいた。仰向けに倒れたまま、綺礼は血を吐いている。

「戦神や闘神、鬼神なんて呼ばれた事もあったな。
そんな奴を前にして、相手になる方が可笑しいだろう?」

例え鴉が天使そのものだとしても、その体は人間でしかない。
綺礼も倒せなくは無いと思ったのだろう。

だが、人間で在っても悠久を戦い抜けた経験を持つ戦士が相手だ。
英霊とも渡り合える實力は、半端なものではない。

「人の身で敵なう、相手ではない……か……」

灯火を使い切り、綺礼は静かに息を引き取った。
哀しき宿命を背負わされた一つの魂が、天へと昇っていく。

「……主よ、貴方が私に与えられし御力を以て、速やかに命を
行せん」

膝を付き、鴉が死者の額に左手を添えた。

「川は主の下へ流れ、魂は一つにならん」

其処には一人の死者と、ただ涙を流す天の使いだけが居た。

「父と子と、精霊の御名において——」

天の使いは黄泉の河を渡る、実の子と別れるかの様に目を瞑る。
目を開けて立ち上がった鴉は、別れを惜しみながらも歩きだした。

現界しつつある、自身の子と同義である者を救う為に——

黒き太陽が昇っている。

望みを叶えるという聖杯の大元。

冬木の地に聖杯を現界させる為に築き上げられた大聖杯が、其処に眠っていた。

英霊であるサーヴァントを糧として起こされるそれが、目覚めつつある。

どうやら、帰順を確認していないアサシンは既に倒されていたらしい。

ランサーもアインツベルンの城で消息を断っているから、帰順したサーヴァントは五柱。

聖杯本来の効果を得る為には、七柱のサーヴァントが必須。だが、それも本来ならばの話だ。

聖杯は、“この世全ての悪”という存在に汚染されていた。起動されてしまえば聖杯を依り代として、それが現界する。現界した時は……この世界の終わりに等しい事態となる。

”この世全ての悪”とは、神々より追放された神——すなわち、世界の上位存在だ。

世界を管理している”神”すらも、彼の存在には敵わない。そして……起動だけなら既に、可能。

「——つたく、やっぱりオマエが元凶だったか……クソガキめ」

鴉は瞳に映る太陽を一度だけ、見た事があった。

……いや、気付かなかっただけで”何度も”見ている。

閉ざされた世界を滅ぼし続ける、無限の災禍。

それは、解放者を鴉にせしめた全ての元凶だった。

「——初めまして、ケイオスさん？」

災禍を前にして、鴉と同じく黒を基調とした衣服に身を包む、一人の少女が居た。

「ああ、君とは初対面だったな。それで……何故ここに居る？」

「そんなの、決まっているじゃないですか。この子が生まれるのを、待っているんです」

慈しみを浮かべる少女の微笑みは、天使や慈母のもつそれと変わりが無い。

「君はアレが何なのか知っていても、生むと言っただけだな」

「……この世界は私を助けてくれませんでしたから。」

そんな世界、消えて無くなっちゃっても良いでしょう？」

—— 汝は、何を望む。

「……え？」

——汝は、何を願う。

「な、何？貴方は何を言っているの？」

——汝は、何を求む。

「——っ！？ 来ないで……来ないで下さい……！」

悪の権化が虚ろな巨人となって、姿を現していく。
それに目もくれず、長剣を片手に鴉が歩き出した。

「——L i b e r a t i o n」

その一言で、巨人は無へと還る事を知っているから……。

「……嘘。そんな筈は——！」

再び巨人の影が世界に落とされるが、それもやはり、一言で無へと還っていく。

「こんな……サーヴァントがこんな事——」

「——君は私をケイオスと呼んだが、俺には消された名がある」

長剣を手に、鴉が少女に対峙した。

「全てを絶ち斬り、全てを無に還す者……リベルだ」

——汝は、救いを求むか。

「……私を殺すんですか？」

「いや、君の一言……願いを聞くだけだ」

世界が救わずとも、世界には何時だつて救いの手を差し伸べる者がいた。

だが少女は助けを求めず、悲観に暮れて、その者達の手から零れ落ちてしまっていた。

——ならば我は、汝に救いを与えん。

「……助けて」

少女の顔を、涙が伝う。

「助けて……ください……」

少女は初めて、助けを求めた。

「……原初の法を此処に。我が剣は汝の咎を解放せん」

神の命令を執行する。

断罪の執行者は少女の胸に、剣を突き立てた。

「Answerer」

元より、その剣は世界に存在しない虚ろな刃。

その刃は何も傷付けない、ただ束縛だけを解く方程式で出来ていた。

「Liberion」

その方程式の名は、彼の神名である”反逆者”が反転した存在。
解放者”である彼の起源。

故に——世界をも戒める束縛さえ、破綻させる。

「……少し寝てろ。後は任せな」

束縛していた契約を破戒し、倒れ伏す少女を後にして鴉は大聖杯へと足を向ける。

……しかし、ソレは既に目を覚まして、現界しつつあった。

- - - - -

「さて、仕舞いという」

”世界”が総力を以て、ソレの現界を防いでいる。

ソレの現界は世界の閉鎖を意味し、現界されれば”世界”は手を出せなくなる。

世界側の抑止は禁則により、事後でなくては投入不可能。

”俺”が存在しているせいで閉ざされても、”世界”は解放者の投入すら出来ない。

つまり、俺が手を出さなければ……”世界”は死ぬ。

「……世界を救うつてのは趣味じゃねーが、まあ楽しかったしな。恩返し位はやってやるよ」

——嘘も付いちまったし、な。

「I was the bone of my sword」.

この身は神に残された、たった一振りしかない剣。

「Cursed my body, voided my heart」.

寿命を迎え、必ず死に至る筈の定めは、在り得ぬ”呪い”で否定された。

「Therefore, hands will never hold anything」.

故に、俺は世界の終わりを見続ける定めだ。
例え何も無かるうが、俺はただ先へと進めさせられる。

「Nothing of remove, and nothing of death」.

俺が一人だったら、無へと還れたかもしれない。
しかし、既に”俺達”が解放される事は存在し得ないだろう。

「Yet, withstood pain to decoding my truth.
It keeps making for the eternal」.

だから俺は、ただ願っている。

「So as I pray, — unlimited rebellion」.

闇の中に光が在る事だけを、ただ願っていた。

- - - - -

「―――出番かと思えば、何ともまあ」

其処には鴉の姿は無く、一人の白い女が立っていた。

鴉とは対象的に、装いは白一色のカソック。長い髪も白く、その瞳までも白。

一点の曇りも無い―――光のような女が立っていた。

「……んー、そっか。そうだね、やっぱりキミも生まれていよね」

光は愛しむように言葉を紡ぐ。虚空に浮かぶ魂を、その胸に擁いた。……まるで、そこに居る我が子を抱き締めるかのように。

「矢能、向こうの消しという。後はなんとかする」

闇より姿を現した一羽の黒い鳥が、光の肩留まって一鳴きをした。その翼に風を乗せて、光から飛び立っていく。

「んー、それはちょっと……私だけじゃ難しい、かな？」

虚空を胸に擁きながら光は右の手に、光を灯した。前に在る空中を指でなぞり、弾き飛ばし、掌握する。

「――開け天の杯よ。

アマテラス

我が名は太照天。偉大なる全てを造りし神の御子。

原初の法に従いて、汝は我が手に万象の権限を委譲せよ」

-
-
-
-
-
-
-
-
-

現界確認。

状態良好。

殲滅対象、目視。

生体反応、探知。

守護対象、設定。

展開連続剣製執行、鋼嵐操作。

「とつとと走れ。当たっても知らんぞ」

目標捕捉、敷写開始――

――守護対象、離脱完了。

敷写停止。

指定、対滅解答。

……目標殲滅、完了。

殲滅対象、目視。

指定、反転解答。

「寝てんじゃねえよ、ヘッポコ」

指定、対滅解答。

「そら、千倍返した。くたばりやがれ」

目標殲滅、完了。

……権限失効。

状態不良——現界不可。

- - - - -

「……やっぱり、日の出は良いな」

一時的に霊体として現界した為に、維持しきれない体が朧になって

いく。

霊体の身で、不滅の刻印も無くば、消え去るのが道理だ。だが、鴉の器を使っている天照——天野陽子の命が尽きれば、鴉と成って再帰する。

鴉にとっては、ほんの一時でしかない安息。

眠る事のなかった鴉は、彼女の命が尽きるまで眠り続ける事になる。しかし、鴉が存在する限り彼女もまた、”死ぬ”事を許されていない。

鴉と太陽は無限に巡る輪の中で……ただ、生き続けていくしかないかった。

「——っ……アーチャー」

鴉のもとへ、息を切らせながら赤い少女が駆け寄った。

「——済まん。最初から……聖杯は破壊する腹だった」

「……いい。私もあんなのだって知ってれば、壊してたから」

そんな彼女の在り方を好んでいた鴉は、そうだな、と言って微笑んだ。

彼女の背後へ視線を向けると、そこには無理をし過ぎて倒れた、白髪少年を担いで来る騎士の姿があった。

「——！？アーチャー、その体は……？」

未だ影ははつきりと映されているが、同じ存在である騎士は失われつつある鴉の体に気付いた。

「ちよいと事情があつてな。霊体で刻印が無いから、直に消える」

「……不滅だつて言つたじゃない」

「俺だつて刻印がなけりや死ぬぞ？　まあ、俺は死なないけどな」
そんな矛盾した事を口にしながら、鴉が笑つた。

「今生の別れになるだろうが、俺は渡り鳥だ。留まる訳にはいかん」

直に消えていく手で、鴉は赤い少女の目元を拭う。

「何、置き土産もある。だから……泣くな」

「……私が泣いてるように、見える？」

少女の顔は別れを惜しむ涙を伝えながらも、微笑んでいた。

「お前はそうやって笑つてろ」

鴉が少女の頭を乱暴に撫でて、髪を掻き乱す。
泣き止むのを見た鴉は、蒼の衣を見に纏う騎士に目を向けた。

「セイバー、一つ頼みがある」

「……なんでしょうか」

「そのヘッポコから目を離すな。二人で支えてやれ」

「言われる迄もなく、と言いたいのですが……」

「ああ、貴様の現界は俺の置き土産がなんとかするだろうよ。
見て驚くぞ？　なんせ、本物のカミサマだからな」

きよとんとする二人を見て、鴉が笑った。

「さて、そろそろ辛くなってきた。ここらで俺は休む事にするよ」

鴉の外套が、姿を黒き翼に変えていく。

背中に生えるそれは、天使の翼のようにも見えた。

「……さらばだ。三人の子供達と会える事を祈ろう」

鴉の言葉の意味を理解した二人の顔に、赤みが差す。

「汝らに幸運を」

翼に集った風の精霊達が、祝福するかの様に歌を紡いだ。

「アンタも、元気にね」

「さようなら、ヤータ」

鴉の翼が力強く羽ばたき、その身を一羽の黒い鳥に変えていく。
数枚の羽を風に残しながら、鴉は太陽の下へと還っていった。

戦いの後に

街は平穏そのものだ。

去年の戦いが夢であつたかのように、大した事件も無い。

あれから遠坂は聖杯戦争の報告とやらで、留学の下見と称してセイバーと共に魔術協会のあるロンドンへ行っている。

俺も遠坂の弟子として、卒業後にロンドンへ留学する予定だ。

英語は苦手だが、なんとかするしかないだろう。

聖杯の核として埋め込まれた慎二は、順調に回復している。

相変わらず人を見下す様な言動だったが、まるで憑き物が落ちたかのように、妹の桜に優しくなっていた。

慎二に何が有ったかは分からないが、桜に手を上げなくなったのは嬉しく思う。

……で、だ。

「しろー、ごはんまだー？」

「まだー？」

「お腹へったー」

「少しは手伝ったらどうですか」

衛宮家は、やたら賑やかになっていた。

まあ飢えた虎が居るのは前からだし、それは置いておこう。
だが、あいつの置き土産は流石に予想外だった――

「こんにちわ。君が士郎ね？今日からこっちに住まわせて貰うわ」

矢能さんが消えた後、セイバーと遠坂の二人と家へ戻った俺はイリヤに似た……言うなれば、赤い瞳以外は真っ白い女性を出迎えた。

「……イリヤの、親戚の方ですか？」

「んー、ちょっと違うかな。だって、本人だし」

「……はい？」

「だから、私の体はイリヤちゃんと同じ物なのよ。中身は違っけどさ」

……意味が分からない。

「失礼ですが、お名前は？」

「天野陽子。鴉の知り合いって言えば分かるでしょ？」

矢能さんの知り合いか。

俺は何も聞いていないが、二人が置き土産がどうたらと言っていたな。

「それで、何の御用で——」

「——それ、もう言った」

陽子と名乗った白い人が不機嫌そうな顔で、俺の言葉を切って家へ上がろうとした。

「ちよっ、待って、一体どういう事ですか!？」

いきなり住むと言われて、はいそうですか、なんて言える訳が無い。振り返った彼女が俺を見つめた後、んー、と人差し指を口に当てて少し考える。

「お姉ちゃんを養うのは、弟として当然じゃない？」

………なんですさ。

「つて事でお邪魔しまーす」

俺の制止を振り切つて陽子さんがズンズンと進んでいく——つて、待て。

俺の力でビクともしないってどういう事だ!?

「たのもー!」

そんな掛け声と一緒に居間の障子をビシャンと……壊れるから止めて欲しい。

居間に居た二人が、突然の乱入者に目を点にしている。

「……イリヤ?」

既に居ない少女の名を、やはり遠坂も口にした。

「面倒だからぶっちゃけちゃうけど、イリヤちゃんの体を借りてるカミサマ、かな?」

鴉が我儘言つてさー、私が幸せにしてやれつてこうなったのよ。あ、私の名前は天野陽子だから。二人ともよろしくねー」

一気にまくし立てた陽子さんが、二人に向かってふらふらと手を振っている。

「それじゃアイツの言つてた置き土産って、貴女?」

「そーね。戸籍無いし、やる事も有るから此処に住むわ」

……俺はまだ、住んでいいと言っていないが。

「それはいいけど……」

俺、この家の家主なんだけどなあ……。

「やる事って？」

んー、と陽子さんが人差し指を口に付ける。……癖なんだろうか。

「子育て？」

「……は？」

「あー、その前に種付けしないと産めないか。という訳で士郎、今夜お願い」

……はい？

「あら、イリヤちゃんの体じゃ不満？」

せつかく子供を産めるように成長させたのに、可哀想じゃない」

腰に両手を当てて、ぶんすかと怒っている姿が可愛い……じゃなかった。

「どうして俺が？」

「私は別に誰でもいいんだけどさ、イリヤちゃんが”どうせならお兄ちゃんがいい！”だって」

イリヤの声色そっくりに、陽子さんが代弁した。

こーの果報者め、と言いながら抱き付いてきたが……その、困る。

「いくらカミサマでも、はいそうですかって訳にはいかないわよ？」

「凜の言う通りです。例えこの剣が折れようと、シロウは譲れません」

居間に風が吹く。

セイバーの手には不可視の剣、遠坂の手には宝石が握られた……つて、此処でヤル気か！？

「えー、いいじゃない。減るモノも無いし」

「減る。少なくとも居間のモノが減る」

このままでは居間が惨状せんじょうになってしまう。

それだけは回避しようと、抱きついていてる陽子さんを引き離す。

……何故か今度は俺の力でも動かせた。

二人は臨戦態勢を解かないが、それを見て陽子さんが首を傾げる。

「ところで、なんでそんなに怒ってるの？」

相手は自称神様。矢能さんの関係者ならば、その力は自称に値するかもしれない。

さっきの事もあるし、行動を阻止するとなれば生半可な覚悟では太刀打ち出来ないだろう。

……だからといって、居間で剣を抜くのは止めて欲しい。窓に罅入ったぞ。

「貴女がシロウを手籠めにする、と言ったからでしょう?」

「……おお」

ぼん、と陽子さんが手の平を叩いた。

「別に、物理的に交わる訳じゃないわよ?」

「物理的って……じゃあ、どうするって言うのよ」

さっきの言い方だと、そうとしか取れなかったが。

「士郎の魂を敷き写してイリヤちゃんの体と混合。それに私が持ってきた魂を上書き。」

私の場合、ヒトの体を持ったとしても普通のやり方じゃ産めないから」

やれやれ、と腕を組んだ陽子さんが溜息を付く。

「それならそうと、初めに説明してくればいいのに」

遠坂も頭を抱えて溜息を付いた。

しかし、今の説明ではいまいちピンと来ない。

「えっと、つまり……どういうことだ?」

「そうね……士郎とイリヤを元にヒトを作る。って、これじゃそのままか」

「面倒だし、子作りでいいんじゃない？」

「その言い方では誤解を招きます」

何時の間にか剣を仕舞ったセイバーが陽子さんを諫めた。

「んー、それじゃ交神の儀ってのはどう？ 神の子を創造する儀式って感じで」

「それ、言い方変えただけなんじゃないか？」

「じゃあ子作り」

「交神の儀でお願いします」

あんまり子作りと連呼されては困る。

しかし神の子を創る儀式、か。どうやって創るんだろうか。

「それで、俺はどうすれば？」

「何もなくていいわよ。ウブなネンネでも寝てる内に済ませられるから」

……なんか、陽子さんの性格が分かってきた気がする。

「士郎に手を出したらタダじゃおかないわよ？」

「だいじょーぶだいじょーぶ。……魔が差さなければね」

「ヨーコ、いい加減にして下さい」

多分、これが彼女なりの冗談なんだろう。

本心から言ってそうで分かり難いが——いや、本音も混ぜて冗談にしているのか。

冗談なのに本音とは、なかなか捻くれている。

「それじゃ士郎、今夜は念入りに体洗つといてよ？イリヤちゃん初めてなんだから」

「だから、そういう言い方はやめてくれ……」

うなだれる俺を見て笑う陽子さんの顔に、何故かあくまの微笑みを幻視した。

翌朝、起きて居間に行くと小学生くらいの子が二人、湯飲みを手にして朝のニュースを見ていた。

「……なんでさ」

黒髪で黒い瞳、黒のワンピースを着た子と、白髪で銀色な瞳、白のワンピースを着た子。

……二人とも、イリヤそっくりだ。

二人の容姿から考えるに、陽子さんの神業しわざだろう。たった一晩で、文字通りに子供を作ったのか。

「あ、シローおはよー！」

「ぐはっ!？」

黒いイリヤ？が俺を目がけて飛び込んできた。意表を付かれて少したたらを踏んだが、倒れる程やわな鍛え方はしていない。

「おはようございます」

「……おはよう」

白いイリヤ？が湯飲みを手にしたまま、挨拶をしてきた。黒イリヤと違って、大人しそうだ。

「えっと、君たちは？」

「私は天野綺麗と言います。貴方に抱き付いているのは安里ですね。」

私達は陽子様に生み出された姉妹です」

「ああ、やっぱり。……君がお姉さん？」

「いえ、先約とかで安里が姉になります。私はついでの様なものでしたから」

それ自体に不満は無いと、彼女は湯飲みに口を付けた。
……その姉は、俺の首に手を回してぶら下がっている。

「……えっと、安里ちゃん？放してくれないかな」

「^{かいほー}解放してほしくば、^{よーきゅー}跪く事を要求する！」

まあ足も届かない高さだし、放してくれるなら言う通りにするか。

「——っ!？」

その足が着くと同時に安里の姿が消えた。
直後、左頬に柔らかいものが触れる。

「おはよつのキスー」

そう言いながら俺の首に頭を擦り付けてきた。

「安里、少しは落ち着いたらどうですか」

「えー、おとーさんにはこうするんじゃないの？」

「だから、さっきも言ったでしょう。私達は使命を持って生み出された神の子。」

相手が父親と云えど、そういう振舞いは不適切です」

「そんなの今はいーじゃん。せっかく生まれたんだし、楽しもうよ?。」

安里が綺麗な腕を引っ張っているが、どこ吹く風と言わんばかりに彼女は湯飲みにも口を付ける。

「そういえば、陽子さんは？」

俺が気を失うまでは一緒だったが、目が覚めるともぬけの殻だった。

「あー、なんか伊勢神宮に行くなって言ってたよ？ 戸籍作ってる、だつてさ」

「どうやって？」

「陽子様は日本国の最高位、太陽神で在られますから。政府に圧力を掛ければどうとでもなります」

「……マジで？」

「マジマジ。言うこと聞かなかったら地震とか噴火起こさせて脅すんじゃない？」

……この国、大丈夫なんだろうか。

「まあ逆らう事さえしなければ、見返りとして自然災害は最小限になるでしょう。」

陽子様の御力ならば造作もない事ですから」

矢能さんも凄かったけど、陽子さんは更に凄いな。

「おはようございます、シロウ」

「ああ、セイバーおはよう」

状況以外は普段と変わらず、いつも通りに挨拶を交す。

「そちらの二人はヨーク、の子ですか？」

話の最中に安里が飛び付いたが、セイバーはまったく動じずに受けとめた。

「そっちの黒いのが姉の安里、こっちの白いのが妹の綺麗だ」

きゃいきゃいと安里がセイバーにまとわりついている。
綺麗は諦めたのか、二人を見ながら苦笑していた。

「……シロウ、お願いがあります」

「なんだよ、急に」

セイバーが俺の横に座った。

綺麗が淹れてくれたお茶を口にして、先を促す。

「私も……貴方の子が欲しい」

「——っ!？」

気管に熱いお茶が入って、盛大に嘔いてしまった。

咳き込む俺を見て、白いあくまが満面の笑みで微笑んでいる。

……妙なタイミングで置かれたと思ったら、そういう事か。

「……駄目でしょうか？」

セイバーが悲しげに顔を伏せる。
いや、別に嫌って訳じゃないんだが。

「……状況を考えてくれ」

そう言って、目の前の惨状を片付けようと席を立った。

——が。

……まずい。一つ、忘れていた。

誰かが玄関を開けて、入ってくる気配がする。

誰かが一直線に、居間へ向かってくる気配がする。

誰かが居間の障子を、ビシャンと音を立てながら——入ってきた。

「しろー！久しぶりにごは……ん？」

……俺は虎の存在を、すっかりと忘れていた。

「なんで小学生が！？しかも双子！？」

がおーと吠える虎に思わず、頭を抱えた。

この面子では綺麗が一番説得に向いていそうだが、本性のせいで期待できない。

遠坂なら説得できるだろうが、徹夜以外の朝は例外だ。

俺が陽子さんの子供と説明しても、当人が居ないから理由としては弱い。

……だが、この状況ならばそれが最善の手か。

「おとーさん、この人だね？」

しかしそれも、天然な黒いあくまの一言によって打ち砕かれてしまった。

……居間に虎の咆哮が響き渡る。

この家に静けさが訪れる日は、もう来ないのかもしれない。

ソラノカケラ

黒い太陽が昇っている。

辺りは業火に包まれ、人気を感じられない。
そんな中を、一人の男が歩いていた。

白い髪に褐色の肌、黒い軽鎧に黒のズボンとブーツ。
そして男が身に纏う、深紅の外套が見る者に印象を付ける。

歩いていた赤い男が跪き、何かを胸に抱いた。
それは幼子にも見えるが、息をしない焼け爛れた人形だった。
男が一度、人形の頭を撫でて地面へ置く。
振り返りもせずに、男はまた歩いていく。

「——契約しよう。我が死後を預ける。その報酬を此処に貰いたい」

一降りの剣が男の手に握られた。
その剣は、星に鍛えられたとされる黄金の光を纏う絶対なる剣。
担い手に必ず勝利をもたらす剣の真名を口にして、男が剣を振り落

とした。

頭上に揺らめく太陽へ向かって、光が昇って行く。

「……これで私も、奴と同類か」

正義の味方を目指していた男は、手に余る悲劇を終わらせる為に守護者となる運命を受け入れた。
無限に惨状を片付けるだけの、終わり無き始まりの契約をしてしまった。

奇しくも”自分”が救われた、始まりの場所で――

「何、奴は折れなかったのだ。私も折られはせん」

例え地獄へ落とされようと、黒き弓兵は不屈で在った。
ならば同じ世界を持つ自分が、屈する訳にはいかない。

……しかし、理想の果てに得たものは地獄への片道切符だ。
今迄自分を支えてきてくれた者達を想いながら、彼は太陽の無い空を見上げた。

「――ごめん、間に合わなかった」

何時の間にか男の背後に、白を纏う女が立っていた。

……世界が泣くかの様に、雨が降る。

未だ燦っていた火が消えていく。

「仕方ないだろう、同時に数ヶ所も開けられてしまっただけだ」

彼女が神の化身と云えど、その身一つだけでは手に限りがあった。天使や神々も総出で当たってはいたが、最後に開けられた此処は少しかを待っていれば、完全に開いてしまっていただろう。

「……………」

声も無く俯き、彼女はただ涙を流している。

自身に刻まれた過酷な運命が、彼の身にも刻まれた事が何よりも悲しかったのだ。

「——私は剣だ。生涯に意味は要らん」

自身の生涯に意味があるのではなく、ダレかに振られる事に意義がある。

そして振られる事が無いのなら、それは彼が望む平和な世界という事だろう。

「……貴方は、それでいいの？」

「元より私に幸せを甘受する資格は無い。今迄が報酬だったと考えれば、構わんさ」

自身の未来を知りつつも、彼は微笑んだ。自分が少しでも、人々を救えるのならばと。

「そんなんじゃないわよ……………」

彼女が歌を紡ぐと、その抱いた腕の中に白と黒の剣が現れた。それは彼女と黒き弓兵の在り方を表すかのように、拵えは同一。幅広の刀身を持つ、一對の直剣。

「持つて行きなさい。私と鴉の、餞別代わり」

赤い男が双剣を手にする。

「……これは、投影か？」

「魔術じゃない方の、ね。」

貴方を担い手として創ったから、使い熟して見せなさい」

無銘の双剣が男の手から消えた。
創り手が永遠で在る様に、この双剣もまた、彼と永遠を共にするだろう。

「礼を言おう。君達の事は決して忘れん」

男が赤い外套を翻して歩きだす。
白を纏う女は、彼の背が見えなくなるまで見守った。

「……汝に、武運を——」

終わり無き道を守護者が一人、ただ歩いていく。

その男の名は、衛宮士郎。

後に彼の事を、人々は錬鉄の英雄と呼んだ。

終幕 シュレーディングー

——鴉の物語、如何でしたでしょうか。

お気付きの方もいらっしゃるでしょうが、ここに彼の正体を全て記します。

常世全ての礎と成る者。

常世全てに闇を撒く者。

終わりにして始まりの剣。

原初の奴隷、サリエル原初の英雄、ウリエル災禍を狩る災禍。
懺悔の天使、ウリエル神の命令と同一存在であり、スサノオ破壊神の同位存在。

無限の牢獄へ至って混沌の同列存在と成り、クイオス
穿たれた穴を剣で抉じ開けて始祖イザナギと同列存在に成った者。

ガンパレードマーチで著名な、芝村氏の無名世界観で言つところの
第七世界出身者。

つまりは、私達の世界の元住人。

そして、わたし解読者の同一存在です。

—— シュレーディンガーの猫。という概念を聞いたことがありますか？

引き金が引かれるとゼロまたはイチになる事象でも、観測されるまでは五分五分という考え方です。

その概念に則って、私たちの世界では別の世界を観測して存在を確定させる事が出来ます。

様々な世界を観測していた解読者^{わたし}は、無限の牢獄に居る鴉を観測しました。

解読者^{わたし}なら救えると思ったのでしょうか、鴉が引き継ぐ筈だった”解放者”の知識を与えられました。

世界は、鴉を見棄ててはいなかったのです。

”解放者”の知識を得た解読者^{わたし}は、あらゆる手段を用いて彼を解放しようと思いました。

しかし根源を解析し、魔法をも手にした解読者^{わたし}でも、無限の牢獄へは到達できませんでした。

…… 解読者^{わたし}は、あらゆる世界に居る”遠坂凜”に賭けてみました。彼女ならば、彼の居る無限の牢獄へ穴を穿てるのではないかと。

しかし、彼女はどうかしても”彼”を呼び出してしまいます。”彼”と彼女の縁は、解読者^{わたし}にも覆せませんでした。

—— ならば、”彼”が居ない世界はどうか？

”彼”の居ない原初の世界を観測した解説者^{わたし}は、物語として記す事で事象の固定を行いました。
それが、この物語が作られた理由です。

ちなみに、彼と共に在る天野陽子も鴉と同じく”解放者”、同一存在です。

しかし一億分の一という確立で”間違い”を起こして造られ、閉ざされた世界へ投入されたようです。
世界にも、うつかりした所があつたみたいですね。

……うつかり、か。

天野陽子の同位存在は太陽神^{アマテラス}。起源は”創造”です。

起源が”解放”でない彼女には、”輪転”が刻まれています。
鴉の刻印は損失の否定という”不滅”なので、双方とも”無の否定”でしょうか。

自身の象徴を八咫鳥としている矢能と、太陽を象徴としている陽子^{フェニックス}。
二人が共に在ることで、炎の霊鳥である不死鳥となっていますね。

さて、ここで解説者^{わたし}から問題です。

「”輪転”を司る大アルカナとはなんでしよう？」

……簡単すぎて意味が無い、かな？ まあ、いつか。
この設問の意味に気付いてもらえれば本望です。

書き終えてみると、無名世界観に沿う世界となつてしまいました。
解読者^{わたし}が芝村氏の世界も観測していた為、仕方ないと言えば仕方ないのですが……。
やっぱり被り過ぎですよねえ……。

……踊らされた気がします。

余談になりますが、この物語は鏡音リンが歌う「ココロ」世界にも重なっています。

鴉には本当に報酬は無かったのか？

鴉は無限の牢獄に在って、何故それ耐えられたのか？

その答えは「ココロ」世界にあります。

聴いて泣きやがれなのです。

さて、鴉を無限の牢獄より解放されましたし、この辺で解読者^{わたし}はただのヒトに戻ることにします。

最後まで鴉の物語をお読み頂き、有難う御座いました。

世界を綴る神達と、世界を造る神達に崇敬を。

無限の世界を巡る観測者達に、
神の御加護を。

陽子さんのガンパレード（前書き）

本作はふいくしよんです。

神宮に行った事なんて無いぜとか戯けた事抜かした、頭も敬いも足りない不届な作者に書かせているので、
まったくもって至らない描写がまま有ります。その点をごりょし
よー下さいませ。

陽子さんのガンパレード

「すみませーん」

神宮司庁の受付に、良く透る女性の声が響いた。
近くに居た男性職員が声の主に対応しようと、目を向ける。

女性の装いは、カトリックの司祭が纏う様な白のカソックだった。
違うところを言えば、何の装飾も施されず白一色。少々光沢が有り、
無地の絹で作られている様にも見える。

正直、これを着て外を出歩けば、皆が何事かと視線を向けるだろう。

身長は160cm前後といったところか。平均的な身長である男性
職員より10cm程低い。

瞳は少々蒼みの有る白色で、顔立ちはどこか幼さを感じるが、万人
が親しみを覚える様な雰囲気だ。

しかし、彼女の特徴を挙げるとすれば……白く長い、美しい髪だろ
う。

(……アルビノなのだろうか)

一瞬、神秘的なまでに白い髪を目にして、彼は我を忘れていた。

そういう反応に慣れているのか、はたまた自覚が無いのか、何とも思って無い様子で彼女は彼の言葉を待っている。

アルビノならば弱視を伴う事が多く、眼鏡を必要とする者が多いが、彼女は眼鏡を掛けていない。

コンタクトかもしれないが、ハッキリと視線を向けている彼女を見て、違うのかもしれないと彼は思った。

「……失礼。何の御用向きでしょうか」

「大宮司さんに取次ぎをお願い出来ますか？」

連絡も無く、いきなりそう言われてもと彼は困った。

彼の一存で出来る事では無いし、上司に相談しても一蹴されてしまうだろう。

「申し訳有りませんが、そういった事は受け付けておりません」

「それじゃ、言伝をお願いします」

それ位ならば——と、彼はメモ帳を取り出したが、何故かそれを制止された。

「……？」

一言で済む様な伝言なのだろうかと思ひながら、彼女に顔を向ける。

……彼は何故か、彼女の”紅い瞳”から視線を外せなくなった。

「アマノイワトハヒラカレタ」

……一言。

彼女が口にしたのは、たったの一言だけ。

だが、その言葉を聞いた彼の頬に――涙が伝った。

……何故、自分は泣いているのか。

彼には分らない。自身には泣く理由が無いからだ。
しかし、彼は自身の流す涙を止める事が出来なかった。

「貴方」の上司さん、呼んで来てくれるかしら」

不意に彼の涙が止まった。

彼女にだけは見せるまいと、何故か彼は恥ずかしさを覚えながら涙を拭う。

「少々お待ち下さい」

-
-
-
-
-
-
-

応接室に通されたが、「彼」が来るのは少し時間が掛かるそうだ。

果報は寝て待てとよく言われるが、文字通りに寝る訳にはいかないだろう。そもそも意味が違うし。

そんな下らない事を考えながら、お茶をちびりちびりと頂いて私は暇を弄んでいた。

「お待たせしました」

通されてから30分は経っただろうか。

無理を言って頼んだのだから、むしろ早い方だ。言伝を頼んだ彼に心の中で労った。

黒いスーツを着た初老の男性へ会釈をする。

「それで、御用件は――」

「――御免なさい、貴方に用事が有る訳ではないの」

「……は？」

言葉を切られた大宮司さんの顔が怪訝そうになった。
自身の業務を切り上げて来たのに、申し訳無く思う。

「それでは、何故私を？」

「用が全く無いという訳でもないのだけれど……アルケー権天、貴方に用事よ」

「……アルケーとは確か、カトリック教の天使の事でしたかな？」

他宗教の事も勉強しているらしい。中々に勤勉な人のようだ。

「ええ。そして……貴方を守護している者の名でもあるわ」

降って湧いた俄か話に大宮司さんが苦笑している。
どうせハッターだと、”彼”は動揺すらしていない。

「——汝に命ずる、光に現せ^{うつ}」

私の言霊に虚空が軋みを上げる。

慌て不為る”彼”の様子が滑稽に見え、少々笑ってしまった。

”彼”の姿が現れる。

その背には白と灰が入り混じる翼。人々を導き、見守っている者達の証だ。

「……貴様は何者か」

「さて、誰でしょう？ 貴方を言霊だけで従わせられる者は限られていると思うけど」

「……ふむ。そうは見えぬが、大御使殿か？」

”彼等”は何人か、ヒトとして生きている。”彼”もその類だと思っ
たみたいだ。

「外れも大外れね」

私の否定に、答えを導き出した”彼”が戦慄した。

「無礼を……」

翼を収め、”彼”が膝を付く。
そう畏まられてしまうと、私も少し気が悪い。

「いいよ、仕方ないし。それより”みんな”に伝えてきてくれる？」

「御意に」

姿を消して”彼”は羽ばたいて行った。
そんな”彼”との遣り取りに、呆然としていた大宮司さんに声を掛ける。

「”彼”が戻るまで部屋から出る事を禁じます。

神域と言えど、私が近くに居なければ意味がありませんから」

アルカイ
権天が守護していた程の者だ。

”彼”が居ない今、悪魔と呼ばれる者達に問答無用で殺されかねない。

「……失礼ですが、貴女の御名前を聞かせて頂けますか」

「んー、呼び名だからあまり自称したくないのだけれど……」

そっちの名前を教えないとなると、大宮司さんの協力も受け難いか。

「私はここに祀られているカミサマの現うつ身、太アマテラス照天よ」

「……まあ俄かに信じられない話ではありますが、納得はしました。それで、私にも用事が有るのでは？」

ををう、覚えて居てくれたのか。

一度否定したのに、やっぱりこの人しっかりしてる。

「用事と言うより、お願いなのよ。何とか首相さんに会えないかしら」

「少々難しいとは思いますが、御任せ下さい。しかし、どのような御用向きで？」

「ちよつと子供控えてみたのだけれど、私の戸籍が無くて育て難いのよ」

「いやあ、お恥ずかしい。なんて、ぶっちゃけて言ってみた。カミサマの威厳が台無しである。

いきなりそんな所帯染みた話を聞かされて、大宮さんが豪快に笑った。

「いや、失礼。戸籍を一から作りたと言う事ですな」

「まあそつちは序^{ついで}で。お金が必要だから、仕事でも請け負ってみようかと」

偽造やらでお縄につくのも面倒だし、あの子達を学校へ通わせないといけない。お腹も減るし、ひもじい思いなんてしたくない。

というか私が我慢しても、白いのに言葉責めされるのがオチだ。黒いのにも駄々を捏ねられるのが目に見えてる。

カミサマでも、ぶっちゃけ働いた方が手っ取り早かったりするのだ。

「その様な事は必要無いと思いますが。私を始め、貴女を信仰す

る者は数多くおります」

「やーよ、私は自分で働いて対価を得るのが好きなの。お布施つても性に合わないし」

別に拝むのは構わないけど、先払いでお願いされても困る。

そもそも個人の願い事は現場の連中が解決するから、私が手を出す必要は無いのだ。

「まあ雨乞いやら気象予報やら、不味い事だけ手を出すつもりだけだね」

「しかし、些か説得力に欠けるのでは」

「実際に地震起こしたり、噴火止めたりすれば嫌でも信じるわよ」

地震や噴火を止めても、別の所へ逃がしてやらないといけないから意味が無い。

要点だけを押さえれば、イタチゴッコにはならないから面倒な事にもならないけど、全部止めるとなると精霊達が死んでしまう。そうなれば連中も反発してしまうから、出来ればしたくない。

「……やはり、神様を怒らせるものでは有りませんな」

「でも、滅多に怒らないわよ？」

「アイツら」は怒ると言うか、はっちゃけると言うか……例えると、”お祭り”か。

日頃溜まった鬱憤を晴らしている様なものだ。溜め過ぎて、生ける者達に傍迷惑な事を仕出かす事も有るけど。

まあ、暫くは”アイツら”にも息抜きさせてあげよう。

——彼”が帰ってきたようだ。窓を開けて出迎える。

「御帰りなさい」

「申し訳無い、この姿で失敬をする」

”彼”は大鷹の姿で窓枠に留まった。

”彼等”は姿を容易に見られぬよう、よく動物達の姿を態^とる。やっぱり、火急の報せでも規則は守れと言われたみたいだ。

道中では姿を消して飛ぶから、あまり意味が無い規則だけど。

んー、もうちょつと……何とかならないものかなあ。

「天津神以下総柱、貴女様に降る言伝を賜った。大国主様が飛檄を所望して居られたが、如何に」

「私が伝える」

「御意に。それと、風天^{ヴァーユ}らを筆頭に荒神らも猛って居られた」

あー、こりゃ大時化になるな。忙しくなりそうだ

「分かった。ありがとね」

「では、これにて」

姿を消して、”彼”は大宮司さんの守護に憑いた。

「……妙なものですな。まさか御前を目にする日が来ようとは……
いや、夢には見た事がありますか」

「神職でも見れる人は限られていますから。逆も然りです」

智天級ケルビムの者が守護に憑く事は滅多に無い。

自力で見るのは不可能でもないけど、天啓を得なければ至難。
生まれる時からカケラを持つてる人も居たりするけど。

「さてと、久しぶりに襦でもするかな」

「流石にお体を冷やしてしまうのでは？」

「大丈夫よ。南極で襦しても問題無いし」

まあ、ひゃっこいから何度もしたくないのが本音。

「お送りしましょう」

「余り、甘く見ないで下さいな——」

応接室に穏やかな風が吹く。風の精霊達が歌を謡っている。
太陽をこよなく愛する”彼等”が、私の体をその身に乗せた。

「——お暇させて貰いますね」

開かれた窓から飛び揚がり、山奥へと向う。

県道32号線、伊勢道路を1kmほど東にある川の^{ほとり}辺に降りた。
2kmほど南西に天の岩戸、南には神路ダムがある。

「さーで、いっちょおっぱじめましょうか」

脱いだ服を放り投げて、気合を入れてみた。

冬の空気は精霊達のお陰で苦にもならないけど、楔は別だ。
全て遮断してしまっただけでは同調できないから、水の冷たさを直接感じないといけない。

「うひー」

流れる水が足を冷やしていく。

加護が無ければ、冷さと寒さで今頃がつくがつくと踊っているかもしれない。

全裸でそんな無様を晒したら、戯けと皆に笑われてしまうだろう。

……思考、停止。

「――」

根源接続。

接続完了。

指定摂理、同調開始。

指定事象、解析開始。解析完了。

符丁”半旗”、全送開始。送信完了。

受信開始。

受信終了。

同調終了。

接続遮断。

思考復帰。

「――ぷひい」

まったく、みんなして延々と陳情を連ねるのは勘弁して欲しい。
中には”出産オメデトウ”とか擲う戯けも居た。ほんとに、何の為
の符丁なんだか。

「思つたより減つてたなあ」

信仰を失つて消滅した柱を、肩代わりしている者が多かった。
このままでは押し潰されてしまうから、如何にかしないといけない。
……まあ、手始めに祭の音頭を執つてこよう。”アイツ”の音頭じ
や下手したら壊滅するし。

川から上がった。

脱ぎ散らした服を手にし……て？

「うげ、マジですか」

下着は在れど、白衣が無い。

聞くと今更”モツテツタ”なんて抜かした精霊を叩く。はた人里離れてたから油断してた。
アレは物質化しているから、大層な値が付くだろう——市場的にも、魔術的にも。

「……まあ、いつか」

物質生成法の答えを察せても、中身は暗号に暗号を重ねた無限情報。魔法使いが束になっても、アレ自体からは数千年を賭けようが答えは出せない。

問題は解読法の方だけど、こっちも完全に修めないと役に立たないシロモノ。

修める前に発狂するし、如何にも出来ない。

「馬鹿鴉じゃあるまいし」

右手に光を灯して、新たに作った衣を纏う……っと、ぱんつぱんつ。

「そんじゃ、お願い」

伊勢の地を後に、進路は本州を遙か南へ。

目標、”伊勢湾台風”。

ぶっちKILL対象——”スサノオ建速須佐之男命”。

「まったく、帰って来て早々——仕事増やしてんじゃないわよバカ鴉!!!!」

- - - - -

君は太陽 僕は鴉 運命告げる醜い悪魔
君がよみがえる日まで 僕は何年だって待ってやる

絶望の中 僕は生まれる 祝福するは地獄の炎
そこから僕は長い長い 旅の始まりを踏み歩き出す

たとえ世界の全てが 暗い闇となろうとも
僕が君を守るから 君は世界を照らしてて

君は鏡 僕は剣 運命告げる一振りの剣
東の森での出来事は 心底から楽しんでいた

君がここへと呼ばれた時 森に佇む君の姿
とっても白くて長い髪に 一目で僕は恋に落ちていた

だけどやっぱり運命で 君はこの世を去っていく
ずっと泣かず待ったのに どうして涙が止まらない

君は神様 僕は御先 また助けられず見殺しにした
砂の嵐は晴れたけど 僕の空は砂が吹いてる

もうすぐ旅は終わるだろう

不毛の地にある地獄門 災禍の源を殺すために 僕とみんなが剣を
掲げる

僕は戦いから逃げられない

多くの人を手に掛けて 世界を殺す僕の罪は 何をしてもリセット
できない

僕は君を 必ず守る 未だ見えぬ未来を築くため
君が僕を信じてくれたように 僕も君を信じてる

遙か昔の物語

この世を全て巡っていた 草木や動物達を愛する 優しい優しい光
の神様

君の鏡を手に持って 無限の災禍を前に
みんなの力を借りて 最後の法をそこに敷す

君は太陽 僕は鴉 神様と居れる幸せ鴉
風を謡い僕は巡る その先は全て暗闇

ここに闇が有るのならば いつかきつと光が来る

.....(後書き)

Special thanks for producer.

http://www.nicovideo.jp/watch/
sm4625425

おまけ 「陽子さんの本気」

http://www.nicovideo.jp/watch/
sm4629831

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

これで最後。

剣	ウリエル	神の顔	堅忍	地	荒嵐
玉	ガブリエル	神の智	智恵	水	月読
鏡	ミカエル	神の慈	美德	火	天照
鷹	ラファエル	神の理	栄光	風	水崎一族
虎	ハニエル	神の美	勝利	陽	美咲一族
狼	ラゲエル	神の友	監視	陰	天野綺麗
鴉	カマエル	神の義	峻厳	虚	天野安里
荒	メルキセデク	万天の司	正義		黒羽矢能
天	メタトロン	万天の長	王冠		天野陽子
月	サンダルフォン	万天の樹	王国		美咲陽子
地	ラシュヌ	万天の審	天秤		ガイア
蔵	ミスラ	万天の軍	契約		アラヤ
衛	パワー	悪魔を討つ者	尖兵		守護者
雄	ヴァーチャー	奇跡を導く者	鋭兵		英霊

剣 〓 イザナギ 〓 スサノオ 〓 シヴァ
鏡 〓 イザナミ（複製） 〓 アマテラス 〓 ブラフマー
玉 〓 イザナミ（素体） 〓 ツクヨミ 〓 ヴィシュヌ

八咫鳥 〓 スルト 黒衣の者

スルトとは解放者となったイザナギの化身。解放者と言う現象。アンリマユのアンチテーゼ。

イザナギが解放者となるのに支払った代償は、自身の封印と■■の神名抹消。

アンリマユ現界と共にイザナギの封印が解かれますが、リベルという神名は常に記録から消滅します。

解放剣は”剣”という概念の原典で、反逆剣は”宝具”という概念の原典。どちらも「理の否定」に属しています。

解放者が”原初の英雄”とされるのも、この二つの原典を持つ為。

”剣”も”宝具”も概念でしかなく、解放者以外が手にする事は出来ません。

全ての原典があるという「王の財宝」にも登録されていませんが、変哲の無い剣として、唯のロングソードが登録されています。

流石に英雄王も、何故登録されているのかを気付いておらず、このロングソードが日の目を見る事は決して無いでしょう。

……なんの装飾もされて居らず、唯のナマクラな剣を見て愉しむ趣味は無いでしょうし。

「ユグドラシル」の方で”二つ名”を書いたんで、それについてここに書きます。

彼が持つ剣の呼び名は”貫くもの”——即ち、グングニル。

これは剣自体の名ではなく、現象の名であり、宝具として形を成したグングニルとは別の物です。

しかし、グングニルである事は確かです。これを目にした”彼”も……グングニルと呼ぶかも知れません。

もう一つ、呼び名が有ります。その名は鴉の剣——レイヴァンテイン。

漆黒剣も、解放剣も、反逆剣も……彼が持つ剣は、そう呼ばれます。

剣として使われ、槍として使われ、矢として使われ、杖として使われる彼の剣。

つまり七騎のクラスのうち、四騎の資格を持っています。伝説を持つ事が出来ない為、彼が召喚される事は無いでしょうけど。

残りの三騎の資格は無いのかと言うと、そうでもなかったりします。彼の在り方では滅多に有りませんが、有り得ない話ではありませんから。

ぶっちゃけた話、彼は最強です。

彼は現象でしかないのです、そもそも死という概念が無意味。その上、理を否定する法を以って現らゆる敵を打ち砕いていきます。

……そんな彼でも、”事故”を避ける事は出来ませんでした。

”事故”に合った彼は、気が遠くなるほどの長い年月をかけ、力を取り戻していく事になります。

しかし、それはまた別の物語。

私が記す事は無いと思いますが……いつか、誰かに書かれるかもしれません。

では、この辺りでお暇させて頂きます。

此処に記される事はコレで終わり。貴方が答えを得る事を願います。

後書き

(9月3日 技能加筆)

後書きってか冒頭で全部ぶち壊します。

本編台無しなんで戻るなら今のうちです。

って書いても戻る人は居ない罫。

>> 俺(作者)は神だ。妄想したキャラを救うためにこのSSを書いた。

惜しい、「解読者自体」から既に俺の妄想だーよ。

単にこれを描いたのは、俺が鴉と犬とFateが大好きだったから。Fateの世界を使っただけはキャラ設定しやすかったのと、設定妄

想しているうちに” 最初の世界” を描きたくなくて自重出来なくな
った。

で、使い古されている手法の「作者の自己投影」で描いた訳だ。

「他人の草鞋を重ねて履いて踊った作者の妄想話」

それがコレの真相だな。

んじゃま、後は俺の技能不足で描けなかった自己満足設定でも晒し
て痴死ってみよう。

解放剣リベリオン : D

装飾の無いロングソード。解放解答で紡がれている。
攻撃系の解答式はこれを上書きして行使する。

解放解答は任意発動。

反逆剣リベリオン : A++

無骨な鉄槐剣で、全長は4m程と規格外。反転解答で紡がれており、
見た目に反して重さは皆無。

手にしている間は新たに解答式を行使できないが、筋力：A+ 敏
捷：A+ に補正される。

所謂、強化チート

解放の解方程式 L i b e r a t i o n : A + +
対象の束縛されている事象を無へ還す。

#世界のバックアップを得ている状態で「属性：悪」に対して使
うと、問答無用で浄化して世界に還します。
#汚物は解放だ！。

解放の方程式 L i b e r i o n : E X 対単 近接 捕
捉1
Answerer
全てを無へ還す者。

解放剣を媒介にして対象が束縛されている事象を破綻させる。

#バーサーカー等、本人が束縛されている事を望むようになると
効果無し。

#応用で死者蘇生が可能。

反逆の方程式 R e b e l l i o n : E X 対単 近接 捕
捉1
Answerer
全てを絶ち斬る者。

反逆剣を媒介にして対象の因果を破綻させる。

#世界をも滅ぼす最終方程。
#鴉は人間という制約があるんで、本編上では反動が体に返って
きてます。

#これで鴉を斬っても、破綻した因果すら復元されるんで意味が

無いかも。

#ぶっちゃければ、真名解放して斬ると何でも抹消するチート。

#惑星だろ？が何だろ？が消せますが、痛いからイヤという理由で使われません。

解放の定理式：面倒い 対軍っぽい 知らん いっぱい
自己解放／固有結界。 憑依している同一存在を現界させる。

#鴉版、無限の剣製。 本編時での最大同時現界数は9999万9999人。

#解答式の行使は不可。 不滅刻印無効。 3／4が殺されると強制解除。

#「属性：悪」に対してのみ、接触による解放解答が常時発動。

#総員英霊として現界する為、ランク補正有り。 筋力：A 敏

捷：A 解放剣：A++ 相当。

#ただの物量チートです。 相手によっては普通に負けます。

#令呪使用で又ツコロと言えば対軍宝具持ちのサーヴァント全員、宝石剣ぶっぱの凜あたりには瞬戒。

#固有結界持ち相手だと上書き展開で乙る。

#その代わりアンリ・マユの天敵だったりします。 体に触れるだけで解放しちゃいますから。

#ちなみに、本来の”解放者”として派遣された時は世界からバツクアップを受ける為、万象執行／筋力敏捷：EX という酷い事になります。

#補正に耐久が無い理由は”何度でも派遣できるから”です。 それ弄ると取り返しが付きません。

#万一、万象執行法を自ら手にしても、解析する前に寿命が尽き

るようになってます。

魔力が無い理由は魔術を足掛かりに、魔法を手にして逃げる不届きな輩が出る事を防ぐ為。

隠遁生活を送ってくれば困る事はないのですが、閉ざされていない、未来が在る世界で”世界殺し”をされちゃ敵いません。

”世界”が手を下せば良いのですが、彼等に対しては断罪指令を禁則されています。

抑止が必要になっても、その矛盾した法が”世界”を狂わしてしまうかもしれません。

#

まあ、そんな狂った”世界”も見てみたい気もしますが。

反逆の定理式：面倒い 対界っぽい 知らん いっぱい

属性反転／隔世結界。 世界に反逆し、万象の執行権を篡奪する。

属性をいろいろと反転させて、陽子さんが「世界の神に、私はなる！」と宣言する。

まあ、世界と言っても箱庭ですけどね。 善性は在り方なので反転しません。

・キャラ補足。

名前： 黒羽矢能

起源： 解放

属性： 闇／混沌／善

刻印： 不変

象徴： 鴉

性格： 冷めてるようで熱い。けど、冷めてる。 悪魔なんで泣きません。 でびる・めい・暗いです。

容姿： 黒い。 あと黒い。 他には黒い。 良い子も悪い子も触れないように。 多分、喰われます。

嗜好： 天体観測。 自然観察。 真理探究。

技能・特性追記

「鋼心」： EX

”剣” の特性。

精神・物理を問わず、束縛や制限に類する効果を破戒する。

「事典百科」： D

知識と経験の集大成。

彼の場合、武術・魔術・医術・科学技術全般を修めている。

飽くまで知識経験のみなので、修練を積み重ねていない項目に関しては素人に毛が生えた程度。

「風の守護」： E (A++)

荒神の化身。

本来は風に属する手段で彼を傷付ける事は出来ないが、自身の起源が反発しており、最低ランクまで下がっている。

「真言」： -

解答式行使の前提技能。

言葉に複数の意味を乗せる技能だが、魔術的な詠唱との違いは自身への暗示ではなく、世界への暗示である点。

意思を乗せるだけならば、必ずしも言葉として発する必要はない。

名前： 天野陽子

起源： 創造

属性： 光 / 秩序 / 善

刻印： 輪転（現在は封印中。死亡時に発現

象徴： 太陽

性格： 熱いようで冷めてる。けど、熱い。怒らせても泣かせても怖いです。気象的に。

容姿： 白い。あと白い。他には白い。良い子も悪い子も直接見ないように。多分、失明します。

嗜好： 鴉弄り。犬弄り。土弄りに池造り。

筋力： F

魔力： EX

耐久： F

幸運： EX

敏捷： F

宝具： -

「神霊」： E

#太陽神の現し身では在るが、その神性は受肉している為にラ
ンクダウンしている。

「神々の加護」：EX

#父と子と精霊を統べる者。

#創造神を兼ねている、最高位の彼女に逆らえる者は居ないだ
ろう。

#何人たりとも彼女を傷付ける事は出来無いが、例外が一人だ
け在る。

#もつとも、喧嘩止まりとなるのが常だが。

「全の否定」：EX

#魔法。現代では失われている言霊を用い、万象を操る。

#詠唱とは本来、この言霊を用いるものだが、創世の際に消失し
てしまった為に残滓ほどこしか残されて居ない。

#魔術起動に詠唱が必要とされているのは、この残滓を手繰り寄
せる為。

名前：天野綺麗

起源：切開

属性：光/秩序/善

刻印：公平（右手）

象徴：天秤

性格：温厚。規律と慈愛。平等に罰し、平等に愛します。怒る
と怖いです。無機的に。

容姿：白イリヤ

嗜好： 悪魔弄り。

筋力： D

魔力： A +

耐久： C

幸運： B

敏捷： D

宝具： -

「神性」： A +

「神々の加護」： A +

「癒し手」： EX

起源反転。

精神・物理を問わず、敢えて傷を切り開き、塞ぐ事によって完全に修復する。

不死殺しの概念をも上書きする為、彼女に癒せない傷は存在しない。

偶に”傷”を開きっぱなしで放置するが、それは彼女の御愛嬌と言つものだろう。

名前： 天野安里

起源： 破壊

属性： 闇 / 混沌 / 善

刻印： 真理（左手）

象徴： 磨羯

性格： 活発。 自由奔放。 気紛れに何でも愛します。 怒ると怖い
です。 悪魔的に。

容姿： 黒イリヤ

嗜好： わんわんおー！

筋力： B

魔力： C

耐久： C

幸運： D

敏捷： A +

宝具： -

「神性」： A +

「神々の加護」： C

「壊し手」： EX

起源行使。

精神、物理を問わず、対象を完全に破壊する。

概念をも破壊する為、彼女に壊せない物は存在しない。

神々どころか世界すらも破壊できるが、「愛してくれるから」という理由で行使される事は無いだろう。

但し、彼女の逆鱗に触れた者は神だろうが”半殺し”を覚悟する羽目になる。

綺麗と安里は名前通り、綺礼とアンリ。

二人ともわんわんの善性が優勢（誤字に有らず）遺伝した様だ。流石わんわん。

・本編補完。

「竜牙兵」 / b y 「解放者」

#捏造設定。

#ゴーレムの一種で自然霊は使っていないと思われる。

#牙を媒体に魂魄召喚した上で、自我を持たせていなければ殲滅対象に該当。

#対象から外れる使い魔等との違いは「やたらめったら使役してんじゃねーよ」

#まあ、やり過ぎなければ鴉は怒らないって事です。

「捕縛詠唱」 / b y 「洗礼」

魂の三原則に反している存在を無力化して拘束する。自身の起源に反する為、該当しない対象には無効。

#具体的に言うと、F a t eで該当する対象は間桐臓硯のみ。

#処刑人ネタ第一弾。

「洗礼詠唱」 / b y 「洗礼」

#これ、結構最初の方から構想できてました。

#解放解答は一言発動で詠唱までは要りませんが、これを綺麗生誕の絆としています。

綺麗と安里で処刑人ネタを描く予定がお蔵入り決定。才能が欲しい。

処刑人ネタ第二段。

「送還詠唱」 / by「最期の舞踏」

これも綺礼との絆にしています。

処刑人ネタ第三弾。

「信義、無欠にして万敵」 / by「最期の舞踏」

ばんじゃく ↓ 万敵 ↓ 関羽が愛用した双刀、万人敵がヒット。

双剣繋がりで彼が付けたなら、詩はこうなるんじゃないかと。

「しんぎ」については適当。

簡単に導かれるのは心技や真技だけど、彼が言っているのは真偽や真義かもしれん。

やっぱり真偽かなあ。「嘘か真か、欠ける事が無い万人敵」つてな具合になるし。

四方剣を投げ返している”影”はロマンシングサガ3のシャドウサーヴァント。

漆黒剣を寄り代に現界させた混沌^{ケイオス}……鴉の人形。

詠唱の元ネタはもちろん、某弓兵。確殺分身の方はリムーブカースの某戦神。

「魔法と同等の魔術」 / by「序章」

#これは同等なんてものじゃなく、普通に魔法です。

#本編中の説明はミスリード誘ってみました。

#遠坂嬢なら普通に、魔法と指摘すると思う。……うっかりしなければ。

#不可能な結果を導くのが魔法というものですが、これは絶対不可能な経由点を経て様々な結果を導いています。

#勿論、それだけでは魔法と言えません。しかし、これは本質の方が問題となつてきます。

#「質量保存の法則」「エネルギー保存の法則」等等、根本から無視できる解答式は「無の否定」「有の否定」が可能。

#つまりは、「不可能」な事象を選択して否定……反転させる事で可能にする事が出来ます。

#魔法を再現出来るが故に、魔法と言えるのです。

#反逆剣の因果否定を例にします。

#現在進行形で存在している事象を否定すると言ふ事は、「昔から在る」を「昔から無い」とする事です。

#これは”時間旅行”の管轄になりますかね。

#ちなみに、鴉は刻印の弊害で”時間旅行”が出来ません。

#「ここに無いYO!」と言つても「有るじゃねえかボケが!」って返される感じです。

#それじゃ、”平行世界の運営”は使えるのか？

#んー、難しいです。可能ではありますが、前提として先方の座標が必要です。

#今捏造して32種にした解答式、Observation（観測）とTransposition（輸送）を使えばいけそうで

すが。

”魂の物質化” に関しては、魔力を無尽蔵にするという事と似た事が出来ます。

量を無限にするのではなく、消費をゼロにする事で無限と化せますね。

元々、設定で用意していた解答式は31種。防御の遮断解答から対滅解答みたいにやばいのまで。

技能としての解答式に付いているランクは便宜上の物。もとい、作者の都合。

設定規則は「T・I・O・N」で終わる事。なるべく、それから逸脱しないようにしました。

デコード・アルター・コンバートの順で会得する難易度が高くなります。

解答式の詠唱は、その一工程を決められた手順で実行出来るように、テンプレート化された物と考えて下さい。

鴉にとって鍵だったのは二つ。Conversion（変換）とReversion（反転）

反転解答は万象執行を持たされる解放者でも、暗号化されていて手が出せないシロモノです。

解放剣に”反転”を乗せると、反逆剣になっちゃいますから。

描き終えてから、どっかで「zero / style」という名で魔法が紹介されていたけど失念。

無から有を作るだとかそんな感じの説明だったけど……夢でも見てたんだろっか。

- - - - -

「型月世界における魔法に付いての考察」（原作知識がある人向け）

根源、第四、第六については情報不足により仮定。カナは捏造名。

根源 全の否定

—— 全てを肯定にする（全確定） トウル

第一 時間の否定

—— 全てを今にする（時限確定） タイム

第二 無の否定

—— 全てを有にする（上限確定） インフィニティ

第三 次元の否定

—— 全てを此処にする（次元確定） パラレル

第四 確率の否定

—— 全てを極にする（事象確定） アカシック

第五 有の否定

—— 全てを無にする（下限確定） ゼロ

第六 理の否定

—— 全てを自在にする（万象確定） ロー

根源がヤバイのは書くまでもないが、アカシックとローは他の魔法と比べると段違いにヤバイ。

なにせ、情報量が無限。どっぷり浸かったら廃人確定。この世とはバイバイする羽目になる。

そんなヤバイ魔法使ってる鴉とか超スゴイ。

と、コピペネタはさておき。

第一の使い手は何故居ないのか？

行使した時点で”ユグドラシルの枝”が発生して帰って来れなくなる。

つまり、この世とバイバイする羽目になった。

第二は次元軸だから、座標をすっかり忘れなければ帰ってこれる。

第三の上限確定はそのまんま。表記出来ない程の数値を超える、つまりは最高点を無限に設定する法。

第四、宇宙ヤバイ。

まあ真面目に書くと、行使した時点でアカシックレコード化して死ぬ。好奇心は身を滅ぼすのである。

第五、青。

破壊の魔法らしいので、最高点をゼロに設定して抹消する法だと思われる。

「魔法使いの夜」で明かされるかもしれないから、やってみようかし。

で、第六。

「俺が法律だ！」って魔法。どんな法でも書き換える最低な魔法。ちーと、ちーたー、ちーてすと。

そんなかわし、足掛かりの段階でみんなバイバイしていく。世界は非

情なのである。

最後に、根源。

全てが無である、混沌から世界を造るために必要な魔法。即ち――

嘘。

この世界は嘘で出来ている。原作も嘘で出来ている。

そして……”この世”もきつと、嘘で出来ている。

しかし、それが真実。ならば嘘ではなく、真実なのだろう。

世界は嘘をつかれて造られた。この闇の中には必ず、光が在ると。

故に鴉は嘘をつく。闇の中にも光が在ると、嘘をつく。

それは鴉に叶えられない願いでも、稀代の嘘つきが叶えてくれるだろう。

カミサマと呼ばれる稀代の嘘つき達は、”この世”にいっぱい居るのだから。

と、哲学ちつくな電波発信してみる。テストス、本日は天晴れです。まだ外は真っ暗だけど。

ほいじゃ考察終了。続きをだうぞ。

・色々補完

「それがどうした」

作者が某世界で手に入れた魔法の言葉。 「ゼロのガンパレード」
で Check it!!

他には「I am the bone of my sword」がある。

鴉の様に、折られない存在で在りたいものです。

「一億分の一のうつかり」

元からエラー対策で世界管理プログラム「ガイア」に設定されています。

鴉が反逆剣を手にした為、”彼女”が召喚されました。

ちなみに、ガイアはココロにおける科学者役の人。 かもしれない。
い。

「無限に抗う反逆者」

解読者の事。 鴉じゃないです。 作者の事でもありません。

鴉に対して何もしていないのに題名になっている不思議なお方。

ココロにおけるレプリカ役の人? …… 女性であって欲しい。

「鴉」

鴉。

この世の果てで何か歌ってた暇魔人。

#チート使いではなく、チーターな最低野郎。

#まったくもって似てないけど、ココロにおける永遠に歌う天使役の人？

#天使と神を元に作られた人形。”事故”で神性を取り戻していた”解放者”。

#ぶつちやければ、作者が憧れている幻想「八咫鳥」そのもの。

#”解放者”として天野陽子が作られているのも、その為。……

天照も好きだし。

#コイツは後からこじ付けられる設定が出まくりでした。神話万歳。

#女神転生では「秩序／善」な霊鳥ですが、破壊神を器にしているで「混沌／善」になってます。

#根源に成れた理由の一つ。
ケイオス

#日本人として描いたんで器をスサノオにしましたが、解放者は鴉スルトなんで黒衣の者の方が近いっす。

#起源は設定した”解放”の在り方が懺悔の天使に近かったんで、ウリエルとしました。

#ウイキペディアより抜粋。

#日本：太陽の使者。 中国：太陽の化身。 イギリス：アーサー

王の化身。

#ケルト：戦神、死神の象徴。 北欧神話：オーディンの斥候。

ギリシア神話：太陽神の使い。

#エジプト：太陽の化身。 メソポタミア／旧約聖書：斥候。

北米先住民：創生の象徴。

#ケルトはこれの前に気付いたけど、アーサー王までカラスかよ……。

#触媒という条件を問わず英霊として呼ぶなら、解放者はセイバーになるだろうし、

#一応は呼び出せた理由になるか。……こじ付け全開だな。

妄想終了。

これ読んで楽しいって人居るんだろうか？
まあ恥死る俺を見て楽しいって人は少なからず居るか。

恥死らんけどな！！

最後に使った（使ってた？）ネタ元の列記でゝます。

『Fate』 色々。hollow分は極少ですが、向こうとも同調させたつもりです。原作おぬぬめ。

『ゼロの使い魔』 第四刻印捏造ばーじょん。 （鴉の修練場。

『リムーブカース』 方程式、輪廻、某戦神の技。 （鴉の雛形。

『ガンパレードマーチ』 無名世界観。 （構想外。不意に最初から同調してた。

『女神転生』 種族分類、属性。 （大天使、天津神、破壊神、霊鳥、邪神／コトミネ、魔王／アンリ、外道／サクシャ。

『映画・処刑人』 洗礼詠唱と刻印。 （二人はぷりきゅあ？

『映画・マトリックス』 世界の数値化。 （ちーとちーたーちー
てすと！

『俺の屍を越えていけ』 子作り。 もとい交神の儀。 （「戦いの
後で」の描き直し部分。

『36星座』 ケンタウロス座のタロットと、前後の星座に注目。
（構想外。 作者の守護星座。

『鏡音ノココロ』 鴉が得た答え。 （作者が得た答え。

『シャッタードスカイ』 ソラノカケラ。 （場面名を日本語に統
一の為、21部「eclipse」を「ソラノカケラ」へ変更。

『大神』 わんわんおー！ （わんわんおー！

『日本神話』 わんわんおー！ （わんわんおー！

『各国神話』 わんわんおー！ （わんわんおー！

わんわんおー！！！！

後書き

(9月3日 技能加筆) (後書き)

この後書きには嘘があります。

ヒントは「大神」の詩、「祈りは力、力は祈り」

答えは「岩田とアリアン」

さて、嘘とはなんでしょうかね？

現在、次章である「ユグドラシル ―無限回廊―」を連載中。

数話の短編になりますが、“この世界”に興味があるという方はもちろん宜しく願います。

追記。

無限回廊ほつぽり出してhollow編へ繋いでみたり。
まあ相変わらず原作トレースですが、面白く読めるようにはしてみます。

hollows wings

鴉は常に、太陽と共に。

鴉は常に、太陽へ還る。

鴉は常に——闇の中。

「……これも、さだめ運命か」

黒い月が輝く夜空の下、鴉は独り、そこに居た。

「まあ乗りかかった船だ。最期まで付き合ってやるよ」

黒い月を見上げながら、鴉は一つの約束をする。

辺りに光は無い。

人の営みに欠かせない光は全て、闇に落ちている。

冬木の街並みは全て、闇に沈んでいた。

繰り返される、四日限りの聖杯戦争。

言うなれば、此处は裏の世界。

世界が鴉によって拓かれしとも、この世界は未だ無限に閉ざされていた。

鴉は常に——閉ざされた世界に居る。

空は快晴、雲一つ無い。

季節は秋の半ばだが、陽射しは夏場のそれと余り変わらない。
海風が心地よく、波の静けさと同じくして平穏な冬木の港。

普段ならば、何人かの釣り客が居そうな波止場だが、今は人影が一つだけしか無い。

「……本当に腐れ縁だな、ランサー」

「おう、なんだアーチャー、オマエもか？」

影の主は槍のサーヴァント、ランサーだった。
蒼を基調としていた装束は見る影も無く、アロハな格好で釣りに臨んでいる。

「つーかオマエ、こんな天気でも黒一色かよ」

「私が黒以外を着る事は無い。どんな事が有ろうともな」

「なんだそりゃ、変な拘り持ってたんだな」

「何とでも言え」

ランサーの横で釣竿を手にしたアーチャーが糸を垂らした。
戦事なら兎も角、二人は争う気が無いらしい。

「その竿、剣と同じモノか」

「ああ。糸は俺の髪の毛だな」

「……オマエも中々遅しいな」

「何時も無一文で過ごせば、嫌でも身に付く」

「しかし、餌無しとはどういつ了見た。それじゃ釣れんだろうに」

「——釣れるさ」

上げられた黒一色の竿には一匹、魚が掛かっていた。

「……外道だな」

「うるせえぞ」

大方、釣り針の近くを通りかかった魚に、無理矢理に引っ掛けたの
だろう。

そういう方法も有りと言えは有りだが、ランサーは気に喰わないよ
うだ。

「まあいいけど、よっ」

ランサーも一匹釣り上げた。

釣り針から魚を外し、横に置いたバケツへと放り込む。

「……ああ。テメエ、オレを利用するつもりだな？」

「バレたか」

いくら餌無しで釣れると言っても、魚が寄って来なければ難しい。
何気なくアーチャーはランサーの横に付いたが、それは餌に誘われ
た魚目当てだった。

「向こうで釣れ、向こうで」

「まったく、度量が狭い男だな……」

そつばやきながらも、アーチャーは波止場の反対へ移動した。

「よー、釣れてる?」

「おー、ぼちぼちってトコだなー」

何をするという理由も無く、波止場に來た士郎がランサーへ声を掛けた。

「げ。なんだそれ、節操ないな。港ってそんなに釣れるもんなのか」

「海だしな、種類が多いのはあったりまえだ」

ランサーのバケツには様々な種類の魚が一杯に入っている。

「そういや、タコも釣れたな」

「ほんとに節操ないな……」

バケツに入れる訳にもいかず、タコは放した様だ。

「ランサーが釣りしてるのは分かるけどさ、なんでアーチャーまでやってんだ？」

「オレが知るかよ、本人聞け」

アーチャーは不死者だ。それも、完全な不死者と言える。ある意味、時間が止まっている様なもの。睡眠どころか食事すら必要無い。

なのに、アーチャーが釣りをしているのが気になっただけ。

「——って、アーチャー餌は？」

「そんなもの要らん」

「いや、まあ、そうなんだろうけど」

ランサー程ではないが、アーチャーのバケツ（これも黒い）にも魚はそこそこ入っている。

「でも、なんでアーチャーも釣りしてるのさ。暇潰しか？」

「いや、小銭稼ぎだ」

「小銭って……アーチャー、金無いのか？」

「一銭たりとも。煙草も無くしちまったからな、その為だ」

「なんだ、それくらいなら出すぞ」

「たわけ、お前に施しなど受けんわ」

……常に、無一文から。

そうやって世界を巡った数は一億回。

時には万軍を率いて、王として戦った事もある男だ。
士郎に施しを受けるのは沽券に関わるのだろう。

「それじゃ買い取る。それならいいだろ」

「構わんが」

「いくらだ？」

「三百でいい。バケツごと持って行け」

「安いな……」

士郎から小銭を受け取ると、アーチャーは釣竿を消した。

「帰るのか？」

「……」

アーチャーは一度、士郎の顔を見てから視線を海へと移す。
その視線の先は、遙か彼方の水平線……それを、辿り着けない所を
見るように見つめていた。

「……俺に、還る場所など無い」

視線を落とし、アーチャーはそれだけを言い残して波止場を去って行った。

陽は既に沈み、闇が冬木の街を支配している。
光は僅かばかり。人気も少ない。

「――Limit auto Detection」

コンクリートで築かれし塔の上。
黒衣の死神は独り、街を一望できるビルの上に居た。

「Sword maker Execution・Opti
onal specify Incarnation」

虚空より剣が出現する。

その数は五本。どれも装飾がされておらず、刀身と握りしか無い。

「Hit and fire, Projection」

一本、二本、三本……順に剣が消失していった。
消失する間隔は不規則。何かが出現する瞬間に消えている。

「Reincarnation」

五本全てが消失した後、再度出現したのは二十本程。
今度は瞬く間に数を減らしていった。

「……Reincarnation。」

夜空に浮かぶ剣群——その数、百以上。
しかし、それもやはり瞬く間に数を減らしていく。

「……暇潰しにしかならんな」

死神が空を見上げる。

そこには、この世界へ死神が来た時と同じく、黒い月が在った。

「——Roll out Continuation・Storm maker Execution・Metallic storm Operation。」

遙か彼方、肉眼では見えぬ程の高さに剣軍が出現する。
その数は……既に、数えられるモノではない。

「Hit and fire, blast it。」
かってに くたばれ

そう呪詛を吐いて、死神は煙草に火を灯した。

さて、これからどうしよう。

他のサーヴァント共に喧嘩を吹っかけるのもいい。
キヤスター辺りを擲うのも面白そうだ。

そう考えを先へ巡らせて、死神は吸い込んだ紫煙を風に乗せた。

——大地へ降り注ぐ、銀の流星を瞳に映しながら。

e t h e r n o t e t h e r

地上より遙か遠く。

天上まで遙か遠く。

ここに人は居ない。
神の棲む家は訪れる者も無く、
打ち捨てられていた。

ここに人影は無い。
死を宣告し続ける、
孤独な悪魔が居るだけだ。

彼の存在は常に虚ろ。
彼の存在は常に消えゆく運命。

何処にでも居て、何処にも居ないカレと存在を同じくする、
ただ虚ろでしかない翼の一端。
ヒトカケラ

悪魔は扉を潜る。

その身を黒く、天の光が焼き焦がす。

ダレも居ない、無人の礼拝堂。

そこには一つ、白い影が在るだけだ。

白い影は慈愛の調べを紡ぎ続ける。

訪れた悪魔に気を向ける事も無く、自らの務めを続けていた。

悪魔が白い影へと近付いて行く。

音を立てず、声も発さず。

悪魔は影に一番近い席へと座り、その慈愛の調べに身を委ねた。

天を仰ぎ、目を瞑る。

運命を共にした者達を、遥か遠くに置き去りにした懐かしき日々を
想いながら。

演奏が終わると共に、調べを紡ぎ続けたパイプオルガンは虚空へと
還った。

元より、それは白い影が持ち込んだ物。ここには存在すらしていな
い。

「——カレン」

悪魔が発した言葉に、白い影は現し世に影を落とした。

その姿はカソックに身を包む、銀髪の少女。

一人の修道女が彼の呼び掛けに応え、振り返った。

「……何時からそこに？」

少女は演奏の間、訪れた者に気付いていなかったようだ。

「その問いは意味が無い。別の事を聞きな」

当てが外れたのか、彼は溜息を付いて少女の問いをはぐらかした。

「では、私の名を知る貴方は何者ですか」

「今はアーチャーと呼ばれている。が、それは正しくないな。俺は誰でも無い、誰かだ」

「答えになっていません。真面目に答えてください」

「そう言われても……俺に、名は無いんだ」

彼も本当は答えたいのだろう。

しかし、彼には名が無い。少女に名乗る事が出来ず困っている。

「——そうだな、俺を指す呼び名はある。」

俺は告死天。^{サリエル}キミタチにそう呼ばれている者だ」

「……天使さま？」

「全てを殺した者でも、そう呼べるのなら」

用は済んだと言わんばかりに、彼は席を立て少女の横を抜ける。

「待ちなさい」

「今日は挨拶に来ただけだ。どうせ時間は腐るほどある」

「ですが、いえ、一つだけ聞かせてください」

扉の前で足を止め、彼は少女に振り返った。

「貴方を、何と呼べば？」

挨拶に来たと彼は言った。

だが、彼は結局のところ名乗っていない。

少女が彼に、一方的に名を知られているだけだ。これでは挨拶としては不十分だろう。

そんな少女の問い掛けに、彼は笑みを浮かべた。

……そう、彼がここに訪れた目的は自身の存在証明。

彼は”自身”を知っている者を求めに来たのだ。

「イーザー。君はそう呼べ」

そう言うとき扉に手を掛ける事も無く、彼は姿を掻き消した。

ここにはもう、誰も居ない……最初から、何も無い。
瓦礫に塗れる廃墟には白い影が一つ、残っているだけだ。

「——素直に言えればいいのに」

何処にでも居て、何処にも居ないカレと存在を同じくする、ただ虚
ろでしかない影が呟いた。

ここは良き夢の世界。

——悪しき夢の世界。

終わりは遙か遠くに。

——夢は巡り続ける。

angler angler

空は快晴、雲一つ無い。

季節は秋の半ばだが、陽射しは夏場のそれと余り変わらない。
海風が心地よく、波の静けさと同じくして平穏な冬木の港。

普段ならば何人かの釣り客が居そうな波止場にはしかし、今は人影が一つだけしか無い。

「——なんだ、アーチャー。また小遣い稼ぎか？」

アロハなランサーが人影の主になを掛ける。

「いや、する事が無くてな。今日は暇潰しだ」

と、相変わらず黒服なアーチャーが答えた。

釣る気が無いのか、彼の近くにはバケツが置かれて居ない。
これなら利用される事も無いだろうと、ランサーは横に腰を据えた。

「オマエな、少しは趣味を持ったらどうだ」

「今日び金の掛かる趣味ばかりしか無いだろう。稼いでまでする

気は起きんよ」

狩りが出来れば稼ぐ気も起きるんだがな、と言いながら懷から煙草を取り出す。

「吸うか？」

「おう、貰つとく……って、一本しかねえじゃねえか。いいの？」

「包みは返してくれ」

変な要求にランサーは首を傾げた。

言つ通りに最後の一本を取り出して、アーチャーへ空となった包みを渡す。

「Reincarnation」

…… たつた一言。

”再現”の式によって、空となっていた包みは中身ごと新品と化した。

「……なんじゃそりゃ」

「見ての通り新品だが」

「いや、そつちじゃねえ……が、まあオマエにそれを言うのも今更か」

デタラメを地で行っている彼には本当に、今更な事だった。

「だけどよ、そんな事出来るなら金なんざ要らねえだろ」

「飽くまで俺が持っている物を復元しているだけだ。所有権を失えばどうしようもない」

「オマエなら、やろうとすれば出来るんじゃないか？」

「性に合わん」

……つまり、出来るらしい。

必要とすればするのもかも知れないが、アーチャーは敢えてやらないと言う。

「ほんつとに、変な拘り持ってたな」

「何とでも言え。それより、引いているぞ？」

「おっと」

アーチャーの言葉と共に、掛かった魚をランサーが釣り上げる。

「……サバか」

「サバだな」

釣り針を外して、横に置いたバケツへと放り込む。

「――」

「――」

お互い無言。

どうやら、二人とも釣りに専念したようだ。

二人が無言で釣りに勤しんでいると、何をするという理由も無く、士郎が今日も波止場に来た。

「よー、釣れてる？」

「おー、ぼちぼちってトコだなー。今日はやたらサバが掛かるが」

ランサーのそばにあるバケツには本当に、サバばかり大量に入っていた。

「アーチャーは？」

「こっちはオケラだ」

アーチャーが釣竿を上げる。

その先に本来、付いていなければならない釣り餌が無いのに士郎が気付いた。

「もしかして、釣る気ナシ？」

「ああ、今日は暇潰しでな。餌無しでも釣れるが」

出鱈目さに耐性が出来ているのだろうか、餌無しでも釣れると豪語された士郎は気に止めなかった。

「アンタらが大人しくしてる分には安心だけどさ、釣りってそんな楽しいモノなのか？」

「当たりは無くとも、俺は波と風を感じているだけで十分だ」

アーチャーは釣りという行為を楽しむのではなく、釣りをしている状況を楽しんでいるらしい。

「オレも似たようなもんだな。竿と糸で海の様子を見んのが楽しいんだよ」

釣りに関しては似た者同士。

争いも無く、二人がここに居るのは自然なのだろう。

「まあオレの場合は楽しさを伴った鍛錬ってトコだ。こと釣りに関しちゃうサーヴァント中最強の自負があるね」

「ほう？　俺を差し置いて最強と宣いやがったな？」

……しかし、勝負事となれば話は別らしい。

「いいだろう、その自負とやらを押し折ってやる」

「ヤル気か？　いいぜ、付き合ってやるよ」

くっくくく、と二人が笑い合う。

気のせいか、快晴だった空には時化が近付いているような雲が出てきていた。

「……まあ、二人とも程ほどにな」

しかし、士郎の言葉は既に届いていない。

「Limit auto Detection. Hit an

「あつ、
テメエきたねえぞ！」

[illegible]

ここに弓兵はもう居ない。

居るのは息継ぎもせずに高らかに笑い続ける、釣りの神。

釣り針を海中へ沈めると同時に魚を釣り上げる、アングラーだ。

負けじとランサーが釣り上げるが、数秒おきに釣り上げられてしまえば、追いつかれるのも大して時間は掛からないだろう。

「よう、ブービーのろま。釣果の備蓄は十分か？」

「ふざけんなコンチクショウ！」

空は曇天。波は高く、風もやや強い。

荒れ狂う嵐の如く釣り上げ続ける、元弓兵の高笑いが辺りに響き渡っている。

もはや、ここには平穩も存在しない。

きつと、さつきまで平穩だったのは奇跡だったのだ。

ランサーは兎も角、大時化になってもあのバカ鴉は戦闘続行しそうだなと思いつつ、士郎はその場を後にした。

s o m e t h i n g a n y t h i n g n o t h i n g n o t h i n g

季節外れの夕立が冬木の街並を巡る。

予報は大外れだった。

外に居た者達は傘を持っておらず、濡れネズミとなって雨宿りに駆けた。

急用が無い者はそのまま雨宿りと洒落込み、有る者は足をずぶ濡れにしてまで駆け抜けただろう。

まるで台風のような嵐。

だが、夕立は夕立だ。日が没した後も降り注ぐ事は無い。

今、満天の星空が開けているから夕立と言えるのだから。

雨に濡れた冬木の街を、一人の女が歩いている。

シヨートの赤毛にバーガンディ……ワインレッドに連なる色のスーツに身を包む、男装の麗人だ。

きつと、その身に纏う規律めいた雰囲気のせいなのだろう。

美人と言える彼女に、声を掛けようとする男は一人も居なかった。

しかしそれは、彼女にとっては何時もの事。むしろソレ目当てで纏わり付こうものなら、彼女は鉄拳をもって応じるかも知れない。

彼女の名はバゼット・フラガ・マクレミッツ。

ルーン魔術に長けるフラガの出身であり、硬化のルーンを拳や足に刻んで格闘戦を行う生粋の武闘派だ。

何人たりとも封印……時には戦闘の末、対象の殺害も辞さない魔術協会の執行者に名を連ねている事から、その腕の高さは窺い知れるだろう。

要するに、決して喧嘩を売ってはいけない人間の一人である。

ビルが屹立している新都から川に掛かる冬木大橋を渡り、深川町の住宅街へと足を向けた。

そこはベッドタウン。夜が更ければ住人たちの寢所となる町。

しかし、今は眠るには些か早い時刻。家並には明かりが有る筈なのだが——全て、闇に沈んでいる。

「すげえな、まだ残っていやがったか」

バゼットが変哲の無い民家の前に差掛かると、彼女の隣で”影”が呟いた。

感嘆するには至らない普通の家。他と違ふところを言えば、明かり

が灯っている事ぐらいだろう。

「アンタはそこにいろ。まだ本調子じゃないんだろ？」

”影”が独りで歩き出す。

その主は”影”を咎めようとして……何故か、立ち尽くした。

”影”は玄関を抜け、鼻歌交じりに明かりのある部屋を目指す。
目当ては人間。生きている人間。

闇に沈む町に、生き残っている人間。

救おう、なんて気は”影”には全く無い。

手にしている凶器エモノは殺す為にだけ存在し、護る事は天地が引つ繰り
返らない限り、有り得ない。

”影”が辿り着いた所は、一言で言えば惨状そのものだった。

一家団欒の場で在ったであろう、未だに明かりが灯っている居間は
血糊が飛び散っており、両断された死体が五つ在る。

性別も年齢も関係なく、抵抗する事も逃げる事も許さず、全員が一
刀の下に斬り殺されていた。

「——なにそれ」

ここには既に、生きている人間は一人も居ない。
獲物を横取りにされ、”影”はこの上なく落胆した。

「Y o b o o b y——遅かったな、待っていたぞ？」

声と共に、この惨状を起こした下手人が姿を現した。
装いは黒一色。その右手には一振りの剣。

「うげ、マジかよ」

思わず”影”が悪態を零す。

下手人は”影”の天敵である、告死の悪魔。

何人たりとも殺せない”影”を、永久に殺し続ける”影”の鏡。
幾度と殺され、何度と数える事すら出来ない程に対峙した相手だ。

つまりは、悪魔が仕掛けた罠だった。

”影”は餌に誘われて、自ら死地へと踏み込んでいたのだ。

「そんな嫌そうにするなよ、兄弟」

悪魔が笑った。

その笑みは本当に、ずっと会えなかった兄弟に出会ったかの様に、
親愛が垣間見える。

「オマエな、何度デメエに殺されたと思ってやがる」

「俺が知るか。大体、オレタチには関係無い話だろう?」

悪魔は愉快そうに笑っている。

共に無限を生きる存在。時限を超え、次元をも超えて殺し合う定め
の存在。

故に、カレらにとって回数と言う概念は無意味でしかない。

存在が発生した時点で、ソレは無限という概念に属している。

「——なんて、事を」

”影”に遅れて、主が屠殺場と化した居間を目にした。

泣き別れになった肉のカタマリが大小、十体。

床は血塗れ。壁には血飛沫。その飛沫は天井のあちらこちらにも着いている。

常人では直視出来ず、場慣れした者でも思わず足が竦むだろう。

屠殺場と化した、一家団欒の場。

それを前にしても、彼女は己の我を保っている。

「わりい。家主がお疲れの様でな、持て成す事が出来ん」

血の匂いに満たされている部屋で、そんな悪趣味な冗談を悪魔が口にした。

悪びれた様子は一切無い。殺戮を犯した事を何とも思っていない様だ。

「——」

悪魔からは敵意も殺気も感じられない。しかし、バゼットは悪魔を”敵”と定めた。

——奴は、人間全ての敵だ。

「マスター、やめとけ。アイツは殺せないぜ」

バゼットの戦気を察した”影”が制止する。

現象である悪魔には、死という概念が存在しない。殺す事も、滅する事も出来ない。

命を賭けようが、その戦いは無駄に終わるだろう。

残されている手は封印のみ。だが、この悪魔に対してはそれすらも許されない。

打つ手無し。

挑んだ者は等しく、死を迎える。

「おう、気を損ねたか？ 仕方ないな、俺が出来る限りの最高な持て成しをしてやろう」

血に塗れた剣を振り、床に新たな血痕が作られた。

悪魔の構えは無形の位。予兆も無く、必殺の一閃を繰り出す凶悪なモノだ。

「……何故、殺した」

「何故？ アンタらを歓迎する為だ。第三者の目は気になるだろう？」

”オマエタチの為に、コロシタ”

……やはり、悪魔は笑っている。

あまりの不愉快さに、バゼットは吐き気を覚えた。

「オマエは、人を殺す事が」

「楽しくねえよ」

——その言葉と共に、部屋の空気が凍りついた。

笑みを浮かべていた悪魔の表情は一転し、冷徹な殺戮者のそれと化している。

場に満たされるは血の匂いをも忘れる程の、凍えるような死の匂い。

「——挨拶で済ませる心算だったが」

無形で構えられていた剣の刃が左手に納められる。
その姿は居合いの道を行く者の構え。抜刀と同時に切り殺す、瞬速の斬撃術のソレと同じだ。

「気が変わった。死んで来い」

死の宣告と共に微風が奔った。

しかし、剣の刃は未だに左手に納められている。

「まったく、言わんこっちゃ無い」

バゼットが感じたのは微風だけ。

悪魔は抜刀の構えを解き、無形へと戻った。

「……………?」

首に何かが伝う。

不思議に思い、バゼットはソレを手で——

理解、出来ない。

何故、自分は、セカイを逆さまに見たのか。

何故、自分は、自分の足を見ているのか。

何故、自分は、自分の足元に居るのか。

——ああ、そうか。

理解した。

自分は、首を撥ねられたのか。

「容赦ねーよなあ、オマエも」

主を失っても、”影”は何も思っていないらしい。
死した彼女に目もくれず、彼女を殺した悪魔に呆れているだけだ。

「死人に掛ける慈悲は持ち合わせておらん。それで、貴様はどうする」

「あー、まあ、それでもサーヴァントだからな。マスターの敵討ちでもしてみるか」

奇跡が起ころうとも、敵わぬ仇敵を前に”影”が構える。

「じゃあ死んで来い」

応じる事すらも出来ず、”影”の胸を剣が穿ち抜いた。

「……けっ、かつこわりい」

今際の際に悪態を吐く。
胸を穿った剣はそのまま、”影”の頭部を斬り裂いた。

”影”が消える。

ここに居るのは悪魔だけだ。

血に染まった屠殺場が消える。

最初から、ここに居たのは悪魔だけだ。

日付が変われば夢と化す。

悪魔はナニモ無い夢の狭間に独り、立っていた。

a l w a y s r e m e m b e r (前書き)

一言で言えば、リムーブカース。

a l w a y s r e m e m b e r

暁に臨んで一人、鴉は瞳を閉じて風の歌を耳にしていた。

空に双月は無い。この星の月も既に沈んでいる。
星達の輝きも、在りし日の記憶と異なっている。

しかし世界が違えども、風達の歌は同じだった。

東雲が終わり、太陽が昇る。

朝焼けに紅く染まる樹海を眼下にしながら、未だ現代に残る大自然を記憶に重ねて映す。

鴉の脳裏に浮かぶのは兆を超え、京を遥かに超える人々の姿。

一言しか交わしていない者もいれば、妻や子に等しい者もいる。

巡る度に出会った者もいれば、一度しか出会えなかった者もいる。
死して尚、鴉と共に在った者もいる。

……その誰一人、鴉は護る事を許されなかった。

「……それが、どうした」

ヒトは二度死ぬ。

一度目は肉体の死、二度目は存在の死だ。
何も残せなかった者は世界から永遠に消滅する運命にある。

しかし、鴉は死を許されていない。

誰の記憶に残らずとも、鴉が彼等を忘れる事は無い。
鴉が死を迎えるまで、彼等は記憶の中で在り続ける。
故に彼等も、永遠に”死ぬ”事が無い。

「……………」

だが、この鴉は群れから逸れてしまった。
虚ろな翼で飛び続けられるほど、強くは創られていない。
この世界の終わりと共に堕ちゆくだろう。
名も無き鴉は—— 此处で死ぬ。

「……………今更、残したいモノなんざ無いさ」

ただ、光が在ればいい。

鴉の願いはそれだけだ。そして、それはもう叶っている。

しかし、もう一つ願うとすれば——

「——アーチャー」

ダレも居ない世界に言霊が響く。

漆黒の外套を身に纏う騎士の姿と、言霊の主である少年の姿に確かな影が落ちた。

「……………」

騎士は応えず、彼方に広がる山の連なりを見つめている。

「……お前さ、夜の新都に居なかったか？」

「居たと言えば、居たな」

この”二人”は時間という枠組みに囚われていない。

時系列が意味をなさないのだ。未だ自身が経験していない時系列にも存在している。

「それがどうかしたか？」

「いや、気になっただけだ」

「……………」

会話が途切れた。

騎士には少年と話す気が無いらしい。

「そういえばさ、なんでそんな格好してるんだ？ サーヴァントに暑さは関係ないんだろうけど……」

秋と言っても、高く昇った今の陽射しは強い。

黒一色な上に長袖の外套を着ているのが気になったようだ。

「……知りたいか？」

変わらず、黒衣の騎士は彼方を見つめながら応えた。

「出来れば」

その背中を見ながら、少年が答える。

騎士は悠久に埋もれる記憶を紐解きながら、取り出した煙草に”着火”を紡いだ。

「ヒトを辞める前から黒を着ていたが、ただ他に着る気が出なかっただけだ。理由が出来たのはヒトを辞めてからだな」

時にして数千億年前。

閉ざされた世界に招かれた鴉は”事故”によって召喚され、不死者となった。

弊害で解放者の役割を知れず、万象を操る知識も封印されたままだった。

元の世界に戻る術は無かったが、元より鴉には興味が無かった。召喚者の新しい家族として、暫くは平穏な日々を過ごしていた。

「だが、戦争に巻き込まれて皆殺しにされちまってな。心臓を刺されて気を失っていた俺だけが生き残った」

木が燃える火の匂いで目を覚ますと、辺りは血の海だったという。召喚者の家族を除けば、村に住んでいたのは殆どが戦争で孤児となった子供だったが、それも全て殺されていた。

「なあ、士郎。お前ならどうする？」

「……え？」

少年が顔を上げると、一度も顔を合わせなかった黒衣の騎士は少年を見ていた。

「お前なら、どうする？」

「……………」

少年も過去に、地獄と言える災害を生き残った。

しかし、それが人の手で起こされた災害で有っても、まだ事故と言えるものだ。

経験した境遇は似ていても、答える事が出来なかった。

「俺は復讐を誓った。つまり、そういう事だ」

喪服であると同時に、自身の死に装束。

死する事は無くとも、生きる理由を捨てた鴉はそこで死んだのだ。

「今思えば、最初からそれに気付いていたのかも知れんな」

全てを殺し続ける定めを持つ、解放者。” 彼等” もまた、黒衣を纏っている。

「……辛い経験してきたんだな、アーチャー」

騎士は過ぎた事だと笑い飛ばした。

「それに、それでも序の口だ」

「それでも、序の口？」

「……一人な、女を殺した。俺も永い時を過ごしてきたが――」

頭上に浮かぶ太陽を騎士が見上げた。

眩しさの素振りも見せず、その瞳に光を映している。

「――泣いたのは、その時だけだな」

数多の命を看取り、数多の命を狩るうとも、それだけは耐えられなかったという。

「大事な人だったんだな」

「殺しちまった以上は仕方無い。どうにも出来んさ」

「……聖杯で、その人を生き返らそうって思わないのか？」

「それが可能ならな。アイツの場合は魔法だろうが無理だ」

例えるなら、”座”にいる英霊本体の消滅だろうか。

本来ならば存在する可能性がある限り登録され、登録されれば消滅する事も有り得ない存在だ。

しかし、その様なモノが在ったという結果だけ残して、可能性自体

から消滅してしまっているらしい。

「今じゃアイツの名前すら思い出せん。おまけに形見も無くしまった」

「……そうか」

「まあ今の俺には必要無いモノだ。それに■■■■■■■■■■か
ら問題は無い」

「ならいいけど……ああ、そうだ。そろそろ家に戻らないと」

「おう、”またな”」

「ああ、”またな”」

去っていく少年の背を見送り、騎士は再び山の連なりを瞳に映した。

「——we shall voided」.

間も無く日没。

眼下に広がる樹海は紅く染まっている。

騎士の刻は終わった。死神の刻が始まる。

s p e a r o f g r i m r e a p e r (前書き)

ドイツ語？ もちろん、
てけとーだぜ！！

s
p
e
a
r

o
f

g
r
i
m

r
e
a
p
e
r

其は避ける事能わず。

その運命から逃れうる者は一人も居ない。

其は防ぐ事能わず。

その運命に抗える者は一人も居ない。

其は見る事能わず。

その槍は既に、汝の身を穿ち抜いている。

冬木の地を二分にする川に掛かる、冬木大橋へ差し掛かる三つの人影が在った。

夜更けとはいえ、今の時間なら車道を自動車が行きかかって可笑しくないのだが、閑散としている。

「——あの時も、こんな感じだったな」

訪れた静寂に、士郎は半年前の光景を重ねていた。

「黒いのが一人も居ないけどね」

当時と異なる点はそれだけだ。

黒衣の騎士と、漆黒の外套を鎧の上に纏った騎士の姿が無い。

「凜、私まで黒いの呼ばわりしないで頂きたい」

セイバーが外套を纏っていたのは飽くまでも、自身の鎧を人目から隠す為。

一年を通して黒以外を着ないという、彼と一緒にして欲しくないらしい。

「それに、シロウもシロウです。あの時は変装が必要だったとは言え、アレは如何かと。」

丈は合っていませんでしたが、暗闇に溶け込めるという点でアーチャーの外套の方がマシというものだ」

「……セイバー、そこまで嫌だったのか。アレ」

「雨も降っていない上に、黄色の合羽では逆に目立ちます。変装の意味を成していません」

闇夜を彷徨う、まっ黄色。

その正体は雨天で無いのにも関わらず、合羽を着ている少女だ。怪しい事この上無い。

「雨が降っていれば、私も吝かでは有りませんでした」

「あ、じゃあ今度雨の日にでも着て見せて。結構セイバーに似合
うんじゃないかって思ってたのよ」

そんな主の言葉に一瞬、セイバーが硬直する。

普段は傘を使っているのだ。敢えて合羽を着る理由が無い。

「……凜？　もしかして、楽しんでいませんか？」

「ええ、楽しみにしてるわよ？　セイバー」

墓穴を掘ったと、セイバーの顔に影が差した。

そんな従者の様子を見て、凜が含み笑いをしている。

「……しかし」

「なによ、嫌なの？」

「どちらかと言えば、嫌です。これでは見世物だ」

セイバー自身は着飾るのが嫌いという訳でもないが、流石に合羽を着るというのは抵抗が大きい様だ。

「貴女って私が居ると何時も羽目を外さないじゃない。私にはそういう姿、見せてくれないの？」

「……………」

主の要望に応じるか、騎士としての体面を貫くか。そんな板挟みに陥ってセイバーは答えられないでいる。

「別に、雨の日じゃなくてもいいんじゃないか？」

「それもそうね……………それじゃセイバー、明日一日、合羽姿でお願いね」

「凜！？ 話が違います！！」

唱えられた異議に、強権を持つ議長は決まった事だと棄却した。

「……………あんまりだ」

横暴此処に至れり。

しかし、セイバーはそれを覆す事が出来なかった。身から出た錆には剣の英霊も敵わないらしい。

「あの外套も袖を捲ってたり、裾を引き摺ってたりだったな。

二人の背丈が違うって言うっても、あんなにぶかぶかだとは思わなかった」

「あれじゃ変装してる英霊って言うより、背伸びしてる女の子よね。思わず可愛いって言いそうになったわ」

「ああ、俺もそれは思った」

「……………」

抗議の声も上げず、セイバーは二人の後ろを無言で歩いている。これ以上は墓穴を掘りたくないのだろう。

「そういえば、何でアイツまでここに居るのかしら」

「復活した聖杯が関係しているのでは？」

急に、凜が立ち止まった。

釣られて二人も立ち止まるが、歩みを止めた理由が分からず怪訝に窺っている。

「……セイバー？ 何故、そう思うの？」

「何故も何も、彼はサーヴァントです。聖杯によって呼ばれたとしか考えられません」

何時の間にか再開していた聖杯戦争に、再度現界したサーヴァント達。

セイバーは彼等と違って最初から現界していたが、アーチャーも彼等と同じく召喚されたのだろうと答えた。

「確かにサーヴァント染みてたけど、アイツはサーヴァントじゃないわよ？」

「凜？ 彼は貴女に召喚されたのでしょうか？」

アーチャーの正体を覚えている者と、憶えていない者が話が噛み合っていない事に二人は気付いていない。

「そうだけど、今は聖杯を使っても召喚出来ない筈なの。」 何処にも”居ないんだから”

不死不滅が故に、英霊の”座”には存在し得ない。別の存在として生きている現在では、彼は存在自体が消滅しているに等しい。

「しかし、現にアーチャーも現界しています。やはり聖杯が関係しているとしたら」

「……いいわ、召喚出来たしましょう。」

じゃあ何で現界してられるの？ アイツは誰とも契約出来ないのよ？」

現界しても存在不可能。故に有り得ぬ存在。それでも存在しているという矛盾が発生している。

「そうか、アイツもニセモノなんだな」

「……偽者？」

「てつきりホンモノかと思ってたけど、有り得ないんだろ？ だったら、ニセモノじゃないか」

つまりは同一の存在でない、よく似たナニカだ。異なる存在故に、存在している。

「……偽者……聖杯……コピー……？　なら、アイツは――」

死人の雄叫びが冬木の街に響き渡っている。

地獄と化した新都を、死人達の合唱が響き渡っている。

死人が謡うは死の賛歌。全てを殺せと歌っている。

そんな謡を耳にしながら、死神は塔の上から河に掛かる橋だけを監視していた。

彼の役割は死者の霊を狩る事。しかし、今夜は狩ろうとする素振りを少しも見せていない。

本来ならば彼には有り得ない事。だが、今夜だけは例外だ。

死神の瞳には現世と地獄を隔てる、冥府の河を渡ろうとする生者の姿が映っている。

「……三人、か」

一組の主従と、半死人の騎士。一筋縄には追いつけない布陣だった。"彼"自身は経験していないが、"彼"が有り得る可能性を淘汰した結果なのだろう。

「Six - one - six gunner product ion」

生者を見下ろす死神の左手に、無から"製造"された銀弓が握られた。

……いや、それを弓と呼ぶには些か大き過ぎる。

全長五メートルを超え、その直径は人間の腕ほど。言うなれば巨人の弓だ。

人間一人の力では引く事も叶わない、バリスト弩砲と呼べる代物を手にしている。

その弩砲に番えられるのは"彼自身"と言える、無名の直剣。故に番える事に動作を必要とせず、必要とされるのは弦を引く時間のみ。

そして番えられる"矢"は常に、空間を無視して達する不可避の"槍"だ。狙われた時点で、死が確定する。

「……Defy or die」

「……………!?!」

言い知れぬ、違和感が奔った。

絶望的な状況下であろうとも、幾度も助けられた自身の直感が警鐘を鳴らしている。

しかし、辺りには敵と成りうる気配はおろか、危険を感じるようなモノすら無い。

「……………まさか」

その違和感と同じモノを以前、感じた事が有った。

漆黒の剣が死角から放たれた、あの時と同じ感触。

黒衣の騎士と初めて対峙した、あの夜と同じ違和感。

脳裏に浮かぶのは、何者も通さぬという決意を纏った戦神の姿だ。

「シロウ、凜——」

「——セイバー、あと五秒で来るぞ」

「……………シロウ? 何故」

「話は後にしよう。時間が無い」

「Projection」

死を宣告すると共に、死神の指から弦が離された。

弩砲の莫大な反発力によって、”矢”の切っ先が瞬時に音速を超える。

静寂を切り裂き、闇夜に砲声が轟く。

衝撃波がビル街を蹂躪したが、ソナモノは些細な事。

本命は戦車砲を遙かに超える力で撃ち出される徹甲弾だ。

最高点まで加速した弾体は一旦”この世から消失”し、現ゆる障害を無視して標的へ到達する。

発射されてしまえば、打つ手は無いだろう。

……まったく。

投げられるだけでも厄介だったのに、アンナモノまで持っていやがったか。

「トレース
同調、開始」

端から耐えきれるとは思っていないが、強化でもしなけりや余波だけで木端微塵だ。

”槍”自体はセイバーに何とかして貰うしかない。

「きゃっ——ちよつと、シロウ!？」

「いいから、伏せてろ」

状況を知れない、遠坂マサキの体を歩道に押し倒して爆撃に備える。
それで察してくれたのか、彼女も自身の体に防備を施した。

「——っ!？」

セイバーがナニモ無い場所を目掛けて剣を振り上げた。
直後、出現した”槍”と接触。辺りを爆風が駆け巡る。

「……っ……容赦、ねえよな……ホント」

右足が吹き飛ばされた。

左足も辛うじて原型を留めているだけだ。体のそこかしこで悲鳴
が上がっている。

…… たったの一撃で、これだ。

至近弾を喰らったセイバーの姿が見えない。多分、足場が崩壊した
から上に有る車道へ跳んだのだろう。

オレと一緒に吹き飛ばされてしまった遠坂マスタの方も傷だらけだが、見
たところ重傷は無い。

…… 衝撃でやられたのか、昏倒している。間に合ってくれば良い
が。

二撃目。

上の方で轟音が鳴り響くと同時に、橋全体が大きく揺れた。セイバーが耐えられても、橋が持たないかもしれない。橋が落ちてしまえば今回も負けになってしまう。

「——ぐっ……あ……っ!!」

……コイツの体は便利だ。魔力の使い方次第で無理矢理に修復出来る。

尋常じゃなく痛むだろうが、まあ、それは我慢して貰おう。
左足の修復から吹き飛んだ右足に集中した。

三撃目——不味い。

橋が軋みを上げ始めた。持ってあと一撃……これじゃ間に合わない。

「^{エクス}約束された——」

セイバーが宝具を解放しようとしている。だが、それは悪手というモノ。

あんな遠目でも目立つモノ、威力無視で速射されて放つ前に潰されるだけだ。

案の定、車道の方で巻き起こっていた魔力の奔流が霧散した。
やはりセイバーの宝具だけでは突破出来ない。

「おい、起きろ。お前が頼りなんだよ」

^{マスター}遠坂を揺す振り起こすが、反応が無い。こりゃ時間を稼がないと終

わるな。

「トレース オン　ロール アウト　バレット クリア
投影開始。工程破棄、装填待機」

工程を幾つもすっ飛ばして、無作為に抽出した設計図を十ほど乗せた。

アイツの砲撃と比べれば威力も速さも雲泥の差が有るが、気を散らせる程度にはなる。

「フリーズ アウト　ソードパレル フルオープン
停止解凍、全投影連続写層」

投影次第、片っ端から射出する。

照準は必要ない。ただ、ばら撒ければいい。

アイツの欠点は視界を遮られると再認が難しくなる事だ。 ” 煙幕 ”
を張れば一時的に砲撃も止む。

「ブローケン・アロー
壊れし幻影………！！」

形だけ誤魔化した宝具を全て破碎した。

十秒もすれば視界も晴れるが、これでアイツからはこちらが見えない。

「セイバー！！　あのバカぶつ潰せ！！！！」

如何にアイツの ” 槍 ” が必中でも、セイバーなら回避出来る。

おまけに今は正確な座標が掴めない。今度は宝具の解放を阻止出来ないだろう。

「———エクス
約束された」

だが、これで倒せるなんて思っちゃいない。

アイツは一言謡う間があれば瞬時に転移出来る。遠距離戦じゃ如何にもならない。

「勝利の剣——！！！！」
カリバー

光の斬撃が砲座へと放たれた。

寸分の狂いも無く、砲手の居たビルが薙ぎ払われ、崩壊する。

——甘く、見過ぎたか。

刹那に四度、背後に破砕音が聞こえた。

その内の一つは、この体の脇腹を抉った”槍”のモノだ。
抜かれた衝撃で飛ばされ、手摺に頭を強打してしまった。思うように体を動かせない。

「……クソツタレ」

魔力が足りない。腹に明いた穴を修復するだけで一杯だ。
どうやら今回もアイツに敗北するらしい。

……それでも駄目か。

アイツが手加減してくれる程度はこれで限界だ。

他のサーヴァントに協力を頼んでみたりはしたが、二騎以上は剣の雨を降らされて手も足も出せなかった。

セイバー以外は単騎だと、投擲だけでくたばっちまう。

「まったく……誰だ、あんなの呼んだ奴は」

まったく馬鹿げている。あんなバケモノ、オレにどうしろと――

「――悪かったわね。あんなの呼んじゃって」

……風向きが変わった。

オレの横に、しっかりとした足取りで遠坂が立っている。^{マスター}

「はっ、寝坊助。目は覚めたか？」

「お陰様だね。手酷くやられたみたいだけど、状況は？」

「敵はアーチャーだ。オレ達に橋を渡らせたくないらしい」

ラスト、四撃目。

橋の軋みはかなり大きくなっているが、大丈夫だ。

セイバーを”跳ばせる”ぐらいは余裕が残っている。

「……そう。それじゃ、何が何でも渡らせて貰おうかしら」

ヤツが遠坂^{カノジヨ}に立ち塞がったのは、これで二度目だ。

想う所が有るのか、反骨とも言える闘志^{たぎ}を滾らせている。

「Anfang・Vertrag……Einnener

egeln.

遠距離戦で話にならないのなら、接近戦に持ち込めばいい。
オレとセイバーだけじゃ無理な話だが、令呪マスターさえ在れば如何にでも出来る。

「Folge ihm bitte. Ich besiege
ihn……!!」

紅クインの女王と蒼ナイトの騎士——駒が、ようやく揃った。

風が咆哮を上げている。

冥府の橋に、風の王が現界している。

如何に必中と言えど、風を纏う彼女に”槍”は通じない。

”跳躍”されてしまえば、こちらへ到達するまで一秒と掛からないだろう。

阻止する手はマスターの射殺のみ。しかし、それだけは禁則されている。

……詰んだか。

セイバーが相手では如何に貫通力に突出しようとも、一射だけでは外される。

二射、三射と放つ余裕も残されていない。威力を押さえた速射など

一考にも働かない。

万策必至。挽回する手は残されていない。

——それが、どうした。

射ち落とせずして、何が弓兵か……！！！！

「Thousand Junction, Projection……！！！！」

散弾装填、全力射撃。

最後の足掻きを放つと同時に、セイバーが跳躍する。

境界投入、散弾展開。

四千の距離を無視し、最短の弾道を黄光の矢が奔る。

境界突破、蹂躞制圧。

回避機動範囲、全てに”槍”を配置した。

半数は外れ、残りも半数は傷すら負わせられないだろう。
だが、十重二十重に展開した散弾は無傷で通る事を許さない。

互いに超音速。

ならば、散弾に撃墜されるのが道理——それも、突破された。速度は落とせたが、再度迎撃する時間までは無い。

……興に乗ったとは言え、俺も馬鹿な事をしたものだ。

「——クソッタルdamn it」

……風が哭ないている。

歓声を上げながらも、従うべき者を失う事に悲しみの声を上げている。

互いに風に連なる者。対峙すれば、その格の差が明確に出る。

「……アーチャー。まだ、続けますか？」

仰向けに倒れた俺の首に、剣が差されている。

少しでも敵意を見せれば、剣は容赦無く俺を穿ち抜くだろう。

「……いや、終わりにしよう。弓兵として臨んだからな、貴様に倒された俺の負けでいい」

倒した者と、倒された者。

その片方には既に、戦いを続けられる程の余力は残されていない。

解かれた彼女の髪を、風が撫でた。

今夜はよく晴れている。月光に照らされて、風に舞う金糸も綺麗に見える。

……戦場で無ければ、それを褒める言葉も口に出来たのだが。

彼女の体に傷の無い部位は無い。

鎧には罅が奔り、蒼の衣も見る影が無くなっている。

あの弾幕を突破しきるには風の護りが不足していたらしい。

「……では…私、の…」

勝ち名乗りを謳いきれず、意識を失ったセイバーが前のめりに倒れてきた。

彼女が顔を地に付けぬよう、襟元に手を当てて支え、横に転がした。

……流石に、最後の一刀は堪えた。

体内に剣を具現するのが遅れていれば、両断されていただろう。

折られなかったとはいえ、衝撃だけで死ねた一撃だった。

自身に”蘇生”を行使するのは初めての事だったが、上手く発動したようだ。

「……また、ガキに殺されちまったなあ」

凜とした騎士の姿は既に無く、安らかに寝息を立てるただの少女が居るだけだ。

互いに歳概念は失くしたが、こちらは重ねた年期が違う。そんな横顔を見せられて思わず自嘲してしまった。

——さて、余興は終わりだ。本業に戻ろう。

「Limit auto Detection .」

月食が始まった。このままでは境界にいるヤツが”影”に喰われる。

「Roll out Continuation . Swor
d maker Execution . Metallic st
orm Operation .」

ヤツは橋を越えた。ならば報酬を出すでしょう。

「Hit and fire , Projection」

受け取れ、”兄弟”。

繰り返す事数十廻。行く手を阻んでいた弓兵に勝利した。

”彼”自身には無意味な事でも、他の”彼”には価値が有る。

要は結果さえ出せばいいのだ。今夜の勝利によって、”彼等”は夜の新都を巡る事が出来るようになる。

……しかし、”彼”は此処で消える運命に在った。

弓兵が橋を封鎖していたのは、月食によって新都に現界する”死者”に迷い込んだ者を殺させない為だ。

月食の刻となり、現世と切り離された今は何処にも逃げ場が存在しない。

生き残る手は、ただ一つ。

月食が終わるまで、甦り続ける”死者”に殺されないよう戦い続けるだけだ。

「こればかりは、どうにもならねえな……」

勝利を得たとはいえ、”彼”に生き抜ける程の余力は無い。

相方には余力が残っているが、相手の数が数だ。生き残るのは難しい。

「……アレ、何？」

橋の先には既に数千、”死者”の姿が在る。
数分もすれば、その数は万を軽く超えるだろう。

「ありやあ”オレ”だよ、お嬢さん。殺しても死なない”オレ”
の残骸、死んだ”オレ”の成れの果てだ」

「……そんな気はしてたけど。やっぱり貴方、士郎じゃないのね」

「そういうこつた。まあそれは置いて、今は連中をどうする
かなんだが」

「流石に、ちよつと数が多いわね……」

各個の力が微々たる物とはいえ、襲い来るのは無限の群勢だ。二人
きりでは敵わないのが目に見えている。

それを『ちよつと』で済ます彼女の豪快さが、今は頼もしい。

しかし、彼女が十や二十を軽く殲滅出来る火力を持つてはいても、
数度で打ち止めとなる。

打ち止めとなれば最期、数の暴力によって蹂躪されてしまう。

「勝ち目なんざねえが、逃げる事も出来やしねえ。けど、あんた
は別だ。」

連中は”オレ”だけを狙つて来る。あんたが手を出さなければ
連中も手を出さない。ここらで退く事を勧めるよ」

「そうね……貴方に借りが有るって訳でもないし、協力してあげ
るのはここまで。」

って言いたいけど、あんなの目にして退いたとなれば管理者の名が廃るってもの」

彼女も敵わない事は分かりきっている。だが、退く事は彼女の矜持が許さなかった。

「それに、偽者でも士郎が死ぬ所なんて見たくないわ」

「物好きだね、あんたも。まあ危なくなったら逃げていいぜ。運が良けりや助かる」

「ご忠告どうも。それじゃ、派手に行くわよ？」

彼女の手にはルビーが一つ。膨大な魔力が込められた炎の塊だ。射程に入り次第、その炎で薙ぎ払うつもりなのだろう。

「Der Riese, das brennt——」

それは閃光となり、圧倒的な熱量を以って群勢を焼き尽くす。

「——ああ、クソッ……」

二人は失念していた。

ヒトは前後左右、二次元的な範囲ならば把握し易い……が、頭上となれば別だ。

視覚、聴覚の範囲外。故に、橋の支柱から飛び降りた”影”に気付くのが遅れてしまった。

”影”の標的は、”彼”の目の前に立つ少女。無防備な彼女を獣の如き凶爪が襲いかかった。

「させるかよっ——！！」

咄嗟に両手へ”爪”を投影し、片方を投擲。
胴体へ命中はしたが、”影”を消滅させるには至らない。

「っ……このっ——！」

少女の至近に落ちた”影”の頭部へ魔弾が撃ち込まれた。
だが、”影”にとって頭は飾りでしか無い。首から上を消し飛ばされても動く事が出来る。

「ちよつと！？ 何よコイツ、死なない！？」

「バカがつ！？ コイツより向こうを——」

——それに、気付いてさえいれば。

橋の先には相も変わらず、数多の群勢……それは、まだいい。
頭上の支柱にも無数の”影”が居る事に、もう少し早く気付いていれば。

「……悪い、どうしようもねえや」

「……ドジったわね、まったく」

最期の足掻きと言わんばかりに、夜天へ向かって閃光が放たれた。
それは面に向かって点を穿つ行為だ。幾ら威力が有ろうとも、効果は薄い。

「あいつらに殺されるのも癪だし、いつそ自爆しちゃおうかしら」

「はっ、面白え。連中もろとも派手に散るか？」

今際の際に瀕し、二人は冗談を交した。

間近に迫る死を覚悟していても、その瞳には未だに戦意が灯っている。

「……ん。もう出し惜しみは無し。こうなったらここで……全部ばら撒いてやる——！！」

宝石を握り締め、呪も紡がずに内包している魔力を解き放つ——
直前、

「——え？」

彼女の目の前に、剣が突き刺さっていた。

「……コレって、もしかして」

「もしも何も……あの野郎、あれ喰らって生きてやがったのか」

何の装飾もない、何処にでも有りそうな長剣。
それは、死神の分身とも言える剣だった。

「——ああ、やべえ。降って来る」

「降って来るって……ああっ!？」

”彼”と同じく、彼女も以前、それを経験した事が有った。
行く手を阻まれた彼女の道を拓く。それだけの為に降り注いだ――
鋼の豪雨。

「嘘でしょ――！？」

そんな彼女の叫びは、数え切れない程の破碎音によって掻き消された。

「ちょ、掠った！！ 掠ったぞ！？」

……正に、蹂躪。

無限に降り注ぐ剣嵐の前には橋周辺は疎か、区域内の現ゆる場所に
”影”の存在は許されない。
剣に撃ち抜かれた”影”が塵も残さず、たったの一撃で無へと還っていく。

生半可なモノでは、”影”を殺す事は不可能だ。
不死殺しの概念を帯びているか、消滅させられる程の火力が要求される。

だが、降り注いでいる剣にはどちらも無い……いや、必要としない。

剣が持つ属性は”解放”。

それは不死殺しとは違うモノだが、”影”に対しては例外となる。
死神の剣は”影”に対してのみ、接触しただけで問答無用に――
”解放”する。

「ぬおおおおおおおお――！！！！！！」

至近弾。至近弾。至近弾。

もう近くに”影”は居ないというのに、まるで嫌がらせかの様に”彼”の近くへ剣が降り注いでいる。

それもその筈。本来なら”彼”も死神の殲滅対象に含まれる。

しかし、今は対象から外されている……が、どうやら自動索敵に引っかかってしまっているらしい。

「ふざけんなああああああああ——！！！」

そんな”彼”の叫びが死神に届いたのか……それは分からないが、急に剣の雨が止んだ。

新都の方では今も豪雨となつてはいるが、そちらも月食の終わりと共に止むだろう。

……台風一過。

埃塗れとなつた”彼”が伏せていた歩道は、穴だらけと化していた。

「くっ……はは、ははははは……」

火が付いた爆竹をばら撒かれれば、こんな感じだろう。

と、場違いな感想を思い浮かべつつ、”彼”は伏せたままに笑っていた。

「まったく、もう……今に始まつた事じゃないけど、どうにかならないかしら、アレ」

「アレを呼び出したのはあんただろ？ 責任持つてなんとかしてくれよ」

「なんとか出来るならしてるわよ」

何者にも束縛されない自由人が相手だ。向こうが気紛れを起してくれない限り、どうしようもない。

「セイバーも無事みたいね。ま、アイツの傍なら大丈夫でしょ。新都に用事が有るって訳でもないし、私は帰らせてもらうわ」

彼女は『散歩にでも行かないか?』という”彼”の誘いを怪しみつつも、受けたただけだ。
蓋を開けて見れば、”彼”の誘いはこの為だった。これ以上は付き合う義理も無い。

「ああ、ありがとうよ。お陰さんでやっと新都に行ける」

「一つ、貸しよ? 高く付けておくから覚えておきなさい」

「うげ、マジか……じゃあ、士郎の方にツケといってくれ」

「ダメ。居酒屋じゃあるまいし、貴方が責任持って返しなさい」

「ちえ、けちー。ごうつくー。しゅせんどー」

先程の緊張感は何処へやら。子供染みた非難が上がっている。普段なら、そんなモノは彼女には通じないが……

「……なんか、士郎に言われてるみたいでムカツクわね」

「そりゃそうだ。”オレ”は士郎だからな」

中身は別モノでも、本人と完全に同一のモノだ。

姿が同じなら声まで同じ。そして、ある意味では中身も同じだった。

「……ああ、そういう事。士郎って、そんな目で私を見てたんだ」

「うむ。正確には違うが、そういう事だ」

例え普段は口が裂けても言えぬ言葉でも、”彼”にとっては関係の無い事。

そのせいで誰が誰に殴り飛ばされようが、我関せずだ。

あーめん。と、”彼”は本物の士郎に祈りを捧げながら十字を切った。

言うまでも無いが、コイツも最低である。

「まあ、いつか」

「なんだ、いいのか？」

「本人が直接言った訳じゃないし、私がお金に汚いのは事実だから。そう思われちゃっても仕方ないわよ」

「うわーつまんねー。ぶっ飛ぶの見て笑ってやろうと思ったのに」

「お生憎様。そこまで私も大人気無くないわ」

それじゃあ、と踵を返し、彼女は家路へと就いた。

橋の歩道は瓦礫だらけで大穴が開いていたりもするが、流石に足を踏み外して転落、なんて事は無いだろう。

”彼”はその背に声を掛けず、そのまま見送った。

「——さて、セイバーを回収して今日は……ありゃ？」

”彼”が振り返るとそこには、最初に降って来た剣が一本だけ突き刺さっていた。

他の剣は全て消失しているが、これだけは消える気配が無い。

ただ一振りだけ、穿ち立つ剣。それはまるで、選定の剣かのように見えた。

「……持つて行け、ってか？」

自身の天敵。自身を滅ぼし得る、唯一の剣。

それを”彼”が手にするとは、何とも滑稽な話だろうか。

だが、この剣は”影”に特効がある。

何故か今の”彼”には発動しなかったが、刃が触れただけで滅却するのだ。

利益は有れども不利益は無い。そう思い、”彼”は剣の柄を握った。

「——」

何事も無く、あっさりと剣は引き抜かれた。

一閃、二閃と空を斬り、剣の具合を確かめる。

「……まあ、悪かねえな」

剣が”鞘”に納められた。

とても合いそうにない形。されど二つは寸分変わらず一致した。

最初から、それが当たり前だったかの様に――

空には満月。雲一つ無く、星が輝いている。

担い手が独り、未だ見ぬ新たな道を切り拓いた。

道の先は希望か、破滅の終焉。

……それはまだ、誰にも分からない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0682m/>

無限に抗う反逆者

2011年3月10日03時59分発行